

詩人氣質

ユージン・オニール 作

能美武功 訳

(題名その他に関する註 原題は "A Touch of the Poet"。詩人氣質(かたぎ)は、以前からこの邦訳であつたが、無難なところと思う。次に、原文では、アイルランド訛りが出て来て、これがこの芝居の重要な要素となつてゐる。訛りで話すことが、一段下の階級に属す、或は、下品なこととして位置づけられてゐる。この翻訳では訛りを用いなかつた。日本におけるどのような訛りを用いれば、下品或は一段下の階級を示すことが出来るか、訳者には分らなかつたからである。最初のうち二箇所、鳥根県邑智郡市木の訛りを用いて翻訳を試みた場所がある(これはこの翻訳に残してある)が、とても成功するとは思えないので、それ以降は止めた。訛りなしでも何とか雰囲気を出そうと努めたが、今のところこれが精一杯である。)

場

第一幕

メロデーの居酒屋兼旅籠(はたご)の中にある食堂

一八二八年七月二七日 午前九時

第二幕

同じ 三十分後

第三幕

同じ その夜およそ八時

第四幕

同じ 真夜中

登場人物

ミッキー・マロイ

ジャミー・クリーガン

サラ・メロデー

ノラ・メロデー

コーニアス・メロデー

ダン・ロツシュ

パディー・オダウド

パッチ・ライリー

デボラ(ミスイズ・ヘンリー・ハーフオード)

ニコラス・ギャツビー

第一幕

(場) ポストンから数マイル離れた村の、メロデーの居酒屋の食堂。この居酒屋は百年以上経つもの。かつては駅馬車の朝食のための停車場で繁盛していたが、駅馬車が停止になり、この数年でさびれてしまつてゐる。)

(舞台に見える食堂とその左手奥にあるバー(これは観客からは見えない)は、昔は一部屋だつたもの。低い天井、重々しい櫃(かし)材で出来た梁(はり)、それに化粧板のつい

た壁。繁盛していた時代には、この大きな一部屋をタップルーム（酒場）と呼んでいた。その二部屋を現在仕切つてある壁は、やはり昔の壁を似せて、化粧板を使っているが、安物のため一層みすばらしく見える。（

左手前面に二段の階段。それを上ると扉。扉を開けると、踊り場になつていて、そこから二階へ通じる階段がある。その奥がバーに通じる扉。この二つの扉の間に、鏡がかかつている。バーへの扉の奥に小さなキャビネットが壁にくつつけて置かれていて。舞台奥に四つの窓。中の二つの窓の間に、通りに通じる扉。右手前面に扉。扉を開けるとホールになつていて、その先が台所と階段。（この階段は二階に通じる主階段。）右手前方にはまた、一脚のスツールが作り付けになつている学校の教師用の高い机。）

（舞台中央前面に、二つのテーブル。一つは中央左手。四つの椅子つき。一つは中央右手。もう少し大きいテーブルで、六つの椅子つき。中央、その少し奥に、六つの椅子つきの、中央右手にあるテーブルと同様のテーブル、二個。六つの椅子つきの三個のテーブルには、白いテーブルクロスがかけてある。中央前面左手の四つの椅子つきのテーブルには、テーブルクロスはかかっていない。）

（一八二八年七月二十七日、朝九時頃。舞台奥の窓に、太陽の光。）

（ミッキー・マロイが、前面左手のテーブルの椅子に坐つてゐる。舞台右手を向いている。新聞を眺めているところ。マロイは二十六歳。がっちりした体格。愛想のよい、いたずらな顔。口はいつもニヤニヤ笑い。少し意地悪そうな表情。）

（ジャミー・クリーガンがバーへ通じる扉を半分開けて中を窺う。マロイがいるのを見て、部屋に入つて来る。一目見てマロイと同様アイルランド人であることが分る。中年。背が高く、頬がこけて顎が突き出ている。片方の頬骨の辺りに刀傷。きちんとした服装。但し、古くて擦り切れている。目が血走つていて、気分が悪そう。しかしマロイにはニヤリと笑つて見せ、次の皮肉な挨拶を送る。）

クリーガン おお元気がいいな。元気なバーテンだ。

マロイ（同様に笑顔を返して。）早いですね。これはお早

い。

クリーガン 速いのは頭だ。（片手を頭に当て、唸る。）

参つた。頭の中に鍛冶屋がいやがる。ガンガン、ガンガン……マロイ 無理ありませんよ。今朝二時にここを出ていら

した時は、しこたま聞こし召してたんですからね。

クリーガン そうだろうな。出て行ったのを覚えてもないな。（テーブルの右手に坐る。）おお、お前さん、暇そうだな。

マロイ この時間には手すきですからね。

クリーガン 誰もバーにいないとなると、また一杯行きたくなるな。いや、迎え酒が必要なんだ。その癖、ズボンのポケットには一文もないと来ている。

マロイ こっちの持ちで一杯どうぞ。（食器棚に行き、ウイスキーのデカンターとコップを出す。）

クリーガン 有難いな。そうだ、「よきサマリア人」など、あなたに較べたら屁（へ）みたいなもんさ。

マロイ（クリーガンの前にデカンターとコップを置いて。）

タバ飲んでたものと同じやつです。親父専用の酒ですから。バーに出たくない時、緊急用にここに置いてあるんです。

クリーガン（かなり多く注いで。）コンに残しておいてやらなきゃ。あいつに酒が切れるようじゃ、大変だ。（コップを上げて。）お前の健康と、お前のやりたい事に、乾杯だ。・

・まあ、そいつが性質（たち）のいいものだったらな。（飲む。ほっとして溜息をつく。）有難いもんだ、ウイスキー。死んでも蘇らせてくれる。コンはまだ今朝は起きて来ないのか？

マロイ ええ、もう少ししないと起きては来ません。

クリーガン ここでコンにまた会うなんて、全く奇跡だ。

この辺りにやって来たのは、仕事を捜すためだった。そうしたら、コン・メロディーの話が出て来て、それで俺はここに来てみたんだ。来てみたら、本当にコンじゃないか。タバマで俺はコンの影も形も見ることがない。スペインでやったフランスとの戦争以来・・・ああ、一八二二年サラマンカの戦い以来だ。第七龍騎兵隊で、コンは少佐、俺は伍長だった。（誇り高く。）これはタラヴェラで受けた刀傷だ。運が悪いや、あいつの下で。指揮官がコンだったんだ。

マロイ タベそう言っていましたよ。

クリーガン（チラリとマロイを見て。）フン、俺が言ったか。しこたま聞こし召して、お祈り以上のことを話しちまったようだな、俺は。

マロイ（ニヤリと笑って。）お祈り以上・・・まあ、そうですね。

（クリーガン、心配そうにマロイを見る。マロイ、デカンター

をクリーガンの方に押し出す。）

マロイ もう一杯どうぞ。

クリーガン ただのみは好きじゃないんだ。フン、俺はこの居酒屋じゃ信用があるようだな？ コンの親戚が何かか？

俺は。

マロイ タベ親父が寝に上る時に、あんたに言った言葉を忘れたんですか？「いいか、お前がここでウイスキーを浴びる程飲んでも、それはお前の勝手だ。しかし、信用貸しはしないぞ。一文たりともだ。この店はな、紳士にしか信用貸しはしないんだ」と、あんたに念を押ししましたよ。

クリーガン 畜生、あいつめ！

マロイ（クスクス笑って。）親父が行った後、あんたは一人で考えこんでいました。その屈辱の言葉を。するとだんだん怒りが込み上げて来たんですよ。

クリーガン 糞っ！ あいつらしいや。昔からちつとも変わっちゃいない。（酒を注ぎ、マロイの顔を用意深く見ながら、一気に飲み干す。）コンのことを怒っていて、おまけに酔っ払ってたとありや、俺は嘘八百をぶちまけたんじゃないかな。

マロイ（狡そうに目配せして。）いや、あれは嘘とは違いますが、きつと。

クリーガン もし俺が、コン・メロディーの悪口を言ったとしたら・・・

マロイ おやおや、私が言いつけるんじゃないかって、怖がっているんですか？ 大丈夫です。言いやしません。誓いますよ。

クリーガン（ほっとした顔。）俺が何を言ったか話してく

れ。嘘か嘘じゃないか、言つてやるよ。

マロイ 親父さんの父親はアイルランドのゴールウェイ出身。しかし、よく話しているのとは違つて、貴族じゃなく、阿漕（あこぎ）な酒場の主（あるじ）だった。金を貸したり、店子から金を絞り取ったり、ありとあらゆる手で金を儲けた。一財産つくつた時結婚して、土地を買つて、獵犬を何匹か飼つて、貴族らしい暮らしを始めた。身を落ち着けたとたん、妻が死んで、その時親父さんを産み落としていた。

クリーガン そこまでは嘘はない。

マロイ その父親のメロディーと付きあう貴族など、誰もいなかった。しかし、メロディーは全くそんなことを気にしていなかった。息子のコンを、本物の紳士に育てあげようと決心して、ダブリンの学校へ送り込み、その後大学まで寄宿舎生活をさせた。貴族の息子達と対等に付き合わせるため、金にいとめはつけなかった。しかしすぐコンは気がついた。自分のツケで飲み、自分から金を借りて行く奴はいくらでもいる。がそのくせ、その連中はみんな、自分の成り上がり貴族ぶりを陰で笑っているんだと。

クリーガン それも本当だ。しかしコンは薄笑いをしている連中の胆を冷やして、二度と笑わせないようにした。連中の一人を呼び出して、そいつの尻に弾丸をぶち込んだのだ。これがコンの最初の決闘だった。これが彼に復讐の誇り高き味を覚えさせた。それから後は、誰かれとなく難癖をつけては決闘をしたのだ。

マロイ よく決闘の話をしては自慢していましたが、私は嘘だと思つていましたね。

クリーガン いや、決闘の話は嘘じゃない。ただ、それが仇で、最後にケチがついた。少佐に昇進してすぐのことだ。あるスペイン貴族の女に言寄つている所を、その亭主に見つかったのだ。サラマンカの戦いのすぐ後だった。決闘をやつて、その亭主を殺してしまった。えらい醜聞だ。その話が広まるのだけは抑えたが、コンは軍隊を辞める羽目になった。コンはサラマンカの戦闘でかなりの武勲を上げていた。だから助かつたようなものの、そうでなかつたら、軍法会議にかける所だった。（まづいことを言つたという表情。）いや、こいつはお祈り以上の話だったな。

マロイ 女が絡（から）んだ話なら、親父には珍しくありませんよ。酔つた時のあの人の話を聞くと、ポルトガルでもスペインでも、あの人に靡（なび）かない女などいなかったつて調子ですよ。

クリーガン あの頃のコンを見れば、お前さんでも納得がいったさ。雄牛のように強い。それに、軍服を着てサラブレッドに跨がったあの姿は、軍のどこを捜しても他にはいないハンサムぶりだ。それにあの頃のスペインとポルトガルでは、イギリスの士官と言えは、貴族の家で大持てだ。コンは運が良かった。イギリス国内じゃあ、相手に出来る女と言えは、インド人しかいなかったんだからな。（急いで付け加える。）いや、ノラは別だ。（声を低めて。）おい、この辺りでコンは女で問題を起してはいないのか？

マロイ 起してはいませんね。下らないアメリカ産の貴族の奴等は、親父さんが家にやつて来るのを拒んでいます。それから、アイルランド人も、この辺りに少しはいますが、親

父さんはその連中を、付き合う価値のない屑(くづ)だと思つていますから。でもこの家に、女房子供づれで誰かが一泊することになった時の親父さんの様子を見たら、それはお笑いですよ。女房でも娘でも、いい女だとなると、立派な紳士の成りをして連中に近づいて、挨拶をしたりお世辞を言ったり。それからその後、我々に自慢するんです。いくら現代風のアメリカ貴族の成りをしてたって、俺にその機会さえくれりゃ、あんな女ども、すぐにベッドに入れて見せる、と。

クリーガン いや、出来るな、コンなら。昔のコンを知っている奴なら、あいつがどんなに女のことを自慢しても何も文句は言わない。いや、女だけじゃない、決闘だって、博打(ばくち)だって、その他馬鹿なことなら何でも自慢出来る男だ、あいつは。あんな氣違いは、どこを捜したつていやしない。

マロイ(声を落して。)奥さんのノラのことだけど、あんたは夕べ、一言もあの人の話はしなかった。でもこれは話してくれなくても私はよく知っています。昔私はこの家に下宿していて、夜になると泥酔した親父がよく奥さんに怒鳴っていましたから。「お前と結婚するよつな羽目になったのは・・」ああ、これは何も奥さんのことを悪く言おうとして言っているんじゃないですよ。あんな素敵な女の人はまづいるもんじゃありません。勿論あんたはよく御存知の筈ですが。

クリーガン(あまりこのことには触れたくないという調子)うん、知ってる。俺はあいつの地所で育ったんだからな。

マロイ「お前と結婚したのはな、神父のやつらに嵌められたからなんだ」と。親父は坊さんが大嫌いなんですよ。だから。

ら。

クリーガン そのところは嘘だ。坊さんを嫌うのは勝手だが、嵌められたからじゃない。坊さんが本当のことを知っているから厭なんだ。あのコン・メロディーという男は、自分の厭なことは決してしない。他人が無理矢理やらせるなど論外だ。結婚したのは勿論惚れたからだ。しかし惚れたことを恥とも思つた。ノラはコンの地所に住んでいた娘達の中でも一番貧乏・・貧乏中の貧乏な娘だったからだ。しかし美人だった。一年中旅行して捜しても、あんな美人は見つからない。それにあの頃コンは、淋しかった。付き合う女はみんな商売女。そいつらがまたコンの財産を食い物にしている。(クリーガン、肩を竦める。)とにかくコンは、ノラと結婚して戦争に出て行つた。ノラは一人で城に留まり、子供を生んだ。その間コンは戦争に行つたつきり。一度も途中で帰つて来たことはない。例のこの後、スペインから送り返されると、コンはありつたけの財産をみんな金に替えて、ノラと子供のサラを連れてこのアメリカにやつて来た。自分のことを知っている人間が誰もいないこのアメリカにだ。

マロイ(暫く、言われた事を考えた後。)親父があつたノラを昔愛したことがあるというのは、なかなか私には考え難いですね。あの人の、奥さんへの扱いは私は見えていますから。とにかく話して下さつて有難うございます。いえ、一言だって私は言いませんよ。親父のためじゃありませんよ、奥さんのためです。

クリーガン(陰気に。)コンは怖い。あいつのために黙っているんだ。昔のコンの半分でも、俺達二人、簡単に息の根

を止められてしまう。

マロイ あんなにいつも飲んだくれてる癖に、まるで牛です。強いつたらありません。(クリーガンにウイスキーの壺を押しやって。) もう一杯どうぞです。

(クリーガン、注ぐ。)

マロイ さあ、ぐっと。

クリーガン お前の命に、乾杯だ。

(クリーガン、飲む。マロイ、デカンターとコップを食器戸棚に戻す。右手のホールの方から、女の声がする。クリーガン、飛び上る。早口に。)

クリーガン あれはサラだな？ 俺は出る。コンを夕べあんなに酔わしてしまつたからな。ここにいと叱られる。コンが下りてきたら、また来る。

(クリーガン退場。マロイもバーの方に行きかける。マロイもサラを避けたい様子。しかし、挑むように元の席に戻る。)

マロイ あんな奴が何故怖い。逃げるもんか！

(マロイ、新聞を取り上げる。サラ・メロディー、右手ホルから登場。)

(サラは二十歳 非常な美人。黒いたつぷりした髪。白い肌。

薔薇色の頬。美しい濃紺の目。貴族的な性質と卑俗な百姓の持つ性質の奇妙な混合がそこにはある。形のよい額。鼻は細くて真直ぐ。形のよい頭の両側に小さい耳。細い首。一方その口は、少し粗野で、官能的な味があり、顎は大き過ぎる。身体は優美で強い。堅くてしっかりした胸と尻。それに細い腰。しかし足が太く大きい。そして手が短くて太く、醜い。声は優しく、音楽的。しかし話をすると、時々自意識が勝つ

て、少し大袈裟になることあり。アイルランド訛りを隠そうとするために出て来る表現のためでもある。日常の仕事着は安物。しかし優雅に着こなしていて、飾らない美を感じさせる。)

サラ(マロイに一瞥を与え、皮肉に。)(忙しい最中に邪魔をして悪いけど、私に見せる帳簿は、もう出来ているのかしら?)

マロイ(不機嫌に。)(出来てますよ。机の上に置いてあります。)

サラ 有難う。(マロイに背を向けて机につく。机から小さい帳簿を取り上げ、数字を調べ始める。)

マロイ(新聞の上から目を覗かせて、サラを見て。)(利益を捜しているんなら、そんなものはありませんよ。親父が自分から飲んでいちゃあねえ。)

(サラ、これを見無視。マロイ、ムツとし始める。)

マロイ どうやら今日も、お嬢様気分だ。あのヤンキーの坊やがこの宿屋へ来て、具合が悪くなつて、二階で臥せつてからこつち、こちとらに声をかける暇なんぞ、ある訳はないつて顔だ。

(サラ、これも無視。)

マロイ あの坊やがこの湖の傍に住むようになって、男ならあいつつて心に決めていたんだ。この家で病人になるなんて、チャンス到来。自分を守る力もないぐらい弱りきつている時に、細工は流々という訳だ。

サラ(マロイの方に振り向いて、静かな怒りを籠めて。)(生意気に！ 他人のことに口を出せる身なの？ あんた。今

のこと、父に話すわよ。父のお仕置きがどんなものか、あんた分っているでしょう？

マロイ（この脅しを信じない。しかし、その可能性を考えてぞっとする。）ああ、脅かさないうで下さいよ。あんたが告げ口なんかしないのは、私はよく知っているんだ。（怒らないで欲しいと頼む口調で。）（本当にからかいつこなしですよ、サラ。）

サラ（数字の調べに戻って。）じゃ、サイモンのことからかうのもなしね。

マロイ ほほつ、サイモン。もう名前で呼ぶ仲ですか。参った、参った。（狡そうな目付きをして。）そうだなあ。そんなにツンケンしていなければ、いいニュースを教えてくださいるんだがな。

サラ まるで嗜好きのおばあさんね、あんたって。そんなもの、聞きたくもないわ。

マロイ あんたが裏の二階に上って、あいつに朝食を出した時、大きな馬車が来たんだ。黒人の馭者がその角で、その馬車を停めた。そこからヤンキーのレディーが出て来て、こつちに来たんですよ。私は掃き掃除をしていて、奥さんは台所の床をこすっていたんですがね。

（この時までにはサラ、マロイの方を向いている。今では全身耳になっている。）

マロイ その女は聞きましたよ。湖に行くにはどの道がいのかって。

サラ（ハツとなる。）ああ。

マロイ 私は教えましたね。でも、そっちには行かなかつ

た。辺りを見回して、お茶が一杯欲しい。ウエイトレスは？
って訊いた。何か、ハーフォードと関係があるらしいって、ピンと来ました。だってそうでなきゃ、湖の方へなんか行くこととする訳がない。あそこにはハーフォードしか住んじやないんだから。その女、お茶なんかちつとも欲しくはなかつたんだ。ただ、もう少しここにいたかつたんですよ。

サラ（怒って。）それで、ウエイトレスはどこだつて言ったのね。あんた、ちゃんと答えたんでしょね。そのウエイトレスはこのオーナーの娘でもあるんだって。

マロイ 言いましたよ。その女の態度、私は気に入りましたよ。あんたの態度も厭ですがね。私はムツとしていました。ウエイトレスは今散歩に行つてる。それに、どの道まだここは開いていませんから、と言つたんです。そうしたらまた馬車に乗つて行つてしまいました。

サラ（今では心配になつていいる。）あんた、その人のことをからかつたりしなかつたでしょうね、無作法な態度で。どんな人だつたの？ その人。

マロイ 美人でしたよ。まあ、好みはありますけど。蒼白い顔、華奢でほつそりした身体。それに大きい目。

サラ あの人と話している母親の様子とピツタリだわ。いくつぐらいだつたの？

マロイ 難しいですね、年は。でも、あいつの母親というには若過ぎるなあ。まあ三十ですよ。多分姉さんですね、じゃあ。

サラ 姉さんなんかいないわ。

マロイ（ニヤニヤ笑つて。）じゃ、昔の恋人だ。あんたを

捜して目ん玉を刳(く)り貫(ぬ)いてやるうって腹じゃな
いですか？

サラ 恋人なんかいたことないの、あの人は。

マロイ(嘲るように)。(ほほう、あいつがそう言った、そ
れであんた、真に受けているんですか。これは完全にホの字
だな。

サラ(怒って)。(人のことは放っておくことだね。そん
な馬鹿じゃないの、私は。(また心配になつて)。(あの人が
病気でここに寝てるって、言つて上げた方が良かったかもし
れないわ。暑い日ざかりに、森の中を馬車を走らせたりして、
無駄なことだもの。

マロイ そんなこと言える筈がありませんよ。あの人のこ
となんか、これっぽっちも出てきはしなかつたんですからね。

サラ そうね。言わないのがいけないのね。でも・・・ま
あ、考えてもしようがないわね・・・それに、本当にその人
が誰だつたか分つている訳でもないんだし。

(サラ、再び数字を調べ始める。サラの母親、右手の扉から
登場。ノラ・メロディーは四十歳。しかし長年の働き過ぎと
心配とで、実際の年よりずっと老(ふ)けて見える。昔は今
のサラと同様、美人だつたに違いない。目はいまだに美しい。

サラが引き継いでいる目と同じ。しかし、あまりに疲れてい
て、服装に時間をかけるだけの力がない。身体はブヨブヨし
ていて、胸は垂れ下がっている。古いドレスは袋のように、
ただぶら下がっているのを真ん中で紐で留めている。赤い手
はリウウマチで痛めつけられている。踵が潰れている仕事用
の破れた靴。それを靴下なしで履いている。しかし、この惨

めな格好にも拘らず、何か人から愛される、輝くものが身内
から染み出ている。優しさ、魅力、それに悲しみが加わつて
いる。しかしどこかに、びくともしない強さがある。)

マロイ(バツと立上る。愛情の籠った目つきで顔が輝く。)
ああ、有難い、お上さん。私は待つていたんです、お上さん
のことを。ちょっと私、煙草を買いに行つてゐる間、店をお
願ひしていいですか？

サラ(鋭く)。(駄目よ、お母さん、聞いてちゃ。

ノラ(微笑む。声は優しい。しかしひどいイングリッド訛
り)。(どうして？ どうして駄目よ、なの。

マロイ 有難う、お上さん。(後ろの扉に進み、開け、サ
ラに捨て台詞を言う)。(お生憎(あいにく)様でございまし
たね、お嬢様！

(マロイ退場。扉を閉める。)

サラ あんな奴の言つことをいちいち聞いてちゃ駄目よ。
すぐさぼろうとしているんだから。

ノラ そんなことないの。あの子はいい子よ。(中央前方
のテーブルの向こう側の、いちばん近い椅子にやつとのこと
で腰を下ろす)。(リウウマチが痛くてね。今朝は特にひどい
わ。

サラ(まだ帳簿の数字を調べている。母親に苛々したよう
な、しかし同時に心配そうな目つきを送る。母親に対するサ
ラの態度は、常に愛情と憐れみとそして苛々の混じりあつた
もの)。(何度言つたら分るの。医者に見せなさいつて言つて
るでしょう？

ノラ 医者にかかるお金なんかないのよ。それに、医者な

んで縁起が悪いの。どうせ持って来るものは死神よ。(間。
ノラ、溜息をつく。)お父さんが降りて来るわ。朝食に卵を
用意してあげなくちゃ。

サラ(きつい顔になる。そして辛辣に。)(卵なんか食べる
もんですか。

ノラ(父親の肩を持つように。)(夕べちよつと飲み過ぎた
からって言うの? でも仕方がないわ。ジャミーには長いこ
と会っていなかっただんだから。

サラ 夕べ? 夕べに限ったことじゃないでしょう? 毎
晩よ。

ノラ ああ、そんなに辛くあたらないで。(間。心配そう
に。)(ネイランが請求書を持って昨日やって来たわ。今週末
までには払ってくれなきゃ。さもないと、もう食料品は持つ
て来ませんって。(溜息をついて。)(無理もないわ。どうし
たらいいかしら。抵当に入れている利子分だけは取っておか
なくちゃ。それだけは大丈夫、有難いことに。

サラ(苛々と。)(私にお金をらせてくれさえすればいいの
よ。

ノラ(それだけは譲れない、ときっぱり。)(駄目よ、それ
は。あなたとお父さんが掴みあいの喧嘩になるだけ。それも
朝から晩まで。そうでなくてもあなたとお父さん、しょつ中
唾(いが)み合っている。

サラ どうしてネイランに先週末払わなかったの? その
分のお金はとってあるって言ってたでしょう?

ノラ とってあったわ。でもディキンスンが来てね、馬の
飼料のことであれこれ言ってお父さんを責めるもんだから。

サラ(怒って。)(やっぱり! 馬が第一。人間のパンがな
くなくても構いはしないんだから。たいした紳士! アメリ
カでサラブレットを乗り回さなきゃ気がすまないなんて。

ノラ(父親を庇(かば)って。)(そのどこが悪いの。あの
馬はお父さんの誇りなの。あれを売るなんて、お父さんの胸
が張り裂けるでしょう?)

サラ そうよ。馬の方が大事なの。私達一人よりはね!

ノラ そんなこと言わないの。あなたは大事なのよ、お父
さんにとつて。いつもあなた、お父さんを怒らせてばかりい
るけど。

サラ 私が大事? お父さんにとつて? 冗談でしょう。
馬鹿みたい!

ノラ(鋭く。)(何て言葉! それ。お父さんが悪い言葉が
お嫌(きら)いな、よく知っていますでしょう? 私だつて、
嫌い。それに、言葉が直せないなんて言わせませんよ。紳士
の娘らしく、ちゃんとした言葉が話せるようにと、あなたを
学校に入れたんですからね。

サラ(ふくれて。しかし、言葉には気をつけて。)(入った
けど、すぐ止めたわ。

ノラ あなたでしよう? 止めるって聞かなかつたのは。
サラ お母さんが可哀相だったからよ。奴隷みたいにお母
さんを使って。お父さんたら、何の愛情も敬意もないの、お
母さんに。私にはお母さんにあるわ、愛情も敬意も!

ノラ(優しく。)(分ってるわサラ、分ってる。

サラ(苦い軽蔑の気持で。)(ウエイトレスは雇えないけど、
サラブレットは飼えるのよ。乗り回して、自分を見せびらか

すためにね！ それから、バーテンは雇えるのよ。ちゃんと経済を考えれば、自分がバーテンをやつて、店を切り盛りするのが一番なのに。

ノラ（聞くに堪えないという表情。）お父さんが・・・紳士が・・・バーテン！

サラ 紳士！ まあま、お母さん。世間に対してお母さんと私がお父さんを紳士だというふりをするのはいいわよ。それが世間に対する誇りでもあるでしょう。でもね、私達二人だけの時、そんなことを言つたんで、どうかしているわ。

ノラ（頑固に。）いいえ、紳士ですよ、お父さんは。嘘じゃありません。大きな地所のお城で生まれたんです。そして大で教育を受けて。それに、ウエリントン卿の軍隊で将校をしていたんですからね。

サラ いいわ、お母さんがそう言うのなら。勝手にお父さんの氣違いに付き合つていけばいいでしょう。でも私は厭。お父さんの正体を知らないなんて顔はとても出来ない。お父さんがしろと言つたつて、そんなふり、決してしないわ。

ノラ お父さんが嫌いなね、その口ぶり。恥を知りなさい！

サラ お母さんをあんな風に扱つたんで、お父さんなんか嫌い。タベだつて、過去のことをほじくり返して、お母さんと結婚したのが失敗のもどつたなんて、何ていう言い草！

ノラ（惨めな氣持。しかし抗議して。）飲んだ勢いな、あれは。本心じゃないわ。

サラ（苛々と。）お母さんこそ恥を知るべきなのよ。もっと誇りを持つべきなの。輕蔑されても羊のように押し黙つて。

あんなに奴隷みたいにして尽すから、お母さん、年よりも早く老けてしまったの。（怒つて。）もう尽してやることなんかないのよ！ いい？ これからだつて、どんどん意地悪くなるばかりよ。別れた方がいいのよ、あんな人とは。

ノラ（怒る。）何てことを！ お黙りなさい！

サラ 今日でも出ればいいの、もしお母さんにちよつとでも誇りがあるのなら！

ノラ 私には誇りがあるの！ それはあの人に対する愛。私はあの人を見たその時から、あの人を愛した。私は死ぬまであの人を愛するの！（お前には何も分つていない、という奇妙な強い言い方で。）お前には愛するということが分つていない。これからだつて分りつこないの。あの人のお前がに引き継がれて、お前にはあの人嫌らしい誇りつていうものがある。その誇りが邪魔して、愛が出来なくなつてゐるの。何かもみんな捨てて尽すつていう愛がね。それこそが愛つていうものなの。

サラ 何もかも捨てて尽すわよ、私だつて。その氣になりさえすれば。でも・・・

ノラ その氣に！ なりさえすれば！ 何を言つてゐるの。それこそ愛を知らない証拠じゃないか。「その氣に」だとか、「なりさえすれば」だとか、考へてゐる暇はないの、愛は。地獄の火が、二人を切り離してゐても、相手と一緒にゐるために喜んでその中に飛び込んで行くの。自分の身がその火で焼け焦げて、喜びの歌を歌つて。ただただ、相手の唇がお前の唇に触れることを夢みて！ それが愛。私は誇りを持つてゐる。その大きな悲しみと、大きな喜びを知つてきたから。

サラ（さすがにこの言葉には心を動かされる。奇妙な、尊敬の目で母親を見て。）お母さん、お母さんて、奇妙な人！（サラ、衝動的に母親にキスする。）それに、偉大な人！（再び挑むように。頭を傲慢にぐいと持ち上げて。）私だつて愛すわ！でも、その愛が自由を与えてくれるものでなくちゃ。奴隷の生活になるようだつたら愛すもんですか。

ノラ 愛していたら、奴隷の生活なんてないの！（急に高揚した表現が類（くづお）れ、ノラ、泣きだす。）お願いサラ、私から愛の誇りを奪わないで。私にその誇りがなくなつたら、私はただの醜い、肥つた、病気で年とつた、本当にただの女。

サラ（片手を母親に回して。慰めるように。）いいのよお母さん、私のことは気にしないの。（突然、母親の気持を変えるために。）この帳簿を終らせなくちゃ。ミッキーの奴、足し算さえ満足に出来ないんだから。（机に行き、数字をチェックし始める。）

ノラ（涙を拭く。問の後、心配そつに溜息をついて。）お前のお父さんのことで私は心配なの。フリン神父様が、昨日道で私を止めて言つたわ。ここに住んでいるアイルランド人達のことを馬鹿にして、「カス、カス」と呼ぶのは止めにして、痛い目に会つて。民主党のジャクソンに反対して、ヤンキー達の党のクインスリー・アダムズの味方をするなんて、何というけしからん奴だつて、怒っているそつなの。

サラ（軽蔑の意を籠めて。）全く、あの人達にも呆れるわ。冗談つてものが分らないのかしら。お父さんが、どういう出か、それを考えれば、民主党に反対してヤンキーの貴族を応

援するなんて、全く馬鹿な話じゃない。それに、お父さんが初めてここへ来た時、詐欺同然で金を騙し取つたのはあのヤンキーの貴族達なのよ。ここに駅馬車が停ることになつているなんて話をして、この宿屋を買わせたんですからね。（苦い笑い。）そう、アメリカ移民中最大の力もよ、お父さんなんか。私、お父さんがだらしないって心底思つのはそこの。

お父さんがアメリカに渡つて来た当座、お父さんだつたら、何でも出来た筈。いつでも吹いている法螺（ほら）通りのことが出来たのよ。大抵のヤンキー達よりはお父さんの方が何倍も教育があつて、お金だつてうんと持つて来ていた。それに、このアメリカつていうところ、下層民からだつていくらでも上に上れるんですからね。それから金と力がありさえすれば、どんなに上に上るうと誰も羨（うらや）みはしない。（心から。）ああ、私があのお父さんだつたら、私が叶¹えられない夢なんてなかつた筈だわ！

（サラ、母親を見る。ノラはじつと他のことを考え、気落ちした様子。サラの話は聞いていない。サラ、一瞬苛々つとす。しかしそれから、同情を籠めて微笑む。）

サラ お母さんたら、丸で何も聞いてくれやしないんだから。ほら、目を醒して。何なの？ 今度は。

ノラ フリン神父さん、また私に言つたわ。私は地獄に落ちるつて。だつてそつでしよう？ お父さんの言つままになつて私もお前も、異教徒になるんだから。

サラ（頭を傲慢にぐいと持ち上げながら。）フリン神父さんなんか、自分の頭の蠅を追つていればいいの。何よ、お母さんにお伽（とき）話をして怖がらせたりして。

ノラ でも、地獄落ちは本当の話だわ。

サラ 本当の話！ 呆れたわね。フリン神父さんに言っ
てやればいいのよ。あなたがいいように騙しているところ
の掘立て小屋のカス連中と、私達とは違うんですからねっ
て。（サラ、突然話題を変える。ミッキーの帳簿をバタンと閉じ

て。）さ、これでお仕舞い。（帳簿を机の中に入れる。）店
まで散歩に行つて、ネイランと話して来るわ。出来るかどう
か分らないけど、おべんちゃらを言つて、支払いを一箇月延
ばして貰うわ。

ノラ（感謝して。）ああ、お前なら出来るわ。木にとま
つてゐる鳥だつて、お前がその気になれば言う通りになる。で
も、ヤンキーにおべっかを使わせるのは気の毒。私ならいい
けど、お前はどんなに厭か、私は知っているもの。

サラ（両腕を母親に回して。優しく。）私、ちつとも構わ
ない。それでお母さんの死にそうに心配していることが軽く
なるなら。（キスする。）他所（よそ）行きの着物に着替え
るわ。相手をいい気分にさせた方がいいもの。

ノラ（擲（からか）うような微笑を浮べて。）いい気分に
させるのはネイランだけじゃないようね。最近お前、他所行
きに替えるの、しょつ中よ。

サラ（シナを作るように。）まあ、狡いわお母さん、そん
な風に見ているなんて！ ええ、そう。そうかもしれないわ、
私。

ノラ 今朝、朝食を持って行つた時、あの人どうだつた？

サラ お腹をすかせていたわ。それはいい徴候。夕べは熱
がなかったの。恢復してきたのよ、順調に。湖のあの小屋に

帰れる日もそう遠くないわ。

ノラ あの人がこの一年間やってきたことつて、何なの？
私にはさっぱり分らない。乞食のような・・・良く言つて
何でも屋みたいなことをやって生きてきて・・・金持ちの紳
士の息子だつていうのに。

サラ（優しい微笑を浮べて。）紳士だなんて一括（くく）
りに出来るような人じゃないの、あの方は。ええ、そう言え
ばどんな種類の人間でもないわ。たーくさん夢があつて、そ
の夢が全部本気なの。もう以前話したけど、ハーバードを卒
業して一年間、父親のところ働いたんだけど、止めちゃつ
たの。商売なんか自分の仕事にしたいくない、だつて。世界
中と取引があるのよ、お父さんの会社は。それに、自前の船だつ
て沢山あるし。

ノラ（それを認めるように。）本当の紳士ならそう考える、
ものだけ・・・¹²

サラ 荒地地の中であつた一人で生きて、自分の独立を証
明したかつたの。自分の小屋を建てて、自分の事は自分でし
て、自活する。そして、自然と一体になつてみたい。それか
ら人生の意味に関する偉大な思想に思いを馳（は）せ、それ
について本を書く。どうすれば人々が金や土地に執着せず、
少しのもので満足し、平和と自由の中で暮せるようになる
か。どうすれば、そのような世界にこの世を変えられるか。

それは結局、この世に天国を作ることなんだけど。（サラ、
優しさを籠めて笑う。・・・少し嘲りも含まれている。）全
部は私、覚えていない。気違（あやま）りじみた考えよ。人間で、そう
いうものじゃないもの。あの人まだ、一行だつてそれについ

て書いていない。ただ覚書だけ。（媚態を含んで、微笑。）
この二三箇月、あの人の書くものって、みんな愛の詩。

ノラ 二人で湖の畔（ほとり）に長い散歩に行くようになってからね。（微笑む。）そう、狡いのは私じゃない、お前の方よ。

サラ（笑つて。）ええ、散歩に行つたつて、ちつとも悪くはないわ。あそこは私達の土地ですもの。（嘲りの調子に變つて。）お父さんがここに來て買つた土地！ アメリカの財産を自分のものにするんだつていつ意気込みで。たいしたもの。ただ詐欺にあつただけなんだから。ほんの少しの農地……今じゃ誰も何も作れやしない畑……それにあとは、何の役にも立たない荒地地！ 誰かにただでやろうつて言つたつて、受け取り手もいやしない。

ノラ（宥めるように。）もう止めて。（話題を変えて。）
そうね、あのハーフォードの息子、確かに詩人の氣質（きしつ）があるわ……（思わず次の台詞を言つてしまふ。）お前のお父さんと同じ。

サラ（唾棄（だき）するように。）何言つてるの！ お母さん。パイロンを吟じれば、もつそれで詩人？ 呆れた！

ノラ（左手の扉に心配そうに目をやつて。）ちよつと！
お父さん、いつ入つて來るか分らないわよ。（話題を変えて。）
あのハーフォードの若いのが、お前に惚れてきたのね？

サラ（勝利に顔が輝く。）惚れてきた？ あの人もう、頭の天辺から足の爪先まで、どつぷり私に惚れているのよ。気が小さいからまだ何も私には言つてないけど、それもそのうちよ。

ノラ お前も惚れているんだね？

サラ（あつさり。）ええ、そう。（すぐに付け加えて。）
でも、どつぷりとじゃない。男の奴隷になるなんて厭。それほどに惚れないの。私、あの人を騙さない。そして私自身も騙さない。丁度それぐらいの強さで、あの人を愛すの。（きつぱりと。）だつてお母さん、私、あの人と結婚するつもりでいるんだもの。あのひととの結婚、それは私が世に出るチャンス。それを誰にも邪魔させはしない。

ノラ（感心して。）あらあら、随分自信があるのね。でも、あつちの家族、ヤンキーの貴族よ。貧乏なアイルランド人の女と結婚すると分つたら、父親は一銭も与えずにあの子を放り出すわ。

サラ 最初はね。でも私がどんなにいい妻になるか、それを見れば、私との結婚を喜んで認める筈。私には分つていないの、サイモンだつて、父親のことなんか問題にしていない。私が心配しているのは母親の方。母親にはあの人が、随分影響を受けている。ひどく變つた人らしいの。サイモンの話から分るわ、私。暮し方からして變つていて。決して外に出ないで、自分の家に籠りつきり。本を読んだり、庭仕事をしたり。（間。）今朝馬車が來たの、知つてるの？ お母さん。

ノラ（他のことを考えている……心配そうに。）「取らぬ狸……」は駄目よ。ハーフォードの若旦那……それは身持ちはいいだらうけど……でも、あの人の本心が結婚にあるか……ねえ？

サラ（怒つて。）あの人の悪口を言つて欲しくないわ、お母さん。そんないい加減な氣持で……（苦々しく。）きつ

とお母さんはあの人が私の・・・（「身体だけを」と言いかけて止める。恥ぢて。）ご免なさいお母さん、でも本当にあの人のことを悪く取っちゃいけないわ。（微笑んで。）だってお母さん、知らないんでしょう？ そう、誘惑っていう話になつたら、私の方があの人を誘惑するしか手はないのよ。私のことをマリヤ様みたいに崇（あが）めているんだから。私が出て来るところは、あの人（の）詩と日記。あの人（の）小屋を掃除しに行った時、私、日記を覗いたの。自分の罪深い気持ちに対してそれがどんな侮辱になるか、それをとて恥ぢてゐるわ。（優しく笑う。）

ノラ（微笑む。しかし、少しシヨックを受けて。）いけないわ、そんなこと。あの人（の）が病気だからって、部屋にまで入るのは良くないわ。二人が顔を合わせて話すだけでも大変なことよ。

サラ 人がどう思おうと、そんなことどうでもいい！ 私の知ったことじゃない。それに、サイモンだって。あの人、優しい顔をしているけど、他人にあれこれ言わせたりしない。あの人（の）の詩、それに夢、その後ろにあるものを私、感じとれる。あの人（の）は自分のやりたいことは何でもやっつてのける。だから、父親があの人（の）を放り出したって、私とあの人（の）二人だけで立派に世に出て行ける。私だって馬鹿じゃないの。

ノラ あらあら、たいしたもの。立派な考えを持つてるのね。

サラ（笑つて。）そう、たいしたものよ、私って。（それから苦い調子で。）立派な考えを持つて生きるしか他に道はなかつたわ。頭を上げて、誇りをもって生きるには。だって、

ウエイトレス、それに宿屋の下女として奴隷のように働かなきゃいけないんですものね。父親を紳士らしく毎晩飲んだくれさせるために！

（左手の玄関の扉がゆっくりと開き、コーニアス・メロディー登場。二段のステップの上の、扉のところに立つ。メロディーとサラ、睨み合つ。サラ、憎しみて身体を強張（こわば）らせる。口は軽蔑を込めて堅く閉じられる。一瞬メロディーの目、揺れて、すまなそうな表情が現れる。次に無表情な顔になる。メロディー、段を降りて、頭を下げる。・・・陽気に。）

メロディー お早う、サラ。

サラ（ぶつきら棒に。）お早うございます。（それから、メロディーを無視して。）お母さん、私上に行つて着替えて来るわ。（右手から退場。）

（コーニアス・メロディーは四十五歳。背が高く、肩幅が広く、大きな胸、長い筋肉質の腕、大きな足、大きな毛の生えた両手。見るからに筋力のある男。骨太の身体は、まだ頑丈でしつかりしており、兵士として勤まる。少し震えはあるが、それ以外にはアルコールによる悪影響は見えない。雄牛のような、疲れを知らない力。強い、百姓の持つてゐる生命力。ただ、飲み過ぎによる影響は、その顔に現れている。それは荒廃した顔、かつては怖（おそ）るべくハンサムだった。・・・無鉄砲で傲慢な人間に特有の美男だが・・・その顔は今でもまだハンサム。苦い気持をもつたバイロンの顔・・・他人を圧倒し、また侮蔑している官能的な口、その上にあるくつきりと際立つた鼻、蒼白い窪んだ頬、ふさふさしている巻き毛の白髪（の）の混じつた髪（の）毛。その表情には際立つて破滅的な

もの・・・蔑(さげす)まされた自己の誇りをじつと心のうち溜め込んでいる・・・がある。血走った灰色の目は冷たく相手を見据え、自分への侮辱を警戒しているかのようである。態度物腰は、洗練された紳士のもの。但しあまりにもそうである。その洗練された紳士を演じ過ぎるため、人はすぐ彼が本当の自分より以上に、その演じている役の方が本物になってしまった人物だ、と感じてしまう。しかしそういう欠点にも拘らず、彼には、人に良い印象を与える何ものかがある。衣装はおしゃれで優雅。半島戦争(Peninsula War)時代に、イギリス貴族が着用した、古い高価な、仕立てのよい衣服。)

メロディー (部屋に進みながら・・・礼儀正しく妻に挨拶する。)
お早う、ノラ。(謙へりくだ)った調子。但し、あくまで身分の下の人間に言う態度。)

ノラ (立上る。おづおづと。)
お早う、コン。今、朝食をお持ちしますわ。

メロディー いや。有難う。今は何もいらない。

ノラ (夫に近寄って。)
顔色が悪いわ。気分が悪いの？

コン。

メロディー いや。

ノラ (夫の腕に片手をおづおづと置いて。)
さあ、どうぞ坐って。

(メロディー、本能的にその手を振り払って、中央前方のテーブルに行き、ノラが先ほど坐っていた椅子に坐る。ノラ、夫につき纏(まと)うように従い。)

ノラ タオルを冷たい水で冷やして来ます。頭をそれで巻

きましよう。

メロディー いらん！ 何もすることは無い。ニュースが読みたい。私を放っておくんだ！(新聞を取り上げ、持ち上げる。ノラから顔を隠すため。)

ノラ (大人しく。)
ええ、分りました。

(ノラ、右手の扉に進む。しかし、心配そうに振り返り、メロディーをじつと見つめる。メロディー、左手で新聞を支え、顔を隠し、右手でテーブルの上の水差しに手を延ばし、コップに注ぐ。ノラは見えていないが、彼女のことをひどく意識している。右手、あまりに酷く震えるので、コップを唇まで持って来る時、水がこぼれて手にかかる。メロディー、コップをテーブルに叩きつけるように音をたてて置く。新聞を下げ、苛々と大声を上げる。)

メロディー 何だ！ 見つめるのは止める！

ノラ 私・・・私、あなたが少し何かを召上れば楽になるんじゃないかと思って・・・

メロディー さっき言ったばかりだぞ！(癪癪(かんしゃ)く)をやつと抑えて。)
私は腹は減っていないんだ、ノラ。

(メロディー、再び新聞を持ち上げる。ノラ、溜息をつく。両手でエプロンを握る。問。)

ノラ (ぼんやりと。)
迎え酒がいいんじゃないかしら。

メロディー (この一言が聞きたかったらしい。表情に緊張のほぐれるのが見える。しかし、返事は次の立派な答。)
いや、アルコールはもう駄目だ。良心にかけて、私の決心を言おう。私はもうこれ以上飲まない。それに、まだ日は早い。

ノラ 迎え酒で、もし食欲が出るんだつたら・・・

メロディー 正直のところ、私の胃は普通じゃないからな。
(唇を舐める。)一滴ぐらい飲んで毒にはならんぞ。

(ノラ、食器戸棚からデカンターとコップを取って、メロディーの前に置く。諦めの、悲しみの表情でメロディーを見つめる。メロディー、目は新聞の方に向けているが、はっきりとノラの視線を感じ取っている。彼の神経はそれに耐えられない。メロディー、新聞を投げ下ろし、怒って怒鳴りつける。)

メロディー エーイ、分ってるんだ、お前の考えていることは！一度くらいはそいつを口に出して言ったらどうなんだ！その方がこつちだってお前に対して尊敬の念が湧くというものだ。いじいじしているっていうやつが、私は一番嫌いなんだ！実際私は時々思うことがある。お前は私をわざと怒らせて面白がっているんだと。そうだろう。それでお前は私より一段上に立っていると思ってるんだ！

ノラ(面食らって。涙が出そうになって。)そんな……違います。そんな風にお考えになって、お気がすむのなら……でも、違います。私、決してそんなこと……

メロディー(表情が変わる。本当の愛情がその目に現れる。震える手を差し伸べてノラの肩を叩く。奇妙な優しさの気持ち。次の台詞は静かに、心から後悔して言う。)(許してくれ、ノラ。今の言葉は本当にいけなかった。

(ノラの顔、パッと明るくなる。突然メロディー、恥ぢたことを恥ぢる。目をそらせ、デカンターを握る。震える手であるにも拘らず、コップにちゃんと注ぎ入れる。コップを握り、口まで持ってきて来て、飲む。それから椅子の背に凭れ、テーブルをじつと見つめる。アルコールが効いて来るのを待つ。間

の後、「助かった」という溜息。)

メロディー こいつは私には薬のようなものだ。やっと心地がついた。(もう一杯。今度は大量に注ぐ。手は震えていない。さつきより楽に飲み干す。舌つつみをうつ。)(神もご照覧あれ、だ。落ちぶれて宿屋などをやっているが、狡いことはしていないぞ、この私は。ウイスキーは一級品を置いている。紳士の飲み物として恥づかしくないぞ。)(新聞を再び眺め始める。何かに顔を顰め、軽蔑するように、新聞に書かれているバイロンからの引用の誤りを強調しながら。)

「そこであんな奴はただ腐るに任せておくんだ。野心に踊らされた馬鹿、不名誉な奴め。」アンドルー・ジャクソン！何て奴だ。あの馬鹿がこのところ書きまくっている。みんな嘘っぱちだ。語るに落ちた酔っ払いのゴロツキめが！それでも次の大統領は奴の手の内にある。こちらがいくら阻止しようとしても駄目だ。全くこの世紀末の世の中め。呪われた時代だ。至る所で人間のカスが最高の地位についてゆく。(新聞の日付に目がとまる。突然げんこつでテーブルを叩く。)
今日は二十七日じゃないか！エーイ、忘れるところだったぞ！

ノラ 忘れるって？

メロディー タラヴェラの記念日だ。

ノラ(急いで。)まあ、私も馬鹿だわ。忘れていたなんて。メロディー(苦笑しく。)(私自身だって忘れていたぐらいだ。無理もない。こんな掃き溜めにいちゃあ、あの輝かしい日も遠くなる。あの日はウエリントン伯爵が……いや、あの頃はまだウエレスリー卿だった……この私の勇気を全軍

の前で誉め讃えてくれた日だ。(部屋を侮蔑の目付で見回す。)
全くあの日ももう遠い。忘れた方がましだ!

ノラ(夫を焚き付けるように。)(駄目よ、忘れるなんて。今までだってお祝いを欠かしたことはなかった。今日だってお祝いをするのよ。いつものように夕食は特別に用意するわ。)

メロディー(急に態度が変わる。熱心に。)(いいな、それは。ジャミー・クリーガンを招こう。彼がここにいるとは運がいい。タラヴェラでは、お前も知っているが、あいつは私の下にいたんだ。紳士ではないが、勇敢な兵士だった。あれは私の右に坐らせよう。そうだ、パッチ・ライリーに音楽をやらせよう。オダウドにロツシユもだ。やくざな奴等だが、時々はひどく笑わせてくれる。しかし席はあっちだ。(左前のテーブルを指す。)(お情けで来させるには来させるが、同じテーブルで食うところまでは譲らない。)

ノラ トランクからあなたの軍服を出してくるわ。夕食の時に着て。毎年やるように。

メロディー うん。正直のところ、あれを着る口実があるのは有難い。あの頃の私が、少なくとも幽霊としてぐらいは感じる事が出来るからな。

ノラ 幽霊なんかじゃない。あれを着ると本当にあなた、美男子よ。どんな女だって、その姿には引きつけられてしまう。

メロディー(嬉しそうに微笑んで。)(今朝のお前は口がうまいようだな、ノラ。(それから、威張って。)(しかし、お前の言う通りだ。あの頃ポルトガルでもスペインでも・・・(言い止む。恥づかしいという表情。しかしノラは抗議する

様子全くなし。メロディー、ノラの片手を取り、優しく叩く。ノラの目は避けて。(お前は世界一優しい心の持主だ、ノラ。そしてこの私ときたら・・・(ぐっと胸に来て、言葉が詰まる。)

ノラ(すぐに涙が溢れそうになって。)(そうよ。女であなたに目を向けないような人なんかゴン、一人も・・・(ノラ、片手で目を拭う。急いで。)(買い出しに行つて来るわ。何か美味しい物を。(思い出してノラの顔、急に暗くなる。)(でもどうしましょう。お金が・・・)

メロディー(身を堅くして・・・傲慢に。)(金? いつから私への信用がなくなつたというのだ。)

ノラ(急いで。)(ああ、怒らないで。何とかするわ。(メロディー、新聞に戻る。金のことに頭を使う自分ではない、という態度。)

メロディー ハッ! バルティモアの鉄道工事が進んでいるようだな。(新聞を下ろして。)(全くの話が、私がここへ来た早々、あんなお人好しの馬鹿でなく、ヤンキーの盗人(ぬすつと)奴(め)らに有り金全部騙し取られるようなことをしていなければ、これこそ私の投資先なんだ。さぞ金持ちになっていたろう。近視眼の馬鹿者どもが運河に通う船で輸送力は充分だなどと戯(たわ)けたことを言っていたが、宏大なこんな国では、鉄道を引かなきゃならないことぐらい、目に見えている。鉄道を引けば、アメリカは豊かで偉大な国になるのだ。それもアツという間にだ。(顔の表情、憎しみに満ちたものになる。)(次の戦争でイギリスを叩き潰せるぐらいにだ。そう、イギリスとの戦いは避けられん。それは分つ

ているんだ。その勝利を祝う日まで生きていたいぞ、私は！
私の人生でたった一つ後悔することがあると言えば……いや、後悔することはかりだ、私の人生は……しかし、その中でも最大のものは、後で私の体面を汚すようなことしかなかった国のために、血を流して戦ってやったことだ。しかし私は必ず仇（かたき）をうってやる。この国……今では私の国だ、これは……この国はあのイギリスの奴らを地球の表面から追い出してくれるぞ！ 奴らがその恥知らずな裏切りで汚した、この地球の表面から！

ノラ そうなったらいいわ。そしてアイルランドを解放するの！

メロディー（軽蔑したように。）アイルランド？ あんなものを解放して何の得がある。勿論アイルランド人を追放するのならば別だが。（それから苛々と。）しかし、何だこれは。こんなことを何故お前と議論しなきゃならん。

ノラ（慎（つつ）ましく。）すみません。私は無知ですから。

メロディー 私はお前を教育しようと手をつくしてきたんだ。アメリカに来てから……それが無駄なことだと分るまでな。

ノラ ええ、手をつくして……私も一生懸命……でも……

メロディー お前はその糞忌々しい田舎なまりも直そうとしないじゃないか。それにサラもだんだん悪くなってきている。

ノラ あの子が田舎のなまりを使うのは、あなたを擲（か

らか）うためですわ。その気になればあの子は、この国のどんな貴婦人にだって負けない立派な英語を話すんです。

メロディー（聞いていない。自分の考えに閉じ籠って。）馬鹿な、一体私が何者だというんだ。私が誰かを何かで責める……そんなことがどうして出来るというんだ。お前は何か私に言わないのだ。御自分の身を振り返って見ろと。

ノラ 私……そんなことを今まで言ったことはありませんわ。

メロディー（じつとノラを見つめる。再び心を打たれる。……静かに。）ない。お前がそんなことをしないのを、私は知っている。（目を逸らす。……問の後。）夕べのことは私が悪かった。謝る。

ノラ いいの。忘れて。

メロディー（わざと取り繕って、軽い調子で。）いや、飲み過ぎた。ジャミー・クリーガンと昔話に花が咲いて。

ノラ ええ、そうね。

メロディー ちょっと調子に乗り……昔話をやるとどうも……つい厳しくなって……しかし分ってるな？ あれは酒の上での話だ。たとえお前に辛く当たってもだ。

ノラ ええ、分ってますわ。

メロディー（心を打たれて。片手でノラの身体を抱いて。）お前は優しい……優しい女だよ、お前は……優しく過ぎる。（ノラをキスする。）

ノラ（これ以上ないという幸せな気持。）ああ、コン……あなた……あなたが暗い気持で喋っている時の話なんか私、ちっとも気にしない。ね？ 分っているでしょう？ 私があ

なたを愛しているのは。

メロディー（突然気分が变つて顔を顰（しか）める。嫌悪の感情が爆発する。ノラを引き離して突き放しながら。）何だ一体！ 何故お前は髪を洗わないんだ。ニンニクの臭いだ！

それに、シチューだ！ むかついて、反吐が出そうだ！

（デカンターに手をのばし、震える手で一杯注ぐ。ノラ、まるで彼に殴られたかのような表情でそれを見る。）

ノラ（やつことのこと。）私、出来るだけ洗ってる。あなたに気に入るようになって。でも私、一日中竈（かまど）の前に立ちっぱなしで・・・だからどうしても・・・

メロディー すまない、ノラ。今言ったことは忘れてくれ。どうも神経が苛立っている。私を一人にしておいてくれ。

ノラ（少し明るい顔になって。）朝食、召上る？ 新鮮な卵があるの・・・

メロディー（ノラから離れられる好機だと・・・性急に。）じゃ、頼む。もう少ししたら出してくれ。十五分後だ。しかし今は一人にしておいてくれ。

（ノラ退場。メロディー、注いだウイスキーを飲む。立上り、あちこち歩き始める。両手を腰の後ろに組んで。ウイスキー三杯の効き目が出て来て、彼の顔はだんだんと傲慢に、自信に溢れたものになって来る。左手の壁にある鏡に写る姿に目をとめ、その前に立ち止まる。潔癖性独特の手付きで袖の埃を払い、上衣の位置を直し、自分の姿を見る。）

メロディー やれやれ、この格好ならまだ将校、紳士で通るな。私は死ぬまでこの姿を保つぞ。運命がどんなに攻め立てても、私の精神は怯（ひる）まない。（肩を挑むように反

（そ）らす。鏡の中の自分の目を見つめ、バイロンの「チャイルド・ハロルド」を吟ずる。この詩があたかも、自分の人生を正当化するための誇り、を掻（かき）立てる呪文であるかのように。）

「俺は世間を、世間も俺を、相手にしたことはなかった。

俺は世間の奴らに、おべっかを使ったことはない。

やつらが崇（あが）め奉（たてまつ）っているものに、

連中と調子を合わせるために、

一緒に膝まづくことなど、したこともない。

お愛想笑いに自分の頬の皮を緩めたこともなければ、

連中が誰かに、声を揃えて讃歎の声を上げる時、

俺はただ、それを冷やかに眺めてきた。

連中に俺を、その仲間の一人だと思わせたりするものが、

俺は立っている。きやつ等に交じって。

だがいいが、俺は奴らの中の一人じゃないんだ。・・・」

（メロディー、間を置く。それから繰り返し返す。）

メロディー

「だがいいが、俺は奴らの中の一人じゃないんだ。」

全くうまい表現だ。有難いぞ、詩人かつ貴族、ロード・パイ

ロン・・・奴らへの侮蔑を、よくぞ詩にまで高めてくれた。

（サラ、右手の扉に登場。一張羅に着替えている。青い色のドレス。彼女の目の青によくうつる。一三歩後戻りをするが、

そこでメロディーを軽蔑の目で見つめ、立ち止まる。メロディー

、サラのいることを感じ取る。ハツとなって鏡からサラへと

急に目を移す。ちよつとの間、混乱してバツの悪そうな表情。

しかし、すぐに紳士的な、洗練された態度で、サラに一礼す

る。)

メロディー ああ、お前だったのか、サラ。朝の散歩に出かけるのか？ それなら絶好の日和だ。この素晴らしい天気は、お前の頬に薔薇の花を齎(もたら)すぞ。

サラ 薔薇の花など知らないわ、私。でも頬には必ず恥を表す赤みがさすでしょうね。ネイランのところへ行って、もう一箇月ツケを延ばして貰うよう頼むんですから。お母さんに払わせたでしょう、あのサラブレットの飼料代を。(メロディー、この台詞を聞いている様子なし。サラ、痛烈な一撃を加える。鏡なんか見ちゃって！ いい気なもの！ 自分の姿に見惚れたりして！)

メロディー (軽い調子で。) うん、どうやら、虚栄心の強い孔雀さながらだったな。羽根など、嘴(くちばし)で整えて。こんなところでおめかしをしたのは、私の部屋が暗いからなんだ。あの穴蔵(くぼみ)じゃ、あまりよく見えなくてな。

サラ 家で一番いい部屋にいる癖に！ あの部屋こそ人に泊らせるべきなのよ。

メロディー いや、部屋に不平を言っているんじゃない。ただ、説明しておかねばならんと思っただけだ。虚栄心に見えたものをな。

サラ 見えたもの！

メロディー (調子をあくまで軽く保って。) おいおいサラ、今朝はどうも寝起きが悪いようだな。無理矢理喧嘩をふっかけて来るとは。しかし喧嘩には人間が二人必要だ。私には全くそんな気はない。その逆だ。丁度今、お前に言おうとしていたところなんだ。お前がなんて美人で可愛らしいかってい

うことをな。

サラ (嘲るような、ぎこちない、召使のお辞儀をして...) 田舎の訛りで。(まあまあ、お褒めにあずかって、旦那様。(おおけに、おおけに。))

メロディー 日に日にお前はお母さんに似て来る。私が初めて会った時のお母さんの姿にな。

サラ (また訛りで。) 何のつもりなの？ それ。おべんちゃらは止めて！ (何のつもりなん？ それ。おべんちゃらは止めんさい！)

メロディー (この一言はこたえる。我にもあらず腹を立てて。) 黙れ！ 何て言葉を使う！ この私に向って。まるで無知の下司(げす)女だぞ。お前は私の娘なんだ！ (やっと自制して、無理に笑いながら。) いいところを突かれたよ、サラ。お前は人を怒らせる天才だ。そう簡単にお前の手に乗ってはいけなかった。お母さんがさつき教えてくれたばかりだ。訛りは私を怒らせる時だけに使うとな。(メロディー、無意識にテーブルの上のデカンターに手を延ばす...) 慌てて引っ込める。)

サラ (侮辱するようについに...) 今度は訛りなし。(さあ、さつさと飲んだら？ 私の前で恥ぢることなんかないでしょう？ もう何年もやっているんですからね。

メロディー (傲慢に。) 恥ぢる？ 分らないね。紳士は飲みたい時に飲む。自分の酒がある時にはだが。

サラ 紳士！

メロディー (再び陽気に。) 私が躊躇(ためら)ったのは他でもない。今日は控えようと決心していたからだ。しかし

お前がそう言うのなら・・・(コップに注ぐ。少しだけ。今回は手は全く震えていない。) お前の幸福に・・・乾杯!

(サラ、侮辱の目でメロディーを見る。メロディー、優雅に続ける。)

メロディー ちよっとお前に坐って貰いたいんだ。このところずっとお前と話がしたくてな。(中央のテーブルの後ろで、サラのために椅子を引いてやる。)

サラ(疑い深くメロディーを見る。それから坐る。)何なの、話って。

メロディー(父親らしい、そして冗談を言うような口調で。)

お前の幸福についてだ、サラ。お前と話をしたというんだから、お前の幸せについてに決っている。まあ、私が盲(めくら)になっっていない限りな。我々の病人、サイモン・ハーフォードの具合はどうだな? 今朝は。

サラ(ぶつきら棒に。)いいわ。

メロディー それは良かった。(女性をたてる言い方で。)

しかし、よくなる以外にありやうがないからな、こんな魅力的な看護婦さんがついていては。

(サラ、冷たく父親を見る。メロディー、続ける。)

メロディー ずばりと本論に入ろう。サイモンはお前に惚れている。そんな事は半分目を瞑(つぶ)っけていても分る。それに勿論、お前はそれを知っている。そしてその恋を受けて立っている、どうやら。

サラ「どうやら」・・・勝手に想像したらいいわ。

メロディー フン、するとお前も相手に惚れているということか。それはいい、サラ。(メロディー、感傷的な、ロマ

ンチックな気分になる。)惚れた人間にこっちも惚れられる、これぐらい幸せなことはない。死すべき人間に与えられた最大の恵みだ。特にそれが初恋となるとな。バイロンも言っている。(詩を吟じる。)

「これよりも、あれよりも、何よりも、甘きもの、それは恋。燃え上がる、初恋。

それは際立っている。昔アダムがイヴに・・・」

サラ(乱暴に途中で遮って。)(バイロンの朗唱を聞かせるための?)私を坐らせたのは。

メロディー(続けられなかった無念さと腹立たしさを隠して。陽気に。)いや。私が言おうとしていたのは、お前に対する祝福だ。私からの祝福がお前に何かの意味があればの話だがな。ハーフォードのあの若いのは、確かに、なかなか立派な男だ。話をしてみたが、楽しかった。こういうところで、2教育のある紳士と再び話が出来たのは実に有難かった。若いのに少し真面目過ぎるところがある。それにヤンキー一流の冷淡さがあるが、その埋め合わせとして、あれにはロマンチックな詩人の気質(きしつ)がある。

サラ あの人、認められてよかったわ。

メロディー お前のためにと思っただ、私は多少あれの家族について調べてみた。

サラ(怒る。嘲るような訛りの言葉で。)(あらそう。そうなの。御親切なこと!あのバグパイプ吹きのパッチ・ライリーに調べさせたの?それともダン・ロッシュ?パディー・オダウド?それとも誰か他の飲んだくれの音楽家に?)

メロディー(聞こえなかったかのように。機嫌よく。)(私

の判定基準にはどうやら合格だ。

サラ そう。それは良かったわ！

メロディー 父親は紳士のような……つまりヤンキーでの標準での話……実業家というものがその地位にあるとした。しかし私自身、もうアメリカ人だ。昔の基準に固執するのは俗物趣味と言われても仕方がないからな。

サラ そう。俗物趣味。

メロディー 私にも自尊心がある。だから時々、自分もはやメロディー城の城主ではないと自分に言い聞かせる時は辛いのだ。それに、三千エーカーの牧場、森……それも大英帝国いちの良い土地……その所有者だったこの私、それから狩猟用の馬……

サラ（苦々しく。）まだ少なくともサラブレッドは持っているわ。紳士である証拠にね！

メロディー（痛いところを突かれて、挑むように怒って。）そうさ、私には馬がある！ それからいいか、私は餓えるよつでも、あの馬には食わしてみせるぞ。

サラ 餓えるのは自分じゃないでしょう。お母さんを奴隷のように働かせて、お母さんを餓えさせても馬を飼うんですよ！

メロディー（怒りをやっど抑えて。この台詞を無視して。）フン、私は何を話していたんだっか……そうだ、サイモン・ハーフォードの家族についてだ。あれの父親は、私の判定基準に合格している。しかし、本当の血筋の良さから言えば、あれの母親にその源泉がある。私の調べによれば、彼女は真に貴族の出であるらしい。

サラ あのお母さん、さぞかし鼻が高いでしょうね、お父さんに認めて貰って。

メロディー あの男は起きられるようになったらすぐ、この私のところへ話しにやって来るんだろつな？

サラ 私との結婚を許して戴きたいという、その名譽ある意図を述べるために？

メロディー 勿論だ。名譽ある男なんだからな、彼は。それに、金銭的な問題も解決しなきゃならん。これは彼の父親、或はあちらの顧問弁護士との話になるだろうが、とにかくお前の、持参金の額に対して、合意が必要だからな。

サラ（父親を見つめる。自分の耳を信じられない。）持参金！ サイモンの父親に対して！ まあ、何て話！

メロディー（しつかりと。）そうだ。お前の持参金だ、勿論。まさかお前、私がお前を、一文も出さず結婚させるなどと、思っただけいなくなるつ。お前には名前がある。水呑み百姓の娘とは話が違うんだ。お前は私の立場というものも理解してくれなきゃならん。私は今、偶々（たまたま）金に窮している。しかし、この宿屋を抵当に入れさえすれば……

サラ 抵当にはもうとつくに入っているの。身動きも出来ないほど。それを知らない訳ないでしょう？

メロディー 他に何がなかるつと、小切手にサインすればどんな金額だつて……

サラ サインなどいくらでも出来るわね。でも、その小切手を誰が受け取るというの？

メロディー 紳士同士なら、こつという問題はすぐにけりがつくものだ。

サラ まあまあ、お伽話の中で暮すのは素敵なことね。その夢を私の事にまで関（かかわ）らせるのは止（よ）して頂戴。私のことに干渉しないで。酒を飲んでいればいいの、お父さんは。私のことは放（はな）つておいて！（メロディー、サラの言っている事を全く一言も聞いていない。サラ、メロディーを見つめる。目に恐怖の色が浮ぶ。ついに苛々が爆発する。その底流には、父親に「お願い、どうか！」という気分がある。（お父さん！ どうして目を醒そうとしないの！ 今日（きょう）は素面（しらふ）でしよう？ ええ、素面に近い筈！ それとも本当に気違いになつてしまつたの？ だからなの？ 現実（げんじつ）の、本当（ほんとう）のことが話せないのは。そういう嘘（うそ）ばかり、死んでいることばかりしか話せないのは。

メロディー（顔が、何かの痛みで痙攣する。決定的な何か（なにか）が彼の急所（きゅうじょ）を突き刺したかのよう。助けを求めよう（たすけを求めよう）な苦し（くるしみ）そう（さう）な声（こゑ）で。）サラ！（しかしその瞬間（しゅんかん）に、その痛み（いたみ）は怒（いら）り（ら）に（に）変（か）る。相（あ）手を脅（おそ）迫（せ）する（する）よ（よ）う（う）に（に）椅子（いす）から半（はん）分（ぶん）立（た）上（あ）る。）黙（も）れ！

この罰（ばつ）当たり！ よくも・・・よくも・・・

（サラ、縮（ちぢ）上（あ）つて、逃（に）げよう（しよう）と立（た）つ。メロディー、や（や）つと（と）自（みづか）し（し）分（ぶん）を（を）抑（おさ）え、椅子（いす）に沈（しづ）み込（こ）む。両（りょう）手（て）で両（りょう）腕（うで）を（を）抑（おさ）える。）

（通（と）りに通（と）じる扉（かど）パツと開（あ）く。ダン・ロッシユ、パディー・オダウド、パツチ・ライリーの三人（さんにん）が、同（どう）時（とき）に扉（かど）に入（い）ろう（ろう）と（と）す（す）る。入（い）口（こう）の（の）と（と）ころ（ころ）で押（お）しあ（あ）い（い）に（に）な（な）る。三（さん）人（にん）と（と）も（も）二（に）日（にち）酔（よ）い（い）。）
（ロッシユが大声（おほこゑ）で話（わ）している。ダン・ロッシユは中（ちゆう）年（ねん）の（の）、ずん（ずん）ぐり（ぐり）した、〇脚（か）（おおきやく）の腹（はら）の（の）出（で）た、腕（うで）の短（みじ）い、肉（にく）のぶよぶよした男（おとこ）。大（おほ）きな口（くちばし）、平（ひら）らな顔（かほ）、突（つ）き出（で）た耳（みみ）、赤（あか）い縁（えり）取（と）りのついた豚（ぶた）のよう（よう）な目（め）、汚（よご）いつぎのあ（あ）た（た）つ（つ）た服（ふく）を（を）着（き）て

いる。パディー・オダウドは瘦（うす）せた、丸（まる）肩（かた）の、胸（むね）の扁（へ）平（へい）な、に（に）き（き）び（び）面（めん）の、目（め）の（の）大（おほ）きな、口（くちばし）の両（りょう）端（たん）の垂（た）れた男（おとこ）。口（くちばし）のう（う）まい、諂（へつら）（へつら）う調（てう）子（こ）で物（もの）を（を）言（い）う、寄（よ）生（せい）虫（ちゆう）タ（た）イ（い）プ（ぷ）の男（おとこ）。安（あん）物（ぶつ）の運（うん）動（どう）用（よう）の服（ふく）装（さう）。パツチ・ライリーは、汚（よご）れた白（しろ）髪（かみ）の、年（ねん）取（と）つた男（おとこ）。色（いろ）の褪（あ）さ（さ）めた青（あお）い目（め）が（が）あ（あ）て（て）ど（ど）も（も）な（な）く（く）う（う）ろ（ろ）う（う）ろ（ろ）と（と）し、薄（うす）馬（ば）鹿（か）の表（ひょう）情（じやう）。瘦（うす）せた身（み）体（たい）に、下（げ）着（ぎ）な（な）し（し）で直（ちよく）接（けつ）に、よ（よ）れ（れ）よ（よ）れ（れ）の（の）上（じやう）衣（い）を（を）着（き）て（て）い（い）る。口（くちばし）は半（はん）分（ぶん）歯（は）が（が）抜（ぬ）け（け）て（て）い（い）る（る）た（た）め（め）、落（お）ち（ち）込（こ）ん（ん）で（で）い（い）る。小（せう）脇（わき）にアイルランドのバグパイプ（bagpipes）を（を）抱（か）か（か）か（か）している。）

（ロッシユ（オダウドとライリーに、大（おほ）声（こゑ）で話（わ）しかけ（か）な（な）が（が）ら入（い）つ（つ）て来（き）る。メロディーとサラのい（い）る（る）こ（こ）ろ（ろ）に（に）気（き）が（が）つ（つ）か（か）な（な）い。）
（それ（それ）で（で）俺（おれ）は（は）言（い）つ（つ）た。アンディー・ジャクスン（Jaxson）、お前（まへ）ら（ら）み（み）ん（ん）な（な）を（を）、お前（まへ）ら（ら）に（に）丁（てい）度（ど）相（さ）応（おう）し（し）い（い）と（と）こ（こ）ろ（ろ）に（に）置（お）い（い）て（て）く（く）れ（れ）。お前（まへ）の（の）よ（よ）う（う）な（な）ケ（け）チ（ち）で（で）奴（やつ）隷（れい）根（こん）性（じやう）のヤンキー（yankee）を（を）、その銘（めい）柄（がら）通（と）り（り）ケ（け）チ（ち）な（な）場（ば）所（じよ）に（に）な（な）。今（いま）の（の）その（その）、お前（まへ）ら（ら）の（の）仕（し）事（じ）な（な）ん（ん）だ（だ）、す（す）ぐ（ぐ）取（と）ら（ら）れ（れ）ち（ち）ま（ま）わ（わ）あ（あ）・・・

オダウド（目はメロディーに向けたまま。ロッシユに注意（ちゆうい））
おい！ おい！ 黙（も）る（も）ん（ん）だ（だ）！

（ロッシユ、慌（あわ）て（て）て（て）振（ふ）り返（かへ）る。メロディーと目（め）が（が）合（あ）つ（つ）る。元（げん）氣（き）、急（いそ）ぎ（ぎ）に（に）失（し）せ（せ）る。卑（ひ）屈（くつ）な、心（こゝろ）配（はい）そ（そ）う（う）な（な）態（たい）度（ど）。何（なに）故（ゆ）な（な）ら（ら）、こ（こ）の（この）時（とき）ま（ま）で（で）に（に）メ（メ）ロ（ロ）デ（デ）ィ（ィ）、立（た）上（あ）つ（つ）て（て）い（い）て（て）、目（め）は（は）怒（いら）り（ら）に（に）燃（も）え（え）立（た）つ（つ）て（て）い（い）た（た）から。おま（ま）け（け）に（に）、そ（その）怒（いら）り（ら）は（は）サ（サ）ラ（ラ）が（が）メ（メ）ロ（ロ）デ（デ）ィ（ィ）か（か）ら（ら）三（さん）人（にん）の（の）方（かた）を（を）侮（あ）蔑（めつ）の表（ひょう）情（じやう）で（で）見（み）た（た）の（の）で（で）、さ（さ）ら（ら）に（に）燃（も）え（え）上（あ）つ（つ）て（て）い（い）た（た）の（の）だ（だ）。オ（オ）ダ（ダ）ウ（ウ）ド（ド）、メ（メ）ロ（ロ）デ（デ）ィ（ィ）の（の）目（め）を（を）避（さ）げ（げ）、誤（ご）魔（ま）化（か）し半（はん）分（ぶん）に（に）扉（かど）を（を）ガ（ガ）タ（タ）と（と）閉（し）め（め）る。パツチ・ライリーはサ（サ）ラ（ラ）の（の）美（うつく）し（し）さ（さ）に（に）呆（あ）然（ぜん）と（と）な（な）り、こ（こ）こ（こ）で（で）起（お）つ（つ）て（て）い（い）る（る）こ（こ）ろ（ろ）に（に）は（は）全（ぜん）く（く）気（き）づ（づ）か（か）ず（ず）、自（みづか）し（し）の（の）空（くう）想（さう）の（の）世（せ）界（かい）に（に）入（い）り、夢（ゆめ）見（み）る（る）よ（よ）う（う）に（に）サ（サ）ラ（ラ）を（を）見（み）て（て）い（い）る。）

ロツシュ（メロディーの怒りを宥めるように。）お早うございませ、少佐殿。

オダウド（諂うように。）お早うございます、旦那様。

メロディー 貴様達、何のつもりだ！ この宿屋を下卑（げび）た一杯飲み屋と間違えたか。大声でドタドタと上りこんで。貴様らが行きつけの豚が出たり入ったりする飲み屋とは、ここは違うんだぞ！

オダウド すみませんでした、旦那様。

メロディー（ロツシュに。口調に独特の脅しがある。）それからなダン、お前には注意しておいた筈だ。あの悪党のジャクスの名前は、この家では言ってはならん。言おうものなら、その背中の皮が剥（む）けるまで鞭で打ってくれる。（ロツシュの方に一步踏み出して。）私にもうその罰を実行する力がないと見ているようだな。

ロツシュ（脅（おび）えて、後ろに下る。）いいえ、いいえ、少佐殿。忘れていたんで・・・お早うございます、お嬢さん。

オダウド お早うございます、お嬢さん。

（サラ、二人の挨拶を無視。パッチ・ライリーはまだ夢見心地でサラを見つめている。これまでの会話、全く聞こえていない。帽子はまだ頭の上にある。オダウド、お節介にそれを脱がせる。非難するように。）

オダウド おい、パッチ。お前、耳はどこへ行った。旦那様の言うのが聞こえないのか。

ライリー（これを無視。サラに。）朝露に光る薔薇のようです、お嬢様。まるで王女様だ。一曲鳴らしてもいいですね？

（バグパイプを用意し始める。）

サラ（冷たく。）鳴らしてなんか欲しくないわ。（ライリーの悲しそうな目を見て、優しく言い直す。）いいえ、親切ね、パッチ。私、あなたの鳴らす曲、素敵なこととは知っているわ。でも私、もう行かなきゃいけないの。

（ライリー、慰められて、サラに感謝するように微笑む。）

メロディー さあ、バーに行け、みんな。お前達にはバーの方が相応しいんだ。この入口は使うなと前から言っているぞ！（軽蔑の中に寛容さを見せて。）お前達の狙いはどうせただ酒だ。そう、喉が乾いてここに来て、酒を振舞われなかった話など、ここにはないんだからな。

オダウド 有難うございます、旦那様。さ、行こう、ダン。

（ライリーの腕を掴む。）パッチ、お前もだ。

（三人、バーに行く。オダウド、二人が入った後、扉を閉め24る。）

サラ（嘲りの調子。訛りで。）家来達をよく手懐（てなづ）けたものね。それもこのアメリカの土地で！（家来達をようてなづけんさつたもんよ。それもこのアメリカの土地でな！）（メロディー、この言葉を無視。バーの方へ虚（うつ）ろな目を向けて、乾いた唇に舌を走らせる。それを見てサラ、訛りなしで辛辣に。）

サラ 私がいては三人のご立派な紳士達の仲間に加わる邪魔になるわね！（サラ、廻れ右をして、通りに通じる扉から退場。）

メロディー（この言葉がひどくこたえて、顔が歪む。絶（すが）るように。）サラ！

(ノラ、右手のホールから、トースト、卵、ベーコン、紅茶ののった盆を運んで登場。前面のテーブルに朝食を並べる。わざと冗舌に。)

ノラ お待たせしてしまつたわ。トーストがちつとも言うことを聞いてくれなくて。ちよつと目を離している際に、真っ黒焦げ。でもベーコンはパリツといったのよ。それに卵も柔らか過ぎない。あなたの丁度好きな出来具合。さあ来て、食べて。(メロディー、聞いている様子なし。ノラ、心配そうにメロディーを見る。) どうしたの? コン。あなた、聞いてないの?

オダウド(バーからの扉から頭を出して。) 旦那様! 飲んでもいいって言われたって言つても、ミッキーの奴、信じてくれないんです。直接言つて下さらなきゃ。

メロディー(唇を舐めながら。) 今行く。(バーの扉へ進む。)

ノラ コン! まづこれを胃に入れて! 後だとすつかり冷めてしまつ。

メロディー(ノラの方を向かず、謙(へりくだ)つた礼儀正しい言い方で。) 私は全くお腹がすいていないんだ、ノラ。すまなかつたな、そんなに手間をかけさせてしまつて。

(メロディー、バーに退場。後ろ手に扉を閉める。ノラ、テーブルの後ろの椅子にドスンと坐る。どうしようもないという表情で朝食をじつと眺める。静かに啜り泣き始める。)

(幕)

(場 第一幕と同じ。約三十分経過している。バーへの扉が開き、メロディー登場。これまでに、もうあと二杯ひつかけている。朝食は食べていない。朝食抜きはしかし、彼の表情に特別な影響を与えていない。少し青味が増したことで、態度が余計嫌らしくなつただけ。バーにいる取り巻き連中に指示を与える。)

メロディー さっき言つたことを忘れるな。大声で喋るな。いいな? それからライリー、バグパイプは禁止だ。さもないと出て行つて貰う。私は一人で少し過去の思い出に浸(ひた)ることにする。ミッキー、クリーガン伍長が帰つて来たら、私のところへ来るように言つてくれ。あいつは少なくともタラヴェラのことを、新しいウイスキーの銘柄だろうなどとは言わないからな。

(ミッキーの「はい、少佐殿」という言葉。それに他の三人の呟きに対して軽蔑を込めて扉を閉める。左手前方のテーブルの後ろに坐る。まづ、傲然と他を見下すバイロンの主人公のようなポーズを取る。過去の栄光を思い、現在の悲劇的な運命に抗し、他人を苦々しく軽蔑するように。そして自分だけは志(こころざし)を高く保つ、独特のポーズ。しかし彼には観客がいない。彼はそのポーズを続けることが出来ない。両肩は下り、テーブルの表面を見つめる。絶望と打ち拉(ひし)がれた本当の悲劇の表情が、その捨鉢(すてばち)なハンサムな顔に現れる。)

(通りに通じる扉が開き、サラ登場。メロディー、鍵の力チリという音が聞こえない。また、サラが前方に進んで来るのにも気づかない。サラ、甘い言葉で店の人間にツケの延長を

頼み込んで来た恥がそのまま残っていて、目が苦々しさに満ちている。父親の姿を見て苦さは増す。父親を無視することに決め、左手の扉に進む。しかし、何か普通と違うものを感じ、じつと父親の姿を見る。何か厳しい、捨て台詞を言おうとするが・・・止める。到頭我にもあらず訊ねる。その声には憐れみの響きが籠っている。

サラ どうかしたの？ お父さん。どこか具合が悪いの？
それとも、ただの・・・(二日酔い？)

(メロディー、ぎくつとする。バツの悪い表情。このように低調な気分で見られたのが恥づかしい。)

メロディー (礼儀正しく立上り、お辞儀をする。)(これは失礼した、サラ。お前の入って来るのが聞こえなくてな。(恨めしそうな笑いを浮べて。)(いや、ちょっと思い出に耽(ふけ)っていて、心ここにあらずだった。あのスペインでの戦いの思い出だ。十九年前の今日だった・・・)

サラ (顔が強張(こわば)る。)(ああ、今日はタラヴェラの記念日。記念日が聞いて呆れる。お父さんの取り巻き連にはついてる日。この宿屋にとっては大きな厄日(やくび)だ。)

メロディー (冷たく。)(何のことを言っているんだ。私がこの日を祝うのは当然なんだ。)

サラ そうでしょうよ。今までの祝い方で、私にはちゃんと分っている。それに、今年はそのジャミー・クリーガンが来たんですもの、今までの倍は酷いものになるんでしょう。

メロディー 勿論あの時一緒に武器を取った者と祝えるなら、二重の喜びだ。

サラ フン。これだけは言えるわ。昨日のあの飲みっぷり

では、今日あの人の喉を通って行けど酒は、他の連中のよりはずつと多いつて。あの人、親戚なんでしょう？

メロディー (強張(こわば)った言い方。)(ただの遠い親戚だ。だが、親戚というのには関係ない。クリーガン伍長は私の傍で一緒に戦った仲間だ。だから・・・)

サラ 可哀相にお母さん、きつといつものように御馳走を作るように言われたんだわ。お父さんはいつももの御立派な軍服をお召し遊ばして、私は名譽ある給仕を仰せつかる。ええ、今年はやって上げる。お母さんのために。でも、これが最後に来年からは真つ平(まことへい)ご免だわ。(廻れ右をし、右手の扉に進む。)

お父さんはお喜びの筈ね、自分の娘があのネイランに拜むようにして、両膝をついて、もうひとつきツケを延ばして貰ったって聞いたたら。ネイランははつきり言ったわ。「これはあなたのお母さんが可哀相だからやってやるんだからな。全く可哀相つたらないよ、あんな旦那を持つてるなんてな」。でも、こんなことはお父さんには何の関係もないでしょう。自分と、あのサラブレッドが格好よく生きていられさえすれば！

(メロディー、一瞬ギクリとする。サラから逃げ出したいと思っているのか、じつとバーの扉を見る。しかし思い留まる。全くの無表情になる。もとの椅子に坐り、新聞を取り上げ、サラを無視する。サラ、出て行くこととする。と、丁度その時ノラ、扉のところに現れる。手にミルクの入ったコップを持っている。)

ノラ あの若い人に上げる牛乳よ。お医者様のお言い付けの。サラ、お前、上に上る時間でしょう？ だから持って来たわ。

サラ、お前、上に上る時間でしょう？ だから持って来たわ。

サラ、お前、上に上る時間でしょう？ だから持って来たわ。

サラ（ミルクを受け取って。）有難う、お母さん。（軽蔑の意を含んで父親の方に顎をしゃくって。）今度お父さんに言ったところ。ネイランがもうひとつき延ばしてくれた。だから心配いらないうて。

ノラ 有難いわね。よかった。ネイランって親切だね。

メロディー（爆発する。）何が親切だ！ あの野郎、もし断つたりしてみろ、この私がどつするか・・・（メロディー、サラの侮蔑的な目を見て自制する。じつと心の底に嘲笑うような敵意を籠めて、静かにつけ加える。）お前を引き留めては悪い、サラ。お母さんの言い付け通り、牛乳をお客様に持ちするんだ。救いの天使の役を演じ損（そこ）なつのはまづい。（敵（かたき）討ちの台詞を言う。）やれやれ、あの可哀相なぼうや、二人の百姓女に蛇を仕掛けられて、まづ逃げられる見込みはないな。

サラ 蛇をしかけるって何？ それ。それから、お母さんは放っておいて！ お父さんにお母さんのことを言う資格はないわ！

メロディー それに、仕掛けが全部はづれたとしても、最後の最後、奥の手っていうやつがあるからな。

サラ（声が上がする。）奥の手って・・・それ、何？

（ノラ、サラの腕を抑える。）

ノラ 止めなさい、サラ。どうしてお前、お父さんを放とけないの。怒らせたお前の方が悪いのよ。

サラ（静かに。）分ったわ、お母さん。また鏡で自分の顔を見たらいいわ。鏡が大好きなんだから。そして、うまいことを言っただけで、ニヤリと笑えばいいのよ。

（メロディー、急所を突かれたように怯（ひる）む。サラ、右手から退場。）

メロディー（間の後。たどたどしく。）私は・・・サラのは誤解だ。お前が言っていた通りだ。あの子は私をつついては怒らせようとする。それでつい私も・・・

ノラ（悲しそうに。）奥の手・・・あなたがどうしてこの言葉を言ったか、私には分っているわ。あの子も私と同じだとあなたは思っているのね。私の、あなたへの罪を、あなた、決して忘れないの。

メロディー（自分の方が悪いと知っているため、余計怒って。）何を言う。サラは誤解している。それにお前まで・・・（それから苛々と。）それにお前の、私に対する罪・・・何が罪だ・・・そんなもの、坊主達に勝手にそつ思わせておけばいいんだ。（奇妙な、人を嘲るような誇りをもって。）お前の言うことを聞いてみると、まるでお前が私を誘惑したようだ。だがな、それは当り前なんだ。罪でも何でもありません。あの頃の私がどついう人物だったか、それを考えれば当然なんだ！

ノラ ええ、よく覚えてるわ。あなた、あんなに美男子だった。女だったら、誰でもあなたと・・・と思っただわ。それに、今だつてそう。

メロディー（喜んで。）おいおい、お世辞は止めた、ノラ。（バイロン風の憂鬱を込めて。）今や私は遺跡をうるつく幽霊に過ぎん。（それから、ノラの方を見ず、女性を讃える騎士らしく。）いや、お前こそ、あの頃すこかったじゃないか。アイルランドいちの美女だったんだ。（侮蔑的に。）それに、

あれが罪・・・恥づべき罪だなどと・・・そんなのは真つ赤な嘘だ！　あの時お前には、恥など何もありませんでした。あれは愛、あれは喜びだ。あれは若さの輝きだった。そしてお前はあれを誇りに思っていたのだ！

ノラ（目が輝く。）私は今でも誇りに思っている。そして死ぬまで誇りに思う！

メロディー（ノラを、「よしよし」と、目を細めるようにして見る。が、ノラの実際の姿を見て、嫌悪の表情に変わる。・・・苛々と目を逸らして。）どうして過去のことなど持ちだすんだ。こんな話はしたくないぞ、私は。

ノラ（間の後・・・おつおつと。）でも、とにかくあなた、サラに変なことを言っちゃ駄目だわ。ハーフォードの若いのを僕にかけようとしているだなんて。

メロディー　私はそんなことは考えちゃいなかったんだ。・・・あれは私の娘だ・・・

ノラ　ええ、あなたの子。それにあの男の子も、ちゃんとした若者。（少し嘲るような調子で。）そう、あの子が話してくれた。あんまり恥づかしがり屋で、あの子の手にキスさえ出来ないんだって。

メロディー（軽蔑するように。）そんなところだ。愛を語る段になると、ヤンキーの奴ら、何も出来やしない。全く手も足も出ない野暮天（やぼてん）だ。お行儀が出来ていないところに持つてきて、燃えるようなロマンスがない。奴らは女というものを知らないんだ。（侮蔑的に笑って。）この私を見る。私があいつの年頃の時には・・・（それからすく。）いや、あのハーフォードの奴を私が認めないというんじゃない

い。いいな、あれは紳士だ。サラにちゃんとした申込みをすれば、勿論喜んで承諾してやる。まあ、あいつの父親と持参金の額で折合いがつくという条件はあるがな。

ノラ（急いで。）ああ、まだそんなところまで考える時じゃないわ。（それから自分の夢の中に入って行って。）ええ、あの子は幸せになるわ。だって、あんなにあの人のことを愛しているんだもの。そう、自分で思っているよりもずっとずっと。それに、この結婚、あの子が世に出る機会でもあるわ。

大邸宅に住んで絹と更紗（さらさ）の服を着て、駁者と従者つきの馬車に乗って・・・

メロディー　そう、あれがそうなることは私の望みでもある。私にはもう未来はない。過去だけだ。しかし、あの子には美貌がある。野望がある。若さがある。思いのままなんだ。（それから嘲るように。）ただ自分が紳士の娘であることを²

忘れなければだかな。沼を這い回る百姓女の真似をしていちゃ、話にならん。（サラが二階から降りて来る足音を聞く。）あれが降りて来る。（立上る。苦々しく。）私の姿を見るとあれは苛々するらしい。ちよっとバーに行つて来る。もうあれの侮辱はうんざりだ。今朝だけで、厭というほど食らつてしまった。

（メロディー、バーの扉を開ける。中から一斉に歓迎の声。メロディー、バーに入る。後ろ手に扉を閉める。サラ、右手から登場。顔が紅潮している。目は夢見るような幸せで輝いている。）

ノラ（非難するように。）お父さんはバーに行つたわ。あなたの毒舌が届かないようになって。可哀相に。あなたそれで

恥づかしくないの？ 今日が記念日だっていうのに、お父さんを虐（いぢ）めるのは止めようっていう心遣いさえないなんて。

サラ 分ったわ。今日一日お父さんの気に入るようにして上げましょう。私、屋根裏のトランクから軍服を出すの、お母さんに手伝って上げてもいい。ブラシをかけたたり、手入れをしたり・・・

ノラ ああ、あなたよく言ってくれたわ。それでこそ娘っていうもの・・・（それからサラのこの急な変りように驚いて。）あら、あなた急に優しくなって、一体どうしたの？

サラ 私、今、本当に幸せ・・・誰に対しても意地悪な気持になれないわ。（少し躊躇う。それから狡そうに。）サイモンが私にキスしたの。（こう言ってしまうと、急に得意そうに。）到頭あの人、勇気を出したの。でも出させたのは私。私、あの人を枕を抱えながら、上から屈み込んでいたの。これでキスしなかったらあの人、人間じゃないわ。（優しく笑う。）その後のあの人顔したら・・・お母さん、見たら大笑いよ。自分の大胆な行為をすっかり恥ぢて、ベッドに潜り込まんばかり。私が怒ってもう二度と口をきかないんじゃないかって怖れて、平謝りに謝るの。

ノラ（擲（から）か）って。（それであなた、どうしたの？ 私、賭けてもいいわ、あなた、口だけよ。思い切ったことなんか何もしなかったんでしょ。）

サラ（残念そうに。）そう。お母さんの言う通り。私、真っ赤になったの。あの人真っ赤になったのと同じくらい。本当に私、馬鹿みたい。

ノラ でも、本当にそれだけだったの？ キスなんて、簡単なことよ。結婚してって言わなかったの？ あの人。

サラ ええ、言わなかった。（そしてすぐ。）でも言わなかったのは私のせい。あの人、勇気を出して言おうとしたの。ちよつと言わせるようにしむけさえすれば良かったの。でも私、馬鹿みたいに黙って突っ立っていただけ。そしてやつと口を開いたと思ったら、「さあ、言ってみようママの手伝いをしなくちゃ」だって。そして駆け降りたの。顔を真っ赤にして・・・

（サラ、母親に近づく。ノラ、両手をサラに回す。サラ、ノラの肩に顔を隠す。涙が出そうになる。）

サラ ああお母さん、私って本当に馬鹿、馬鹿、大馬鹿！

ノラ そう、そうなの。恋している時はね、誰でも・・・

サラ（顔を上げてノラから顔を離して・・・怒って。）そ₂う、本当にそう。私ったら、私ったら、恋しくて堪（たま）らないの。ああ駄目！ こんな風になっちゃ。胸の想いが頭に勝つたら、私、奴隷になるしかないの。（急に自信が出て、微笑んで。）ああ、でもあの人のがれ方だって、私と同じくらい。いいえ、もつとだわ。私には分ってる。だからこの次には私、頭を使うわ。（幸せそうに笑う。）もう申込みなハーフオード。どうぞよろしく。（右手を上から下に下ろして膝をつくお辞儀。）

ノラ（微笑んで。）あら、私に挨拶は必要ないわ。さ、手伝って頂戴。あなた、約束したでしょう？ トランクからお父さんの軍服を出さなくちゃ。あれは重くて、私、腰を痛め

てしまう。あなたなら大丈夫。

サラ（陽気に片手を母親の腰に回して。）さ、じゃ、行きましよう。

ノラ（右手から退場する時に。）どのトランクだったか、よく覚えていないの。それに、鍵もどこへ行ったか。それも手伝ってね。

（間。それからバーへの扉が開き、メロディー登場。この幕の最初の時と同様の登場の仕方。一幕の時と同様に、バーからメロディーに声がかかる。しかし今回はメロディー、何も言わず、ただ後ろ手に扉を閉める。メロディー、うんざりという表情で顔を顰める。）

メロディー 無知な家畜めらが！（淋しくて、心から相棒が欲しいという気持で。）ジャミー・クリーガンの奴、来ないかな。ここには無知しかない・・・無知でなきゃ、サラの悪口だ。（それから、挑むように。）しかしへこたれはせんぞ、俺は！世界中の力を寄せ集めても・・・いや、地獄の力を借りたって、俺を参らせることは出来ん！（メロディーの目、抵抗しがたく鏡に引き寄せられる。その前に進む。映っている自分の姿を見てほっとした。次に続くものは、第一幕の鏡の場面と全く同じ。肩をいからせ、頭を真直ぐに持ち上げ、好きなバイロンの詩を、鏡に映った自分の姿を見ながら朗唱する。）

「俺は世間を、世間も俺を、相手にしたことはなかった。俺は世間の奴らに、おべっかを使ったことはない。

やつらが崇（あが）め奉（たてまつ）っているものに、連中と調子を合わせるために、

一緒に膝まづくことなど、したこともない。

お愛想笑いに自分の頬の皮を緩めたこともなければ、連中が誰かに、声を揃えて讃歎の声を上げる時、

俺はただ、それを冷やかに眺めてきた。

連中に俺を、その仲間の一人だと思わせたりするものが、俺は立っている。きやつ等に交じって。

だがいいが、俺は奴らの中の一人じゃないんだ・・・」

（メロディー、鏡の前に立って見つめている。通りへ通じる扉の鍵がカチツと開く音が聞こえない。扉が開いてサイモンの母、デボラ（ミスイズ・ヘンリー・ハーフォード）登場。後ろ手に扉を閉める。メロディー、相変らず鏡に気を取られていて、これに気づかない。明るい太陽から暗い中に入りデボラ、一瞬何も見えない。やっと見えるようになり、メロディーの姿に気づく。信じられないようにメロディーを見つめる。30

それからおかしさと嘲りの気持で微笑む。）

（デボラは四十一歳。しかし三十歳以上には見えない。背は低い方。一メートル五十センチそこそこ。若い華奢な身体つき。とても成人した二人の息子の母親には見えない。顔は美しい・・・通常の意味での美しさではない。骨格とその特異性に興味を持つ画家に、美しいと見える顔。小さい顔。頬骨が高く、顎は四角い。顔の上方は幅が広く、下に行くにつれて狭い。つまり楔（くさび）形の顔。その両側はウエーブのかかった赤茶色の髪で縁取られている。鼻は細くて繊細。少し鷲鼻。口は顔に較べて大き過ぎる。長い睫毛（まつげ）、緑色の混じった茶色の目。分厚い、くつきりと曲った眉毛。このような目はどんな人の顔につけても大きく見えるだろう

が、この女の顔色の蒼白さのため、驚くほど大きく見える。小さな、甲の高い足。それに細い、長い指の手。この痩せた脆（もろ）い身体につけている衣服は、単純さを際立たせるように考慮された、白い服。彼女の全体から受ける印象は、故意に作られた距離の感覚。即ち、楽しみながら、そして一段高いところから、皮肉に、他人を観察するという、計算された態度。その態度には、自分の気まぐれな異常さを無理に前面に押し出すようにするかのよう、何か強情で、独断的なものがある。）

デボラ ご免下さい。

（メロディー、驚いて飛び上らんばかりに、後ろを振り向く。一瞬、呆気にとられた阿呆面が浮かぶ。一朝（ひとあさ）のうちに二度も鏡に見入っている自分の姿を他人に見られたことの恥づかしさと苛立ち。すぐにそれを取り返そうとするかのように、肩を聳（そび）やかし、傲岸な態度で、相手を頭から足の爪先まで見下ろす。が、相手が魅力のあるレディーであることに気づき、その態度が一変する。チャンヌ到来、自分に自信あり。急に元気が出て来る。メロディー、お辞儀をする。優雅で礼儀を弁（わかま）えた紳士の一礼。その歓迎の微笑と声には、人を誘うような魅力がある。）

メロディー お早うございます、お嬢様。このよつなむさくるしい宿屋にお越し下さるとは、洵（まこと）に光栄至極でございます。（舞台前面にある、ちよつと大きなテーブルの後ろの椅子を引いて・・・再びお辞儀をして。）こちらに・・・如何でしょう。日照りの暑さから逃れるには、この辺りが宜しいのではないかと・・・

デボラ（一瞬奇妙な顔をしてメロディーを見る。しかし我にもあらず、彼の態度物腰、そしてハンサムな顔に引きつけられる。）有難う。

（デボラ、前に進む。メロディー、引いた椅子にうまくデボラを坐らせるように、優美な動きを見せる。デボラの肉体的な長所を官能的な目で見てとる。馬の好きな人間がサラブレッドを見る時の、あの目付き。その間、愛撫するような丁寧さで言葉を続ける。）

メロディー お嬢様・・・（デボラの結婚指輪を見て。失礼致しました。奥様でいらつしやるのですね・・・再びこつ申し上げるのをどうかお許し下さい。このようなところにお越し下さいますとは、全く光栄に存じます、奥様。

（メロディー、振り返る時、デボラの肩に手をあてる。全くの偶然であるかのように、これをつまぐやる。デボラ、思い³1がけない相手の動きに驚く。身を縮め、メロディーを見る。二人の目、合う。メロディーがあからさまに自分の肉体の評価を行ったことを見てとりデボラ、少し恐怖の感情に捕われる。しかしすぐに安心する。メロディーが、自分の最初の攻撃に対する女の反応に満足して、目を上に上げ、急いで謝り始めたからである。）

メロディー どうぞお許しを、奥様。どうやら私の礼儀作法は鈍（なま）つてしまつたようです。レディーにお立ちより戴くことなど、全く稀（まれ）なこととして・・・この宿屋は私と同様、不運な日々を送っているのです。

デボラ（冷たくこれを無視して。）あなたこの主（あるじ）なのですね？ メロディー。

メロディー（目に怒りの表情が浮ぶ。・・・傲慢に。）ここに控えておられますのは、かつて陛下の第七龍騎兵隊の一員コーニアス・メロディー少佐。（お辞儀をする。冷たい公式的なお辞儀。）

デボラ（再び陽気な観察者の目。謝るように。）あらまあ、それではいけなかったのは私の方でしたわ、メロディー少佐。

メロディー（再び勢いが出て。優雅に。）いえいえ、奥様。過ちは私の方に。何も怒ることはなかったのです。（自分の弱点を素直に認める人間、という調子で。）実際、過去に栄光を持ったことのある男なら誰でも持つ欠点を、この私も免（まぬが）れることが出来ずにいます。つまり、誇りという奴で・・・侮蔑の言葉には過剰に反応してしまつたのです。

デボラ（今度はその言葉に調子を合わせて。）侮蔑・・・いえ、これはどうか信じて戴かないと。私の方では侮蔑の意図など全く・・・

メロディー（再びデボラの目をしっかりと捕えて・・・意味を籠めて、愛撫するような調子で。）お綺麗な奥様・・・いえ、お綺麗なだけではなく、お優しくてもいらつしやる・・・（デボラの面白がる目の表情、消える。どう考えていいかわらない。何故か、怖いと同時に魅了される。メロディー、攻撃を続ける。今では自信たつぶり。中年の誘惑者。声に、計算された感傷的な気分を含ませる。女性の、理解と同情に、訴えようとすると、ロマンチックな悲劇の主人公。）

メロディー 私は哀れな馬鹿者なのです、奥様。「私はただの、このやくざな宿屋の主（あるじ）」、そう自分に言い聞かせることさえ出来れば、それが私にとっては、ずっとずっと

と賢く幸せなことなのです。私はそこにこそ誇りを持ち、過去を忘れねばならない。しかし、わけても今日この日、私にはそれが出来ない。何故なら今日は、タラヴェラの戦いの記念日なのです。私の生涯で最も忘れ難い日・・・かの偉大なウェリントン卿・・・当時はまだサー・アーサー・ウェレズリーでしたが、その人のもと、私は勇敢に戦い、戦場において、その武功を讃えられた日なのです。ですから、今日この日ぐらいいはきつとお許し戴けるものと・・・（言い方がもっと愛撫するような調子になる。）（このようにお美しい方には、男の心などお見通しの筈。今まで何百という男が、その心をあなたに捧げたに違いありませんから。（荒々しい熱情が、その声に籠る。））そうだ、私は一ペンスに対して私のありつたけのものを賭けたつていい。ここらにいる、魚の血で出来たような鈍感なヤンキー連中のうちで、あなたの美しさに恋²い焦がれなかった男が一人でもいるか・・・いはしない！（メロディー、机の上にあつたデボラの手のうちの一つに、自分の手を置き、情熱的にデボラの目を見つめる。）丁度今の私のように！

デボラ（メロディーの腕力のもとに従わせられそつなのを感じて、手を離そうともがく。デボラ、吃る。軽い調子でいなそうと。）（これがあの有名な、アイルランドの人の「お世辞」つていうものですか？）

メロディー（強い、抑え難い欲望をもつて。）違う！ 神にかけてもいい。ナポレオン親衛隊の方陣も、この私ただ一騎で破つて見せよう、ただこのキス一つを許して戴かせえすれば！

(メロディー、姿勢を低くする。目はじっとデボラを見たまま。一瞬キスは実行出来るかに見える。デボラも、今やこれを免(まぬが)れないと。それから急にメロディーのウイスキーの匂いがデボラに届く。デボラ、嫌悪と怒りで震える。押さえられていた手を振りほどき、軽蔑を込めて相手を傷つけるように言う。)

デボラ ハッ！ ウイスキー！ あなたは酔っていらつしやる。何て厚かましい！ 何ておぞましい人！ この宿屋がこんな寂(さび)れ方をしているのも無理はありません、女性が来る度にこのような馬鹿げたもてなしをするのではね！

(メロディー、ぐいと頭を持ち上げ、背筋をのばす。顔を平手で打たれたかのように、一歩後ろへ下る。デボラ、立上る。軽蔑を込めて、メロディーを無視して。この瞬間にサラとノラ、右手の扉から登場。一目で事の成行きを見て取る。メロディーとデボラ、二人に気づかない。)

ノラ (口の中で咳くように。) まあ、何てことを！

サラ (ミッキーが話していた女性はこの女だとすぐに分る。父親との間に何が起こったかはすぐに分り、心配と怒りと恥を外に出すまいと努力しながら。) どうしたの？ お父さん。この方、何の御用でいらしたの？

(サラの登場はメロディーにとつて二重の打撃。メロディー、誇りが傷つけられ、怒りで煮えくり返っている。デボラ、サラの方を向く。)

デボラ (冷たく自制して。・・・明るく。) 私、あなたに会いにやって来ましたの、ミス・メロディー。きつと息子のサイモンが今どこにいるか御存知だと思ひまして。

(これはメロディーにとつて、爆弾投下と同じ。)

メロディー (声の調子に全く謝罪の気持なし。出し抜けに怒って。まるでデボラが故意に自分を罠にかけたと言わんばかりに。) あの男の母親だと？ どういうことですかこれは、マダム。最初から何故そう言わないんです！

デボラ (これを無視。サラに。) あの子の隠れ家の小屋に行ってみたのです。でも、そこにはいなくて・・・

サラ (吃りながら。) ここにいらつしやいます、ミスィズ・ハーフォード。二階のベッドに。病気なのです。

デボラ 病気？ 重い病気・・・ではないのでしょうか？

サラ (デボラの慌て方で、少し自分を取り戻して。) ええ、重い状態は終つて・・・ほぼ終つたんです。湖の湿気で風邪をひいて、熱が出たのですわ。小屋で寒気のため震えていらつしやるのを見つけて、ここにお連れしたのです。ここには医³者も来てくれますし、看護する人間もいますから。

デボラ (明るく。) 看護する人間って、ミス・メロディー・・・

あなたっていうことですね？

サラ ええ、私と・・・母ですわ。

デボラ (感謝の気持。) あなたとお母さまに心から感謝致しますわ。

ノラ (この時まで陰に入っていたが、ここで前方に出て来て、優しい、親しみのある微笑を浮かべて。) ああ、お礼など、奥様。お子様は本当に優しい、素敵な方ですわ。私達みんな、あのお子様のこと、大好きなんですの。あの方なら、いついらしても、お金など一銭もいりませぬわ・・・

(ノラ、サラの「そんなことは言うな」という目に出違い、

困ったように言い止む。デボラは、ノラの薄汚い格好に嫌悪を感じる。しかし同時に、その率直な優しさと魅力を感じ取り、微笑を返す。()

サラ(当惑の籠った、固い表情で。()こちら、母ですの、ミスィズ・ハーフォード。

(デボラ、優美に頭を下げる。ノラ、本能的に、百姓女が紳士淑女に対してする、ピヨコリと頭を下げるお辞儀を、する。メロディー、鼻白んで、また、怒り狂って、ノラを睨みつける。()

ノラ お近づきになれて幸せですわ、奥様。

メロディー ノラ! お願いだ。止める!(急にまたメロディー、再び洗練された紳士に戻る。配慮の行き届いた、少し謙遜な気持さえ籠っている言い方で。()きつとミスィズ・ハーフォードは、今すぐでもお子さんのところへ連れて行って貰いたいんだ。そうですね? 奥様。

(デボラ、メロディーの傍若無人に呆れ返り、ちょっとした間、言葉が出ない。デボラ、やつとのこと口をぎく。それもただ、この気まづい空気がこれ以上続かないようにと願ってのことである。()

デボラ ええ、その通りですわ。(メロディーに背を向けて。()お願い出来ませすかしら、ミス・メロディー。私、午前中の時間を随分使ってしまった。もうそろそろ家に帰らなければなりません。あの子の傍にも長くはいられませぬわ。()

サラ どうぞこちらに、ミスィズ・ハーフォード。(右手の扉に進む。そしてデボラに先を行かせるために道を開ける。()きつとサイモン、嬉しいやら驚くやらですわ。自分が病氣だ

と、手紙でお知らせしたのでしょね。でも、お母様を心配させたくはなかつたのですわ。(デボラ、先にホールに退場。その後、サラ退場。()

メロディー 糞っ! あの馬鹿女! そうとこつちが知っていたら! 何、この私が後悔などするものか。たかがヤンキーの成上り女に!(嘲りの笑い。()フン、あいつ、この私によるめいたんだ。私を侮辱してそいつを隠そうたって、騙されはしないぞ。女なんて、こつちはいくらでも知っているんだからな。()怒って。()「女性が来る度にこのような馬鹿げたもてなしをする」だと? あの糞ったれが!

ノラ(おづおづと。()あの人の悪口を言わないで。それから、自分を苦しめるのも止めて。あの人、優しい女の人のようだったわ。きつと根に持つようなことはないわ。だって、ちよつと考えてみれば、あの人誰か、あなたに分らなかつたってことぐらい、すぐ分るでしょう?

メロディー(遣りきれない気分。()黙れ!

ノラ ねえ、忘れて頂戴。サラのために。あの若者とサラの間を邪魔しようっていうんじゃないんでしょう?(メロディー黙る。ノラ、慰めるように続ける。()さあ、御自分の部屋に行つて、見てらっしゃい。きつとあなたの気分、変わるわ。サラと私、あなたの軍服にブラシをかけて、ベッドの上に置いておきましたわ。

メロディー(かすれ声で。()トランクに戻すんだ! もう思い出したくもない。()侮辱された怒りが、再び爆発する。()糞っ! あの女、タラヴェラの戦いで、ウエリントン卿の私への褒美も、飲んだくれの嘘八百だと思いやがった

ぞ！ こいつは賭けてもいい！ 糞つたれ！

ノラ いいえ、そんなこと思わないわ、あの人。決して・・・
メロディー（ふといい考えが浮んで。）そうだノラ、百聞は一見に如かずというな？ うん、そうなれば、自分の目を疑う訳にはいかんだろう。（ノラの方を向いて。再び自信が湧いてきて。）サラとあの若者のこと考えろというお前の言葉、全くその通りだ。あの子のことを考えてやれば、この際サイモンの母親に、私とあの女との間の誤解を、正式に謝罪するのが私の義務だ。（メロディー、ニヤリと笑う。謙遜な口ぶりで。）全く紳士としての一つの礼儀なんだから、美人なら何を考えても、たとえそれが間違っているようにと、それが正しいと認めてやるのが。（左手前面隅にある扉に行き、それを開ける。）もし彼女が戻って来たら、なんとか私がここへ帰るまで引き留めておいてくれ。（これは命令。メロディー、後ろ手に扉を閉める。）

ノラ（溜息をつく。）ああ・・・まあいいわ、あの人今度は行儀よくするでしょう。あの軍服を着れば、誇りは戻って来るんだから。

（ノラ、中央右手のテーブルの端の椅子に坐り、疲れた身体を休める。一瞬後、右手からサラ、急いで登場。ノラに近づく。）

サラ お父さんはどこ？

ノラ 二階に上って軍服を来ていらっしやいって、私が。あれを着るとあの人、心が慰められるの。

サラ（苦々しく。）どうしてお父さんが慰められる必要があるの！ 私よ、私こそ慰められなきゃいけないわ。あんな

馬鹿なお父さんを持って！

ノラ 馬鹿なつて・・・お父さんに分る訳ないでしょう？ あの女の人が・・・

サラ（急に逆の感情になって・・・殆ど仕返し気分で。）そう、あのサイモンのお母さんにだって、いい気味！ 自分ではたいしたレディーだと思っていたでしょうよ、アメリカ中の人間が敬意を払ってくれるような。あれで分ったわ、きつと。もつと怒らなきゃいけなかったの、それほどは憤慨しなかったのよ。いいえ、格好つけてるけど、本当は気分よかつたのよ。（再び正反對の感情に囚（とら）われて。）ああ私、何て馬鹿なことを言ってるの！ お父さんの気違い！ 酔っ払って相手構わず言寄るなんて！ いい気味よ。いいようにあしらわれて。いくらお父さんだって、そう簡単には忘れないでしよう、あの人に足元の塵芥（ちりあくた）のように見⁵られたんですからね。

ノラ それは違うわ。あの女の人、ちゃんとお父さんが飲んでいたので知っていたわ。そして、そういう人はまともにも相手をしてはいけないって。

サラ（疲れたように。）そうね。でも、それだって相当酷い話よ。ああ、あんな父親の娘と自分の息子を結婚させようなんて思う母親がどこにいるかしら・・・（泣き出して。）

ああ、お母さん。私、ついさっきまでサイモンはもう私のものつて・・・本当に幸せだった。それなのに今はもう・・・どうしてあの人わざわざ今日、やって来たの。もし明日まで待っていてくれたら私、サイモンに結婚の申込みをさせていたわ。それにあの人、一旦それを口に出したら、どんなこと

があつたつて決して心を変えるような人じゃないの。

ノラ あの人があなただを愛していれば、どんな力が来たつて決してその心を変えるようなことはないの。(誇り高く。)
それを一番よく知っているのがこの私!(安心させるように)
あの女の人は、あの人の母親よ。あの人を愛しているの。あの人が幸せにと思つているの。それに、あの人があなただを愛しているのを見てとつてているのよ。自分の子供に、あなただを嫌いにさせようだなんて、そんなことをどうしてあの人かと思うの?

サラ 私が嫌いだからなのよ。あの人・・・それが理由。

ノラ そんなことはないわ。あなたが嫌いだからなんて、そんなこと!

サラ いいえ、嫌いなもの。そう、私に対してそれは愛想がよかつたわ。でも私は騙されたい。あの人、首つり役人にだつて愛想よく出来る人。あの人か死刑台にのせられてる時でも。(声を低めて。)あの人、ここへ来たのは、ただサイモンの様子を見るだけじゃないの。サイモンのお父さんが、うちの噂を告げ口する手紙を受け取つて、それをあのお母さんに見せたからなの。

ノラ うちの噂? 誰がそんな手紙をあの家へ?

サラ 差出人の名前はなかつた。そう言つていたわ、あのお母さん。うちのお父さんを嫌つてるところの誰かね。それに、嫌つていない人なんていやしない!

ノラ その告げ口屋さんも可哀相に・・・誰か知らないけど。

サラ サイモンにあの人言つていた、父親が真つ赤になつ

て怒つて、弁護士に相談するつて。でも私、そちらの方は心配してないの。私、あの母親自身の、サイモンへの影響が怖いの。

ノラ あなた、その手紙のこと、どうして知つたの?

サラ(母親の目を避けながら。)扉の外で立ち聞きしたの。

ノラ 何てことをするの! あなたは。自分に誇りつてもがないの!

サラ 私、恥づかしかつたわ。だからちよつとだけで、すぐ降りて来た。(それから挑むように。)でも私、今は恥ぢてなんかない。あの母親がどんな手で来るか、知つておきかつた。それが分つていけば戦えるもの。私、ちつとも恥ぢてはいない。あの人をこつちにつけておけるなら私、何でもする。(声を低めて。)あのお母さん、部屋に入るなり、いきなり話し始めたの。時間があと数分しかない。父親が家に帰つて来て、自分がここに来たと悟られてはいけない。だから夕食前までにはどうしても家につて。サイモンがここで寝込んでからは、父親はあの人に固く禁じたんだつて、サイモンに会うことを。

ノラ じゃ、それを犯してここにやつて来た。ということ

は、あの人かサイモンの味方つていうことじゃないの?

サラ そう。でも、だからとつて私との結婚に賛成してゐることはないわ。(苛々と。)ねえお母さん、話はそんなに単純じゃないの。裏を読まなきゃ。あの人、サイモンにはあ話したけど、本当は父親に頼まれて何が何でも私からサイモンを引き離せつて言われて来ているのかも知れないわ。

ノラ 確かではないことで深読みをすることはしないの。じつと待ってれば分ること。多分あなたのことを……

サラ 私には分っているの、お母さん……あの人は私が嫌いな。(苦笑しく。)たとえ来た時は私に良かれと思っていたにしろ、今じゃもう、そんな考え、すっかりなくなっている。何しろ家(うち)の御立派な紳士様が、あの人を侮辱したんですからね。良かったわ、御立派な紳士様が、今軍服の装着中で。鏡の前で何時間もかかるんだから。その間にあの人行ってしまう。あの人の前でまた馬鹿な真似をしなくてすむのよ、お父さんは。

(ノラ、メロディーから言い付かったことを言おうとする……が、思い留まる。サラ、調子を変えてまた続ける。)

サラ でも、お父さんの軍服姿を見せるのはいいかもしれなわ。そう、素面(しらふ)でさえあれば。とてもあの人、見下せる男じゃないって分る筈。(苛々と。)まあ、私って、何て馬鹿！ お父さんと同じ。あの人、お父さんの考えなんか、お見通しじゃない！

ノラ(疲れたように。)(お願い、お父さんのことは放っておいて……)

サラ(間の後。挑むように。)(いい。あの母親に好きなようにやらせればいい。私だって頭があるの。あの人にもそれが分るでしょう。(それから心配そうに。)(ただ、サイモンが言っただけ、確かにあの人、レディーの雰囲気の後ろに、何か奇妙なものがある。あの人の本当の意図がどこにあるのか、それが分らない。)

(二階から人が降りて来る足音。)

サラ あの人よ。思ったより早く終ったわ。私今、あの人に会っても大丈夫な気持。お母さん、台所に下ってて。私、あの人と二人だけで話して、本音を引きだしてみたいの。

(ノラ、立上る。……それからメロディーの命令を思い出す。左手の扉を困ったように眺め、躊躇う。サラ、追いつくように言う。)

サラ 何をやっているの、お母さん。早く行って！

(ノラ、溜息をつき、右手の扉に素早く退場。サラ、中央のテーブルの後ろに坐り、ピンと背骨を伸ばし、待つ。無意識に父親の気位の高い素振りが移っている。デボラ、右手の扉に登場。息子との会話がどんなものであったか、その結果がどんなものであれ、全くその表情には影響がない。デボラ、楽しそうにサラに微笑。サラ、椅子から優美に立上る。)

デボラ(サラに近づいて。)(あなたがここにいて私、嬉し37いですが、ミス・メロディー。病気の息子にいろいろお世話戴きまして、帰る前にもう一度改めてお礼を申し上げなければ思っていましたの。)

サラ 有難うございます、ミスイズ・ハーフオード。母も私もお世話をする事が出来て本当に幸せでしたわ。(挑むようにつけ加える。)(私達、サイモンのことがとても好きなんですもの。)

デボラ(微かに目に光。サラのこの言葉を面白がっている。)(ええ、そのようですわね。あの子も同じ。お二人のことを大変好きだと言っていましたわ。)(デボラ、昔を思い出す様子になる。独り言を言っているような調子。誰も聞き手がいず、感情が外に出ない。声も低く投げ槍に。)(あの子が自己解脱

を求めて、自然の懐（ふところ）へと家を去ってから、あの子と顔を会わせたのはこれが初めて。手紙を受け取って、随分変っているだろうと思っていたけど、それほどではなかった。勿論最初の手紙を受け取ったのはもうずっと以前だけ。あの子は純粹に自然の懐に抱かれていれば、立派な詩が作れると思っていた。ところがやってみるとそれは、ロード・バイロンの焼き直ししかありはしない。この発見はあの子の心をひどく傷つけた。（デボラ微笑む。）でも、どうやら代償作用があつて、今では新しいロマンティックな夢を見つけたらしい、私の勸が正しければ、あの子は生来の夢想家・・・私の血を受け継いだための欠点。そう、ハーフォード家も夢想家の血筋。夢想が少し普通ではないけれど。私の夫だつて夢想家・・・勿論保守的で物質的な夢だけど。今サイモンに言つてやったことも丁度そのこと。あの父親は自分の夢が虚飯（こけ）にされたら、もう金輪際許さない。その許さない遣り口も酷く実践的なものだからね、と話したの。（デボラ、再び微笑む。）こんな脅しを言つたつて、それはただ母親の、夫に対する義務からだけ。何の効果もないだろうつて、あの子の顔を見て分つた。私の言つていることを聞いてもいない。でも、そんなことを言えばこの私だつて同じ。自分の言つていることを本気で思つていやしないの。（デボラ、投げ槍な笑い。こつそり自分自身で面白がつているかのような。）

サラ（デボラをじつと見つめている。この長舌の後ろに、何があるか決めかねて。そして、どうこれに反応したらいいか分らず。・・・次の台詞の下に流れているものは敵意。）サイモンはバイロンの真似などしていませんわ。私、バイロ

ンの詩なんか大嫌い。サイモンには真実の詩があるわ。

デボラ（微かに驚く。再び早口に。）ええ、まあ勿論、感情はね。あの子の詩には感情がある。あなたがそれに感じなくても無理はないわ。でも、ハーフォード家が代々持つているその感情、それを女が感心し続けるのはなかなか難しい。私のはあの家族の歴史を振り返つてみてそれが分つている。サイモンの曾祖父、ジョナサン・ハーフォードはその感情を持つていた。この人はバンカー・ヒルの戦いで戦死。でもきつと独立戦争に命を賭けたのではない。それはただ、看板の意味しかなかった。この人が命を賭けたのは、純粹な自由。それは確かだわ。サイモンの祖父、エヴァン・ハーフォードもその資質があつた。純粹な自由を求める狂信者。だから、アメリカの独立など、この人には吐き気がする程無意味だつた。アメリカの独立が、彼の自由のために一体何をしてくれたか。

妥協、妥協の産物ではないか。彼はフランスへ行つた。そして過激なジャコバン黨員に・・・ロベスピエールの崇拜者になつた。あの清廉潔白、買収不可能な救世主、ロベスピエールと共に、彼はギロチンに掛けられたかたでしょう。でも彼は、ゴミのような存在だつた。誰も、彼のことなど気にもしない。彼を殺そうなどと、思いもしなかつた。彼は故郷に戻り、小さな地所の片隅に、「自由の社（やしる）」を建て、その中に住んだ。その地所は今うちの庭になつている。社は今でも建つている。私は彼のことをよく覚えていて。無味乾燥で、礼儀正しくて、残酷で、不撓不屈の精神をもって。全く不毛な、年寄りの理想主義者。そしてフランス共和国国民護衛隊の古い軍服を時々ひっぱり出しては着ていた。そして

それを着て死んでいった。でも私の言いたいのは女の方の話。ハーフォードの男達がこんな風に自由を追求して行った陰で、彼らと人生をともした女達が、その男達にどんな仇（かたき）をうったか。あなたにそれを知って貰いたい。ジョナサンの後妻から生れた三人の娘、つまり、エヴァンの義理の妹三人は、男達の夢を支えるために、金を作らなければならなかった。やったことは海賊行為、それに、北西貿易。それが昂（こう）じて、ついには奴隷の売買。それで貪欲に、莫大な富を築きあげた。男達の自由追求のために奴隷になって戦い取った勝利のクライマックス、それは自由を奴隷にすることだった。エヴァンの妻も勿論この三人の小姑（こじゅう）と）達に引き回された。道具にされ、共謀者となった。この三人は勿論、私にも目をつけた。しかし、あの干からびた、貪欲な爪でひっかけるに足るだけのものが、私の身体にはなかった。あの三人は死んで今はもういない。あの三人があなただに目をつけられないのが残念。あなたは強くて、野心があつて、自分の欲しいものは手に入れる女。あの三人が生きていたらきつと、餓えた、よぼよぼの蛇のように、ニヤリと笑つてあなたをそのトグロの中に迎え入れたでしょうに。（デボラ、笑う。）邪悪な魔法使いのバアさん達！ 思い出すだけでもゾツとする。でも何故か感心してしまふ。一方では哀れんでいるのに。あの人達と私には共通点があつた。三人はナポレオンを崇拜していた。結婚するならナポレオンしかいないと、よく言っていた。私もそう。自分がよく、ジョゼフイオンであると夢見たものだった。結婚した後でもよ。夫には気の毒だけど。私達のハネムーンはパリだった。あの三人、そ

れからその他、家族中の者が、そのハネムーンに同行した。ナポレオンの戴冠式を見るために。

（デボラ、間を開ける。思い出すように微笑む。）

サラ（自分の意志に反して、この時までですつかりデボラの、速い、低い声の、音楽的に出てくる言葉に聴き入る。自分自身にこの話がどんな意味があるのだろうと、神経を張り詰めて。サラ、デボラにつられて、低い、内緒話を打ち明ける時のような話し方で、自然に微笑みながら。）私もナポレオンが好きでしたわ、今までずつと。私、父と意見が合わないことは色々ありますけど、これがその一つですわ。父がナポレオン側につかず、彼を敵にして戦ったことが。

デボラ（急に目が醒めたかのように驚いて・・・それから微笑む。）あらまあ、私したら、何てことでしょう。あなたに今、私、どう思われているかしら、ミス・メロディー・・・³⁹ああ、でもきつと、サイモンから聞いているわね？ 私が時々、急に変なことを話し始めるっていうことは。（デボラ、サラの顔をチラリと見る。・・・面白そうに。）ああ、やつぱりあの子、話したのね。じゃ、きつとあなたも割り引いて聞いて下さるわね。私、一体どうなったのかしら。・・・何故歴史なんか・・・そう、きつと狡いことはしまい、っていう考えからね。正々堂々と・・・そして警告すべきことは警告しなくちゃって。

サラ（身構えて。）警告って何をですの？ ミス・イズ・ハーフォード。

デボラ ハーフォード家の人間は、結局は夢を捨てきれない、ということ。たとえば口ではそれを否定しても、決して。

家に伝わっている呪いなの、これは。例えばサイモンが書くとして、本……強欲、あくなき所有への野心を廃し、権力への渴望（かつぼう）から個人を解き放つ、そして、わづかな物の所有で、満足することにより、我々の魂を救う。……こんなこと、あなた、まともにも相手出来る？（デボラ、ちらりとサラを見る。）（そうね、真面目にとつてはいないよね。私も。私はサイモンがこのことを本に書くかどうかさえ、怪しいと思っている。でも、あの子の良心の中では、もうそれは書き終えている。そこをあなたに警告しているの。私は……）（自嘲的な笑いで、自分の言葉を遮る。）（全く私ったら、カッサンドラーみたいね。予言なんかしたりして。それに、相変らずくだらないことを言つて、あなたを退屈させている。（優雅にサラに片手を差し出して。）（さようなら、ミス・メロディー。）

サラ（機械的にその手を取つて。）（さようなら、ミス・イズ・ハーフォード。）（デボラ、後ろの扉の方に進む。サラ、その後が続く。その表情は混乱と疑惑。しかし同時に、希望もあり。突然衝動的に言葉が口に出る。）（ミス・イズ・ハーフォード、私……）

デボラ（サラの方を向く。明るく。）（ええ、何ですか？）

ミス・メロディー。（しかし、デボラの目、この時までには虚（うつ）ろな、表情のないものになっている。これには誰だつて会話を続けようとするのは無理。）

サラ（急に黙り……堅い礼儀正しい態度で。）（お発ちになる前に何か私、冷たいものでもお持ちしましょうか。こんな暑い日にサイモンの小屋まで行っていらしたんですもの、

喉はカラカラになっていらつしやる筈ですわ。

デボラ（いりません、何も。有難う。）（それから再び早口に、例の奇妙な、自分と関係のない話をしていよう話しぶりで。）（ええ、確かにここに来るまでの道には、圧倒的な力があつたわ。奇妙な経験。恐ろしいような……でも、酔つてしまいそう。解き放たれた、ワツと叫びたいような気持ちになっている自分、それと同時に、自然に押し潰されて身動きの取れない自分。私はもう長いこと、自宅の庭の外から出たことなどなかった。庭では自然は飼ひ馴らされている。無理矢理従わされ、飾られている。私はもうすっかり、原始的な自然の、野生の力を忘れてしまった。その力が急に襲ってきたんですからね。（微笑。）（疲れた中年の既婚夫人には、ひどくまごつかせられた朝でしたわ。でも私、終始自分を忘れない哲学的態度は取り続けていた。……いいえ、哲学的ポーズかしらね……とにかくそれは自分でも偉かつたわ。だけど、これであの庭に帰れると思うと、ホツとした気持ち。庭……本……それに黙つて考えること。それから、庭を取り囲んでいる高い塀の外から聞こえてくる人々の生活の足音を無関心に聞き流すこと。サイモンのために母親としての義務を果すなんてこと、もう決してしないわ。他人への義務とは何か自分で分つていて、と思つている人達には、義務を果すつてことは崇高なことなんでしょうけど、私には……）（笑つ。）（あらあら、私、またお喋り。（扉の方を向く。））

ケイトーを随分待たせてしまつて。あの人、怒つているわ。あの人、大事にしている馬達、蠅にたかられてぐつたりよ。それもこの私のせい。ケイトーは黒人の馭者。この人もサイ

モンのことが大好き。ただサイモンが解脱なんて言い出してからは、ケイトーに会う度に握手をするので、すっかり辟易（へきえき）。このケイトーという人、奴隷の身分の頃でも、自己をしつかり持った自由人だった。ケイトーにはだから、不思議だったんでしょ、サイモンがわざわざ握手までして、「君は自由人なんだ」って示そうとしたことが。（デボラ微笑む。）ああ、失礼します、ミス・メロディー。今度は本当に私、行きますわ。

（サラ、デボラのために扉を開ける。デボラ、その前を通って通りに入る。左に曲る。窓二つ分、デボラが通り過ぎて行くのが見える。それから見えなくなる。サラ、扉を閉め、中央のテーブルの向こう側にゆっくりと戻る。そこで立つたまま考えている。その表情は、怪訝（げげん）、心配、怒り、の混ざり合ったもの。ノラ、右手の扉から登場。）

ノラ あら、駄目じゃないの、サラ。あの人を行かせてしまったらしちや。お父さんから私、言いつかっていたのよ……

サラ 私、あの人のこと、全然分らないわ、お母さん。こちらのことなんか全く気にしてなんかいないっていう態度に見えるでしょう？ でも、気にしているの。そして私のことが嫌い。私、それは感じる。でもはつきりは分らない……あの人、気違い、きつと。喋り始めたらもう自分では止（と）めようがないの。戯言（たわごと）の連続。サイモンの祖先について。あの人自身について。ナポレオン、自然、それに自分の家の庭、解脱と自由、その他いろいろ。でもその話の間中、ずっと私にしっかりと分らせていたの、これには隠された意味があるんだ、用心しろ、気をつけていないと飛んでも

ないことになるぞ、って。ああ、あの人、どこか狂っている。でも馬鹿じゃない。あの人、本心は、私とサイモンが結婚するぐらいなら、サイモンに死んで貰った方がまだまし、という気持。でも、そんなことサイモンにはおくびにも出さなかつた筈。そう、そんなこと飛んでもない。きつとこう言っただわ。「サイモン、あなた、あの子を本当に愛しているの？ あの子こそがあなたの幸せなの？」そう。でもね、あなた、待たなきゃ駄目。あなたのその気持が、本当に確かなものであることが分るまで待たなきゃ。「こう言って時間を稼ごうとした筈。とにかく待つことを約束させたのよ。そう、賭けてもいい！ これがあの人やったことよ！」

ノラ（この時までずっと左手手前の扉を見つめていて、ただ自分の心配事だけにまけていたが、脅（おび）えたように。）お父さん、今すぐにでも降りて来るわ。私、庭に出ている。（サラの腕を掴んで。）あなたもいらっしやい。怒りが収まるまで一人にしておいた方がいいわ。

サラ（手を振りほどく。苛々と。）ほつといて！ お母さん。お父さんのことなんか構っている暇はないの。私のこと下手いっぱい。サイモンに会った時、一番良い態度は何か、よく考えなきゃいけないの。あの母親みたいな大嘘つきにならなきゃ。あの母親のことを好いているふりをして、あの人（サイモン）に言ったことならどんなことでも大賛成って顔をする。絶対にあの人に見抜かれないうにしくちゃ……。そう、私、今日はもうあの人には会わないわ、お母さん。もし必要だったら、食事とミルクはお母さんが持って行って。私が忙しいからって。あの人に心配させた方がいいの。私が

何かであの人に怒っているって思わせる方が。そう、あの母親が何かを私に言っただけで怒っているんじゃないかって思わせるの。私があの人を嫌いになったんじゃないかって、ちょっとでも思ってくれば……ね、お母さん、そうしたら、少しは良い方向に進むんじゃない？

ノラ（左手手前の扉のノブが動くのを見て……囁き声で。）
ああ、大変！（慌てふためいて、振り返り、右手の扉から退場。）

（左手手前の扉 ゆっくりと開く。……「ゆっくりと」……何故なら、部屋の中で話し声がしているのを聞き、デボラがまだいると思ひ、充分に演出された劇的な登場をしようと構えた結果だから。その見え見えな意図にも拘らず、効果満点の登場。ウエリントン龍騎兵連隊の真紅の少佐の軍服を着るとメロディー、実に美男子で立派である。色鮮やかな、ロマチックな、人の目を驚かせる姿。この時までには表に現わしていなかった、彼の本当の資質……恐ろしいほど強い、怖れを知らない騎兵将校……が出てくる。軍服は非常な注意をもって保存されていたもの。鈕は光り輝き、しみ一つない生地。彼持前の傲岸さが、これを着ると顕著に表れる。それから、午前中のアルコールの効果を感じ、顔に生気をとり戻すため、あらゆる手立てを講じて来ている。デボラがいらないのを見て取ると、少し失望の表情。そしてサラと二人だけになるときにはいつものことだが、後ろめたい気持ちがさつと働き、怯（ひる）むような、内部の動き。サラの顔、堅くなる。父親が出て来たのに気づかないふり。メロディー、左手手前のテーブルをゆっくりと廻り、中央のテーブルの端に立ち、

サラの正面に来る。サラ、相変わらず父親に気づかないふり。メロディー、口を開かざるを得ない。自分の弱さに自分で面白がる謙（へりくだ）った男、という気分で、サラに話しかける。）

メロディー 私は部屋に帰って見たんだ。そうしたら、お母さんとお前が私の軍服をキチンと整えてくれていて……あんまりキチンとしているものだから、夕方まで待てなくて。すぐさま着てしまったんだ。

サラ（父親の方を向く。その姿があまりに立派なので、軽蔑の気持は消え去り、我にもあらず口ごもりながら、言葉が出てしまう。）そう、そうね……着たのね。（一瞬の間サラ、魅了されたように父親を見る。それから衝動的に感嘆の言葉。）立派だわ、お父さん。美男子よ。

メロディー（子供のように喜んで。）おお、これは親切な言葉だな、サラ。（得意になって。）バシツとこの軍服を着れば、私だってそうそうしよぼくれた人間には見えないだろう？

サラ（口をついて出て来る言葉は懇願でもあり、厳しい非難の言葉でもある。）ああ、お父さん、どうしてお父さんは、そうやって見える通りの人間になれないの？（声が悲しい軽蔑の調子になる。）過去のお父さん……私は知らないけど……軍人だったお父さん、そのお父さんだけだわ、夢じゃないお父さんで。

メロディー（その顔は本心を隠す虚ろな顔になって……冷たく。）お前の言っていることは分らないな。（間。傲慢に、面白がっている調子で言い始める。）お前はまた、お前

の未来の義理の母親にやった私の失敗を、根に持っているよ
うだ。根に持っていたとしても、それは当然だ。(メロディー、
微笑む。) そう、確かに私はあの女に言い寄った。その一歩
を踏み出したのだ。(クスクスと笑う。) しかし、全く計算
違いもいいところだ。私はヤンキーの女どもをどう扱ったら
いいか、その訓練はゼロなんだからな。ちよつとした毒のな
いお世辞を並べたてた。そうしたらどうだ、あの女、まるで
私が侮辱したかのように怒り始めたんだ。ピューリタンが背
景にあるとあなるのか。ちよつとした藪(やぶ)にも必ず
罪が隠されていると思つんだな。しかしあんなお世辞ぐらい
でビクビクする必要は全くなかった。私はああいう瘦せた、
蒼白い小女(こおんな)は趣味じゃない・・・(急いで。)
いや、私のしたかったのはお前への許しを乞ふことだ、サラ。
あれは私が悪かった。お前の話がうまく行くように私は最善
をつくす。名誉ある償(つぐない)をやつてみせる。あの母
親が降りて来たら、慎ましく謝罪の言葉を述べるつもりだ。
(傲慢な虚栄をもつて。) 私との和解に感謝しこそすれ、何
の不満があるう。あの女は怒つたふりをしたが、あの半分も
本気じゃない。私は女というものをよく知っているのだ。
サラ(この最後の言葉を聞くまでじつとメロディーを軽蔑
の表情で見つめていたが、衝動的に、嘲笑うような調子で、
言う。) そう、あの半分だつて怒つていやしなかった。(そ
れから自分自身へ、そして父親への怒りで。) ああ、お父さ
んの気違い! お父さんの夢の話なんか、もう沢山!(自分
を抑えて、冷たく。) その綺麗な軍服であの人を魅了して、
事態をもつと悪くしようとしたつて、もう手遅れよ。あの人

行つてしまったの。

メロディー(驚く。) 行つた?(怒つて。) 嘘だ、そんな
馬鹿なことがあるか!

サラ 嘘じゃないわ。もう十分も前に・・・いえ、それ以
上だわ。

メロディー(つい口から出てしまふ。) しかし、お母さん
にちやんと言つておいたんだ、私がここへ来るまでは・・・
(急に言い止む。)

サラ そうだつたのね。だからお母さん、あんなに怖がつ
て・・・いい? お父さん。あの人を行かせたのは私。だ
からお母さんにあたるのは筋違いよ。

メロディー あたる? 私が? おいおい、サラ。私はこ
れでほつとしているんだ。まさかお前、私が喜んでやりたい
と思つているんじゃない、辞を低くして他人に謝罪す⁴
るのを。たとえそれが娘の一件を好転させるためのものであつ
てもな。

サラ 好転? 聞いて呆れるわね。お父さんの大仰(おお
ぎょう)なお芝居をまた見せられて、陰でクスクス笑われる
のが落ちよ。(怒りと軽蔑の気持が込み上げて、つい訛りが
出る。) もう大抵にするものよ!(もう大抵にしんさい!)

(サラ、メロディーに背を向け、右手に退場。メロディー、
テーブルの端にある椅子の背を両手で握りしめる。その大き
な強い手で、込み上げて来る怒りをぐつと抑えるために。椅子
の背、大きな音がして二つに割れる。メロディー、両手に
残つた椅子の残骸を奇妙な驚きで眺める。バーへ通じる扉が
押し開けられ、ミッキー・マロイが声をかける。)

マロイ 少佐殿、クリーガンが戻って来ました。

メロディー（驚いて。意味なく繰り返す。）クリーガン？（それから顔が急に明るくなる。悲愴なほど会いたい気持ち。再びその名前を言う時、歓迎の暖かさがある。）ジャミー！

軍隊の昔の仲間！ ジャミー。

（クリーガン登場。メロディー、その手をしっかりと握る。）

メロディー おお、よく来てくれた、ジャミー！

（クリーガン、驚く。また、その暖かい歓迎に喜ぶ。メロディー、彼を部屋に導き入れる。）

メロディー さあさあ、坐ってくれ。一緒に飲むために来てくれたんだな。分っている。分っている。（食器棚からクリーガン用のコップを取って来る。自分用のコップと、デカンターは既にテーブルにある。）

クリーガン（感嘆の声。）いやいや、これは昔の軍服ですね。スペインでの姿、そのままですな、これは。

（クリーガン、左手前方のテーブルの右手に坐る。メロディーが少し前にそのテーブルの向こう側に坐る。）

メロディー（ひどく喜んで。・・・恨めしそうに。）いや、昔の姿はもう見る影もないよ、ジャミー。しかし、見られたザマではない・・・ほどではなからう。今日は記念日だから着たのだが・・・おお、君は忘れていたようだな。何だジャミー、タラヴェエラが泣くぞ。

クリーガン タラヴェエラ？ 今日がですか？ タラヴェエラを忘れるなんて飛んでもない。この刀傷を受けた日ですよ。

ああ、勿論あの日を祝つ権利があなたにはありますよ。あの日、一騎当千の活躍をなさったんですからね！

（この時までメロディー、クリーガンの方にデカンターを差し出している。ここでクリーガンのコップに注ぐ。）

メロディー（クリーガンの褒め言葉ですっかり元気を取り戻し、彼本来の傲岸な態度になる。）うんそうだ、あの時はまづまづの活躍だったな。（親分の態度で。）いや、その点になれば君だつてなかなかのものだった。（メロディー、自分のコップにも注ぐ。そしてコップを上げる。）あの日に、そして君の健康に、クリーガン伍長！

クリーガン（誠意を込めて。）あの日に、そして健康に、コン！

（クリーガン、コップの縁をメロディーのコップにあてようとす。しかしメロディー、コップをさっと引き、傲慢な調子で言う。）

メロディー（冷たい非難を含んで。）私はな、「あの日に、そして、君の健康に、クリーガン伍長」と言っただぞ。

クリーガン（一瞬怒る。しかしニヤリと笑って、感嘆の気持を込めて。）そうだ、世界だつて黙らせる力があるあんただ。そう、それがいつまでも変わらないように！（最後の呼び掛けに力を入れて。）あの日に、そしてあなたに、メロディー少佐！

メロディー（コップの縁を相手のコップにあてる。優雅に、これで満足して。）さあ、飲んでくれ、伍長。

（二人、飲む。）

（幕）

(場 同じ。バーへの扉は閉まっている。その晩の八時頃。中央テーブルには蝋燭が灯っている。メロディー、このテーブルの中央の位置に坐っている。光り輝く軍服をきたその姿は、この部屋に不釣り合いに色鮮やかである。その右手にクリーガンが椅子に坐っている。このテーブルのその他の椅子は無人。ライリー、オダウド、ロツシュの三人は左手前面のテーブルについている。ライリーは手前に。但し椅子が横向きになっているため、観客からはその横顔が見える。オダウドの椅子は右手の壁に向いている。その向こう、観客に面し、かつメロディーに背を向けて、ロツシュ。五人とも酔っている。メロディーは他の誰よりも。しかし目の中の光と死人のような蒼白さを除けば、酔いは表面に現れていない。紳士然と、礼儀正しくコップを握っている。)

(クリーガンが一番酔いが浅い。オダウドとロツシュは大声で喋っている。ライリーの酔いはただ、いつもより深い夢に入っていくだけ。周囲のことは全く眼中にない。)

(メロディーとクリーガンの前にはポトワインの空瓶が一本と、半分残っている壺一本。コップは二人ともなみなみと注いである。テーブルについている三人の前には、ウイスキーのデカンター。)

(サラが仕事着とエプロンをつけて、皿と夕食の余りを片付けている。キツと唇を結んでいる。五人を無視しようと決めているが、目にはどうしても怒りと軽蔑の表情が現れる。メロディーはテーブルの上に、フォーク、ナイフ、スプーン、塩入れ、等々を戦いの軍勢の配置に並べている。クリーガンがそれを眺めている。パッチ・ライリーはバグパイブの音合

わせのため、少し鳴らしている。)

メロディー「ここがタガス河、そしてここがタラウエラだ。こつち側が少し高くなっているフランス側の陣地。そして敵味方を分ける平野がここに横たわっている。こつち側が味方の陣地。第四分隊と守備隊がいる。この左手の谷に、我々騎兵隊が位置している。クリーガン伍長、覚えてるか?」

クリーガン(興奮して。)「覚えてるかですって? 昨日のことのようにはっきりと見えますよ。」

ライリー(突然ふざけた歌を歌いだす。バグパイブの伴奏も一緒に。ライリーの声は墓地から出てきたような震え声のテノールだが、それでもきちんと「バルティオラム(Balitorum)の正しい旋律を伝える。)

「あの娘(こ)は豚と小馬を持っていた。」

あの娘はベッドと箆筒(たんす)を持っていた

それに綺麗な小さな部屋も

その部屋は懺悔を聞く神父のための部屋

食器戸棚もカーテンも、それに何か他のものも

なあ、そういう話だな?

その部屋を神父さん、好きだったんだってさ

寒い日には特にね

おお、それどうなった

ハルー! ハルー! ハルー!

ビディー・オー・ラファティー

(原文)

(Shed a pig and boneens,

She'd a bed and a dresser,

And a 'nate little room

For the father confessor;

With a cupboard and curtains,

and something, I'm towld,

That his riv'rance liked

when the weather was cold

And it's hurroo, hurroo!

Biddy O'Rafferty!)

(ロツシユとオダウドが大声でこれに合わせる。コップでテールを叩いて拍子を取りながら。「ハルー！ ハルー！ ハルー！ ビディー・オー・ラファティー」と。そして酔っ払い特有の笑い。クリーガンもこの合唱に加わる。メロディー、話を中断されてムツとするが、とうとう親分らしい譲歩を示し、微笑む。歌の内容・・・神父への冒瀆・・・にもつられて。)

オダウド(メロディーの顔が和(なご)んだのを見て、狡い笑いを浮かべる。嘲笑するように。)坊さんなんてこんなものさ。悪魔に食われる！ ですね？ 少佐殿。

メロディー 全くだ。悪魔に食われるだ！ パイパー、実にいいタイミングだったぞ。この歌はうちの奴が来たら、また聞かせてやってくれ。あいつはまだ、こっそり坊さん信じているからな。さあ、もうこれで静かにしてくれ。クリーガン伍長と私は話がある。こつお前達がうるさくては、話も聞こえない。

オダウド(ニヤニヤ笑いながら、従順に。)はい、分りま

した、旦那様。おい、静かにしろ、パッチ。

(オダウド、夢見る顔つきになっているパッチ・ライリーを突き飛ばす。ライリー、椅子から落ちそうになる。不思議そうな顔でオダウドを見る。オダウドとロツシユ、ゲラゲラつと笑う。)

メロディー(顔を顰めて三人を見る。それからクリーガンの方を向き。)どこまで行ったかな、伍長。そうだ、我々は谷間で待っていた。フランス側のラッパが鳴った。連中は攻撃の隊伍を組んでいる。そして副官の一人が馬で我々の方に駆け降りてきた。

サラ(この時まで軽蔑の表情を浮べて父親を見ていたが、手を伸ばして彼の皿を取ろうとする。・・・嘲りの調子の、ひどい訛りで。)さあ、皿を戴きますよ、少佐。味方の龍騎兵が突撃して、敵を蹴散らす前に。

メロディー(皿に手をかけ、サラにそれを奪われないようにして、もう一方の手でワインのコップを持ち上げ、サラを無視して言う。)伍長、もう一杯行こう。タラウエラは酷く喉の乾くところだった。覚えているか。(メロディー、飲む。)クリーガン(サラの方を、居心地悪そうに見て。)ええ、そうでした。(クリーガン、飲む。)

メロディー(唇を舐めながら。)良いワインだ、伍長。やれやれ、うちの酒倉にまだ紳士に出して恥づかしくない酒があるとは、有難いことだ。

サラ(怒って。)私に皿を片付けさせないつもり？

メロディー(サラを無視して。)いや、客に、酒で謝る必要は全くない。それを言えば、食事に対してもそうか。ノラ

は腕のいいコックだ。あの、いつものケチを忘れて、食うに足る材料さえ買ってくれば、美味い物を食わしてくれる。しかし、給仕に関しては謝らなければならんぞ。ウエイトレスにちゃんと教え込んでいるのだが・・・皿をテーブルから引つたくなるようなことはするな、それじゃまるで、犬小屋の犬に飯(めし)を出してやっていいるのと変らなないと・・・しかし、どうも分つてくれないようだ。(メロディー、皿から手を放す。サラに。)そら、礼儀正しく片付けるんだぞ。

(サラ、一瞬メロディーを見る。怒りで口をきかない。それからメロディーの目の前でその皿を引つた。) (サラ、)

クリーガン(急いでメロディーに、戦場の話を思い出させる。)その副官が馬で駆けて来た方向は、少佐、あなたを目掛けてでした。丁度その時、フランス側の大砲が火を吹いたのですかね。

(サラ、盆の上に皿を山積みして右手から退場。)

メロディー 味方は左手の縦隊に突撃をかけた。・・・ここだ・・・(テーブルクロスに印をつける。)こっちの守備隊を押しぎみに攻撃していた縦隊にだ。フランス側の、あの意気は凄かった。騎兵に槍の一团がこちら目掛けて突進して来るんだからな。あれを生き残れたのは全く奇跡としか言いようがない!

クリーガン 少佐は敵に指一本触れさせなかった。上衣に弾丸(たま)が通つて穴があいただけだった。しかし私は頬にこの刀傷が残りましたよ。敵のサーベルが斬りかかって。

メロディー 何ていう勇敢な日だったんだ、あれは! しかし、ああ、日は経つ。人は行き、そして人は忘れる。(言

い止む。・・・再び口を開くと、苦いものがある。(夢にだに思わなかった。あの私の武功があんな形で報いられたとは。クリーガン(慰めるように。))ああ、あれは運が悪かったです。すぐに大佐に昇進なさるところでしたのに。あのスペイン女のために決闘をやったのが間違いでしたよ。

メロディー(傲慢に。脅す言葉つきで。)私のあの行為を君は非難しようというのかね、クリーガン伍長。

クリーガン(急いで。)失礼しました。今の言葉は取り下げます。

メロディー(固い表情で。)よろしい。謝罪を受け入れよう。

(メロディー、残ったワインを飲み干し、また注ぐ。そして不機嫌に前方をじっと見る。クリーガンも飲み干し、なみなみと注ぐ。)

オダウド(ロツシュ越しにメロディーを盗み見て、ロツシュに屈み込むように・・・嘲笑う調子の囁き声で。)あの野郎、全く気遣いだな。真つ赤な服を着て、まるで役者だ。フランスの奴らと戦争? あんなのみんな嘘つぱちさ!

ロツシュ(不機嫌に・・・しかし、注意して声は低くして。)罰(ばち)があたればいいんだ。イギリス軍の赤い服など着おつて・・・あんなもの着たつてというのがそもそも罰あたりさ!

オダウド おい、あいつのことを悪く言つな。あいつがいなきや、俺達、酒にはありつけないぞ。それより乾杯でもしてやるつ、あいつに長生きしろつてな。そうすりゃ、おだてに乗つて、また奢ってくれるつてことよ!(ロツシュと自分

にデカンターから注ぐ。)

ロツシユ(酔つて、目が横に動く。)全くだ! おお、あいつのために乾杯してやるぞ。(向きを変え、メロディーに面と向く。コップを持ち上げ、怒鳴る。)アイルランドの島からやって来た男の中の男、紳士の中の紳士、少佐殿の長命を祈つて、乾杯!

オダウド 万歳! どうぞ長命を、少佐殿!

ライリー(自分の夢から醒めて、機械的にコップを持ち上げ。)それから御家族一同に、乾杯!

メロディー(思いに耽つていたのを急に醒されて、すぐに人のよい紳士然となり、寛容に微笑む。)あまり声を上げるなど言つておいた筈だぞ。しかしとにかく、乾杯には感謝する。

(五人で飲む。間。突然メロディー、バイロンの詩を吟じ始める。その朗読は、立派な、もの静かな、苦い雰囲気の籠つたもの。)

「しかし、群衆の真つ只中で、その活動、喧騒の中で、疲れた人間達の顔を見、声を聞き、

その存在を肌で感じ、その行動を共にし、

一緒に歩き回る時。

そして俺を祝福する者は誰もいず、

また俺が祝福できる誰もいず、

偉業を成し遂げ得る人間も、悲しみのために縮こまり、

気心の合つた友人と話しても微笑みさえ浮かべない。

そしてもし、もし俺が、

あの諂(へつら)う人間の仲間でなかったら、

後を追われ、せびられ、

物を頼まれる人間の仲間でなかったら、

これが孤独ということだ。

そう、これだ。これこそ孤独というものだ。」

(メロディー、朗唱を終る。そして相手の顔を一人一人見る。全員、全く無表情。メロディー、軽蔑と嘲りを込めて言う。)

メロディー 何だ。お前達、誰も分らないのか。まあ、その方がいいだろう。私が馬鹿なことをやり、お前達がそれを腹の中で笑う。そういうことだ。(それからサツと雰囲気を変えて、明るく。)ああパツチ、狩の歌を頼む。お前、「モディデル」を忘れてはいまい。賭けてもいい。覚えている筈だぞ、お前は。

ライリー(すぐに興を掻立てられて。)アヒルが天気を忘れるかつてんです。よし、行くぞ。(バグパイプで序奏の部分を始める。)

オダウド モディデル!

ロツシユ ハルー!

ライリー(伴奏を弾きながら狩の歌の思いつく所から歌い始める。泣き叫ぶような悲しい調子あり。)

「そして狐は高い所に登り、辺りを見回した。

他の者達は怖がつて、そこまでは行かなかつた。

『僕が間違っているのかもしれない』狐は言った。

『しかしお前達、明日も同じように陽気でいられるか?』

それは疑問だ。いくらお前達が大声で叫んでも、

高く駆け上ると、僕の悲しみを感ずることは

ないだろう。

お前達が明日、低い所に横たわっている間、僕はこの高い所で自由を感じる。』

おお、モディエーラー！ アルー！ アルー！
(原文)

'And the fox set him down and looked about,
And many were feared to follow;

"Maybe I'm wrong," says he, "but I doubt
That you'll be as gay tomorrow.

For loud as you cry, and high as you ride,
And little you feel my sorrow,

I'll be free on the mountainside
While you'll lie low tomorrow.

Oh, Modideroo, aroo, aroo!"

(今やメロディーも興に乗り、コップでテーブルを叩き、拍子を取る。クリーガン、ロッシュ、オダウドも同様。そして全員で繰返しの「おお、メディエーラー、アルー、アルー」を怒鳴る。)

メロディー(目が輝き、我を忘れ、つい強い訛りが出て来る。)ああ、これで思い出した。あの昔の日を、はつきりと！ 無くなってしまったあのメロディー城！ 南からの風、空は雲で灰色・・・狩に持つて来いの日だった。あれは忠実なアイルランド独特の獵師だった。私を愛し、私の下で働いてくれたあの勢子(せこ)は。私が命令すれば、地獄にでも飛び込んだらう。エーイ、人間なんか男も女も地獄に落ちればいいんだ！ 腐った卑劣な心を持つて、嘘が、慾が、悪巧みが、プンプン臭って来る！ 私には馬だ、馬をくれ！ 人

間とはもう終りだ。人間どもは野に放(はな)つて獵犬で追いまくるんだ！ 首をやられないよう気をつける！ 溝を越え、小川を越え、石の壁を越え、垣根を越え、逃げるんだ。まるで狐だ。身を折り曲げて、山腹を逃げて行く！ 針工ニシダとヒースをかき分けて・・・

(この時までにはサラ、左手から登場。父親の狩の話のところから聞いている。その椅子の後ろに立って、軽蔑の表情を浮べて。メロディー、急に娘の存在に気づき、首を回す。娘の目に嘲りを認めると、その顔はまるで冷水を浴びせられたようになる。サラがまるで召使であるかのように尊大に言う。)

メロディー 何だ、どうした。何を突っ立っているんだ。

サラ(乱暴に。ひどい訛りで。)突っ立っている理由など、分りきっているでしょう？ 自慢の馬の話なんかして、ちっとも片付けられない。お父さんも、他の人達も、さっさとバーに行つて。飲んだくれるならあつちでして。ここは片付けるんですからね。

(オダウド、手でニヤニヤ笑いを隠す。ロッシュ、馬鹿笑いが出るところを押し殺す。)

クリーガン(メロディーを心配そうに見ながら、サラに諭すように首を振つて。)なあサラ、そう怒らないで・・・

(しかしメロディー、怒りの反応は抑える。少しぎこちなく、用心しながら立上り、一礼する。)

メロディー(冷たく。)そうか。片付けの邪魔をしたか。それは謝る。(オダウド他二人に。)バーに行くんだ、お前ら！

オダウド はいはい、バーですね。さあダン。起きろ、パツ

チ！

(ライリーをつつく。オダウドとロツシユ、バーに行く。ライリーもその後を、躓(つまづ)きながら追う。クリーガン、メロディーを待っている。)

メロディー 先に行っていてくれ、伍長。すぐ私も行く。娘に話があるんだ。

クリーガン 分りました、少佐。

(クリーガン、再びサラに頭を振って、「父親を怒らせるなよ」と合図。サラ、これを無視する。クリーガン、バーに退場。後ろ手に扉を閉める。サラ、父親を、怒りと軽蔑の表情で見つめる。)

サラ 酔っ払い！ 大人しく私がお父さんの話を聞くと思つてたら・・・(大間違だよ。)

メロディー (顔は全く無表情。中央のテーブルの向こう側の椅子を引いて、礼儀正しく。) さあ、坐つて、サラ。

サラ 坐りません。時間がないの。可哀相にお母さん、立っているのがやつと。私、手伝うの。大記念祝賀会の晩餐で、山のような汚れた皿。(不満たらたらの調子。) 終つてやれやれだわ。私が給仕をするのもこれが最後ですからね。あんなオダウドみたいなカスの酔っ払い連中に、お給仕なんかもう真つ平・・・

メロディー (静かに。) 酔っ払いのカスにだらうと誰にだらうと、そいつらに自分の父親を嫌い、軽蔑しているところを見せて、いい気になっているとは呆れた娘だ。(メロディー、肩を疎める。)(しかしまあいい。(椅子を再び指し示して。)) さあ、坐らないか、サラ。

サラ もしお父さんが現実を直視する勇氣を持ったとしたら、それが自分を軽蔑する時なのよ。(勢いこんで。) いつもお父さん、自分の顔を鏡で覗き込んでいるわね。そのうちその鏡から、きつと現実の姿が出て来るわ。きつとよ！ その現実の姿が、今までお父さんが私とお母さんにしてきたことへの復讐なのよ！

(父親がかつとなつて自分に酷い言葉を浴びせると勇敢に待つ。しかしメロディー、この言葉が全く聞こえなかつたかのような態度。)

メロディー (顔は無表情。態度物腰は、ぼんやりとして慇懃。)(まあ坐るんだ、サラ。長い時間じゃない。これから私が話すことは、多分お前、大変興味をもって聞くだらうと思つう。)

(サラ、探るように父親の顔を見る。この冷たい、静かな、紳士的な調子の陰に脅迫を感じて、不安を覚える。サラ、坐る。メロディー、空の椅子を一つ置いて、テーブルの後ろに坐る。)

サラ 口を開く前によく考えるのね、お父さん。飲んで、こんなに静かになっている時つて、必ずその頭の中に酷い考えが詰まっているの。用心しなきゃ。

メロディー 何のことを言っているのか、私にはよく分らないな。ただ私は、今日の午後、ここで起つたことを言おうとしているだけなんだから。

サラ 今日の午後・・・(再び侮辱された気持になつて・・・嘲るように。)(私とお母さんが汗水たらしてここの旦那様の宴会の御馳走を作っている間、当の御本人の旦那様は、美

しいサラブレッドにお乗り遊ばして、どこかへお出掛け。またこの間のように、あの馬を見せびらかすために、どこかの家の庭の垣根をジャンプさせたんじゃないでしょうね。牢屋を逃れるためにタツプリ損害賠償を払わされるのは、もうこりこりですからね。

メロディー（馬のことを言われ、またかつとなつて・・・軽蔑するように。）ヤンキーの田舎っぺが！あの素晴らしいサラブレッドが自分の庭・・・それも鶏を飼っている庭に入つたんだ・・・有難く思つて当然だぞ。あの馬は血統からすれば、こちらのどんな女どもより由緒正しいんだ。そう、今朝やって来たあの女と較べてもだ。

サラ ミスイズ・ハーフォードは、お父さんの正体をずばりと見抜ける人よ。そしてそれを物笑いの種にすることが出来る人。

メロディー（この揶揄に全く怯むことなく・・・静かに。）お前のお人好しにも呆れたものだ。あの淑女ぶつた振舞いにすぐ騙されてしまうんだからな。勿論お前と母親が降りて来た時、あの女が取り乱して何か言うのは当たり前だ。なにしろ、私にキスを許した丁度すぐ後だつたんだ。取り繕う必要が・・・

サラ（つられて、勢いこんで。）あの人がお父さんにキスを？（それから軽蔑するように。）嘘だわ。でもきつと、お父さんはそういう場面があつたことを今では信じているんでしょうね。（怒つて。）私は行きます。お父さんの酔いに任せた自慢話もう沢山・・・どうせありもしなかつた話！いつものように。（サラ、両手をテーブルの上のせ、立上

ろうとする。）

メロディー（片手でその動きをぐつと止めて。）待て！（仕返しが残酷な目付きが目に見れて・・・静かに。）お前はどつしてそう、あの馬を目の敵にするのだ。あの綺麗な足首、すらりとした足が羨ましいのか。（掴んだサラの両手を放し、じつと見て・・・軽蔑の言葉で命令する。）何だその百姓女の手は。分厚い、醜い手だ！私の目の見えない所に置くんた、そんなものは！胃がひっくり返るような気分だ。そんな手をサイモンには決して見せるんじゃないぞ！

サラ（本能的に両手をテーブルの下に入れる。上に置いたのが悪いことをしていたかのように吃つて言つ。）な・・・何て酷いことを！お父さん・・・お父さん・・・

メロディー（一瞬後には恥ぢている。心から悔いて。）許してくれサラ、本気じゃない・・・酒の上での言葉だ・・・5
お前の言う通りだ。（それから無理につけ加える。椰（からか）いの調子が籠っている。）馬鹿なことを言つたものだ。お前の手と足は、あんなに綺麗だつていつのにな、サラ。

（サラ、パツと立上る。あまりに傷つけられ、怒りでいっぱい。唇が震え、言葉が出ない。メロディー、静かに続きを言う。）

メロディー お前、行くのか！私は今日の午後、サイモンと話をしたんだ。そのことをお前に話そうと思つたんだがな。

（サラ、驚いてメロディーを見つめる。メロディー、軽い調子で続ける。）

メロディー 馬で散歩に行つて帰つてからのことだ。並足

で行っていたんだが、馬がびっこを引き始めてな。それで私は馬を降り、納屋まで歩いて連れて帰った。誰も私の帰宅に気づいた者はいない。私は二階に上った。そこでふと思った。

あのハーフォードの奴と話すこんないい機会はまたとないぞ。邪魔は決して入らないんだからな。(メロディー、間を置く。サラが怒り狂って何か言つのを待つかのよう)。しかしサラ、全身を緊張させて聞いている。自分の反応を父に知られまいと決心して。) 私は探りを入れるような、そんな手は使わなかった。私はこう言った。「君は、サラの父親から質問を受ければ、君の持札を全て出して見せるのが、紳士としての義務ではないか。君だつて気づいているだろう、君が病気になる、この家の二階に寝込むようになるもはずつと以前から、私の娘と君との関係は、人の口に乗っていたのだ。サラはしよつ中君の小屋に行っていたし、サラとの二人の散歩は沢山の人達に目撃されていたんだからな。このような親密さは、私の娘に深刻な傷を齎(もたら)すことなく続く訳には行かない。」そう言ったのだ。

サラ(言う言葉なし。何てことを！あの人は何て？)

メロディー 一言もある訳がない。あいつは名誉を重んじる男だからな。ひどく当惑して、一瞬すまなそうな表情もした。口がきける状態になると、私の意見は実に尤もだと言った。そして、あれの母親も全く同じことを言った、と言っていた。

サラ あら、あのお母さんも？ そんなことより、私との関係がどこまで行っているかを訊いたのだと・・・
メロディー(冷たく。) 当り前だ。あれは母親なんだから

な。お前との関係の度合を知る権利も義務もあるさ。あれは世長(た)けた女だ。お前達二人は行き着く所まで行つたと思つていたろう。

サラ(上ずつた声で。) そう？ あの人はそつ？

メロディー しかしそれは本題ではない。この話の本題はあの男が最後にお前と結婚したいと言つたことだ。

サラ(自分の怒りを忘れて・・・勢い込んで。) そう、あの人が？

メロディー そつだ。そのことは母親にも話したと言つた。母親の答は「勿論私は、子供の幸せを望むものです。でも、すぐ結婚はいけません。よく二人の愛を確かめあって・・・勿論これには二つの家庭の話も含まれますが・・・そのために時間をにおいて・・・それからしなければ」と。その期間是一年・・・と言つたと思う。

サラ(怒つて。) 一年・・・なんて狡いの、あの人！ 時間稼ぎよ！

メロディー(肩を上げて。冷たく。) 狡い？ 私はそうは思わない。あの母親がこれだけの常識的センスを持ち合わせているとは私は思つていなかった。母親があの子に言った理由は、お前の名誉にとつても実に考慮が払われたものだ。お前はそれに感謝こそすべきであれ、疑いなどもつての他だ。

サラ まあまあ、お父さんたら、またあの人に体(てい)よく騙されたのね。あの人が私の名誉に考慮を払つただなんて！

メロディー まづあの息子に話して聞かせたことは、もしお前がヤンキー仲間の家族の娘であつたら、急いで結婚して

も何の問題もなからう。却って早く結婚する方が彼の・・・

サラ 分ったわ。頭がいいのね、あの人！

メロディー もう一つ理由がある。サイモンはこの点を説明するのにひどく回り諄（くど）い言い方をして、私は理解するのに暇がかかった。母親は彼に、急いで結婚すると、世間から疑いの目で見られ、厭な噂が立つだろう、と言ったのだ。

サラ（声が上ずる。）本当に頭がいいこと！でも私、ちゃんと反論出来るわ。

メロディー 私はサイモンに言った。私も全く同意見だな。二つの家族の結びつきに必要なある期間を置かず、突然結婚すれば誰だっと思うものだ・・・

サラ 誰が何と思おうと知ったことじゃないわ！さあ言うて！サイモンは母親に待つと約束させられたの？（メロディーが答える前に・・・苦々しげに。）そんなこと決っているわ、聞かなくても。その約束なしである人がここを出て行くなんて、ありっこないもの！

メロディー（これを無視して。）私は彼に言った。正式に私の娘への結婚の意志を示してくれたことに感謝する。しかし、このことは知って貰わねばならない。私はあれの父親と金銭的な話で同意が得られるまでは、君の申し出にすぐ応じる訳にはいかない。早い話が、例えば、持参金の額のことだ、と。

サラ また金！可哀相なお父さん！（ゲラゲラつと、少しヒステリックに笑う。）きつと、サイモンも呆れたわ。この人、気が狂っている、と思っただわ。それでサイモンの答は？

メロディー 勿論何も言いはしなかった。あいつは育ちのいい男だ。父親が答えるべき質問に、自分が代って答えるようなことはしない。問題はお前に対する持参金だけじゃない。父親がサイモンにどれだけ金を譲るかという問題もある。しかし、この話は私はしなかった。これ以上金の話をしてサイモンを困らせることはないと思っただからだ。

サラ よかったわ。それぐらいの判断はついて。（ヒステリックに笑う。）

メロディー（静かに。）何故お前がこのことをそんなに馬鹿馬鹿しいと思つのか、私には分らないね。持参金も相続も、昔から決っている習慣だ。サイモンは長男で、父親の財産を受け継ぐ。過去のいきさつがどうであろうと、一旦長男が結婚するとすれば、父親はそれなりのことをしなければならぬ。それに、子供が詩人或は哲学者として食って行くこととしてい5
るなら、残念ながらそれだけでやって行くことは難しい。勿論父親はサイモンに何らかのものを与える筈だ。そこで私は私の娘としての相応しい生活を保証する、かなりの金額にすべきだと主張するつもりだ。あの父親がケチケチ値切るような真似をすれば、はつきりそう言つてやるつもりだ。

サラ（呆れたように父親を見る。堪えきれず再びヒステリックな笑い。）サイモンの父親は、私を嫁に貰つことをちつとも名譽だなんて思っていないわ。お父さんにはそれが分らないの？

メロディー（静かに。）分らないね。それに、万一あの父親が名譽と思わないなら、その心を一瞬のうちに私が変わえてみせる。あの男が一体何だというのだ。金稼ぎのただの商人

(あきんど)ではないか。私を見る。私は貴族だ。城で生まれたのだ。富と地位と屋敷を持っていた時期があるのだ。ただの屋敷ではないぞ。あれに較べたら、サイモンの父親の、あのヤンキーの成上り者の家など、キャベツの葉にくつついたあばら屋に過ぎん。それからサラ、お前はその城で生まれた。そのことをキチンと奴に知らしめるのだ。

サラ(衝動的に頭を誇り高く持ち上げて。)そう、私はお城で生まれたの!(それから自分自身に、そして父親に怒つて。)ああ、何て戯言(たわごと)なの!(さうと立上る。)もう沢山! お父さんの気の狂った夢なんか!

メロデー 待て、まだすんでいない。(静かに。しかし言葉が進むにつれ、サラに対する仕返し気分が深まって行く。)私はサイモンの申し出に、すぐには応じられなかった。金銭的な問題以外にもう一つ理由がある。私はこの、申し出を受けた結婚について、時間をかけて考えたかった。私はお前の行動を偏見なしで、じつと観察して来た。そして考えた・・・お前に極力公平であろうと、そして情状酌量の余地があればそれらは全て認めることにして・・・(間。)その結果出した結論だが、正直のところ、お前はただの百姓女だ。下卑た、欲張りな、腹に一物ある、狡い女だ。考えることと言えば金だけ。偶々(たまたま)金持ちの御曹司が転がり込んで来た。それで恥知らずにもそいつを引つ掛けてやろうと思った。それだけのことだ。

サラ(ぐっと自分を抑えようとしながら。)お父さんの魂胆は見えているわ。飲むといつもこれ・・・でも今度は私、お父さんの言いなりにはならないわ・・・(それから怒って

怒鳴る。)出鱈目(でたらめ)よみんな、そんなこと! 私はサイモンを愛している。お金なんか・・・

メロデー(相手がまるで口を開いていないかのように。)従って私は決心した。サイモン・ハーフォードのお前に対する結婚申込みは断るつとな。

サラ(今や怒って、嘲りの声。)そう。そう決心したの。お父さんが何を決めようと思ったことじゃないわ。

メロデー 私はあのサイモンに対して、紳士としての義務を感じている。こんな結婚は、あの男には全く似つかわしくない。悲劇になるのは目に見えている。そして、そういう結婚による悲劇を、私は誰よりもよく知っているのだ。

サラ 何がお父さんの悲劇よ。お母さんの悲劇じゃない!

メロデー 私はあの若いハーフォードに、高い尊敬の念を抱いている。あの男が取り返しのつかない過ちを犯すのを、私は黙って見ている訳にはいかない。それも、飛んでもない過ちだ。ただ胸の悪くなるような後悔の念、それに、自分の夢が悉(ことごと)く敗れ去るのを見なければならぬからな。

サラ とにかく私では、あの人には不足だつていうこと、そういうことなのね?

メロデー それはお前の行動の一つ一つから明らかではないか。誰が見たって・・・そう、お前をどんなに鼻屑目(ひいきめ)に見たって・・・お前を貴族の出と見る者はいない。私はお前がそうなるよう、出来るだけの努力はしてきた。しかし無理な相談だった。雌豚の耳をいくら加工してみたところで絹の財布には仕上げられないからな。

サラ（激怒する。）何てことを！

メロディー ああ若いハーフォードは、自分の身を守らなければならぬ。彼が若い女性の肉体にフラックとするのは分る。お前は美人だ。お前の母親もかつては美人だった。しかし結婚はまた自づと別の問題だ。お前にとつて一番理想の夫は、その行動、性格 から判断して、ここのパーティーのミック・マロイだ。彼となら私は心からの祝福を与えてやる。

サラ もう止めて！ お父さん。

メロディー お前とあの男ならうまが合うだろう。お似合いの夫婦だ。あいつは豚のように健康だ。お前との間にはいやという程がきが出る。そいつらはお前達の住む小屋の、泥だらけの床で豚と一緒になつてキヤーキヤー騒ぎながら、取っ組み合いをするだろうさ。

サラ それはお父さんの父親の話ね。汚い床の上で生まれ育つた。お父さんはよく覚えてるんでしょ。

メロディー（痛い所を突かれて怒る。憎しみの籠った目でサラを見る。メロディーの声、震える。しかし、非常に静かに。）勿論お前がああハーフォードをうまく騙して、子供でも出来たという話になれば、私だって結婚の同意をせざるを得まい。（自制を失って、テーブルを拳（こぶし）で叩く。）それでも駄目だ！ 私が自分のことを振り返つて見れば分ることだ！ そうなつたつて、あの男に、お前と結婚しろなどと、この私の口から言えるものが。そんなことをしたらこの口が腐つてしまふ！

（ノラ、右手の扉から登場。二人に駆け寄る。）訳註 この後ノラは、何も言わず、また退場のト書きもない。ノラの登

場は不要と思われる。）

サラ（憎しみを込めて睨み返す。）このへらはず口の酔っ払い！（サラ、片手を上げ、父親の顔を殴ろうと、その近くに進む。・・・それから思い直し、静かに、皮肉たつぷりに言う。）お父さんの同意なんて、そんなの私にはどうでもいいこと。それより、親切な父親らしい御忠告を感謝するわ。サイモンを籠絡するにはどうすればよいかを。今のところ必要ないけれど、最悪の事態になつたら、きつと仰せの通りに・・・メロディー（冷たく無表情に。）どうやら言おうと思つていたことはこれで全部だ。（メロディー、立上り、固くお辞儀をする。）失礼してよければ、私はクリーガン伍長の所へ行く。

（メロディー、バーの扉へ進む。サラ、振り返り、右手の扉から静かに退場。中央テーブルの皿を片付けるのをすっかり忘れていた。メロディー、皿に背を向けてからは、サラが出て行ったことに気づかない。バーへの扉のノブに手をかけ、躊躇つ。一瞬強気が崩れ、弱々しくなり・・・胸から搾り出すように。）サラ！（それから、静かに。）言つてはいけないことも言つてしまつたようだ。私は今は・・・後悔している。頼む・・・許してくれるな？・・・お母さんもよく知っている。あれは私の酒の上での話だ。・・・どうやら記念日のお祝いで、飲み過ぎたらしい。頭がウイスキーでやられてしまつたんだ。・・・お前の言つた通りだ。（メロディー、サラから許しの一言が出るのを待つ。やっと肩越しに後ろを見る。サラはそこにいず、自分の言葉も聞いていなかったと知り、一瞬頰（くづ）おられる。軍人らしい、ピンとした姿勢

は崩れ、顔がだらりと緩む。悲しそうな、希望のない、辛く、老いぼれた表情になり、目は虚ろに彷徨（さまよ）う。しかし、前、一、二幕での時と同様、ここでも鏡が彼の注目を引く。バーへの扉を離れ、鏡の前に立つと、再び傲慢なパイロンのポーズを取る。鏡の前で、前二回の時と全く同じ仕草をする。まづ誇り高く次の言葉を。（この私が進退窮まるだど？

弱気は止める！ ああ、神よ、力を！（通りに通じる扉にノックの音。しかしメロディー、それが聞こえない。パイロンからの例の引用を朗唱し始める。）

「俺は世間を、世間も俺を、相手にしたことはなかった。

俺は世間の奴らに、おべっかを使ったことはない。

やつらが祟（あが）め奉（たてまつ）っているものに、

連中と調子を合わせるために、

一緒に膝まづくことなど、したこともない。

お愛想笑いに自分の頬の皮を緩めたこともなければ、

連中が誰かに、声を揃えて讃歎の声を上げる時、

俺はただ、それを冷やかに眺めてきた。

連中に俺を、その仲間の一人だと思わせたりするものか。

俺は立っている。きやつ等に交じって。

だがいいか、俺は奴らの中の一人じゃないんだ。・・・」

（扉のノックの音、もっと大きくなる。メロディー、驚き、バツの悪い顔をする。急いで鏡から離れる。その顔が次に、怒りの表情になる。外に呼ぶ。）何だ！ さっさと入ればいいだろう、馬鹿野郎！ ドアマンがお前のために開けてくれると思っているのか！

（扉が開き、ニコラス・ギャツビー登場。ギャツビーは四十

代後半。背が低く、がっちりしていて、大きな禿頭に、丸い赤ら顔。小さな青い目。融通のきかない堅物。金持の家族のお抱え弁護士。服装と態度物腰に落度のない男。喋る時はものしく、自分の職業の権威と尊厳を非常に意識して喋る。

しかし、この場合は、今までに彼の経験のないもの。彼の態度が示すように、どうしてよいか見当がつかない。キチンと軍服を着込んだメロディーの姿、それにメロディー自身のキリッとした男らしい顔、は全く予想を越えたもので、一瞬アツと息を飲む。メロディーの方も驚く。ノックしていた男が紳士であるなどと思っていなかったからである。メロディー、声の調子は相変らずぶつきら棒であるが、顔は穏やかになる。メロディー、堅いお辞儀。ギャツビーも機械的にお辞儀を返す。）

メロディー これは怒鳴ったりして失礼した。バーと間違えてこちらの扉を叩いた百姓どもかと勘違いして・・・どうぞお坐り下さい。

（ギャツビー、前方に進み、中央テーブルの端にある椅子に坐る。テーブルの上にある汚い皿を見て眉を顰める。メロディーが言つ。）

メロディー これも失礼。たった今、宴会を終えたばかりのところ。この汚い皿はその名残りです。すぐ給仕を呼んで、そちらの注文をお聞きしましょう。

ギャツビー（やつと落着きを取り戻し始めて・・・そっけなく。）いや、何もいりません、私は。この宿屋の主人、名前はメロディーですが、その男と個人的に話があったってやって来た者です。（ギャツビー、少し躊躇うように。）あなたが

ひよっとして・・・その人でしようか。

メロディー（呼び捨てにされて硬化する。傲慢に。）メロディーなどという者ではない、私は。しかし、もしお捜しの人物が、コーニリアス・メロディー少佐・・・かつての陛下お付きの第七龍騎兵隊・・・スペインにおいてウエリントン卿のもとで働いたあのメロディー少佐をお捜しであるなら・・・それは私だ。

ギャツビー（そっけなく。）分りました。それならメロディー少佐です。

メロディー（ギャツビーの言い方が気に入らない。皮肉たっぷり、嘲るように。）それで、遙々（はるばる）（ここまでお越し戴きました御本人のお名前を伺いたいものですな。

（ギャツビーが答えようとしたその時、サラ、皿のことを思い出し、右手から登場。メロディー、ただの給仕であるかのように、これを無視する。ギャツビー、サラが片付けをしているのをじっと見つめる。サラ、その視線を感じ、敵意のある視線を返す。サラ、右手に、皿を持って退場。しかしすぐ盗み聞きするために、右手のホールに戻って来る。観客からそれが見える。サラが退場した瞬間、ギャツビーが口を開く。）

ギャツビー（気取った、軽いいい方で。）美人ですなあ。あなたの娘さんで？ よく似ておいでの所が・・・

メロディー（怒って。）飛んでもない！ この私が、自分の娘を給仕に使うような男だと思つたとは！ 失敬な。私に似ている？ あなたの目が節穴だということだ、それは。

（冷たく。）まだ御返事を戴いておりませんな 一体何者で、何のために私に会いに来たのか。

ギャツビー（メロディーに名刺を渡す。メロディーの態度に酷く苛々して・・・ぶつきら棒に。）私の名刺です。

メロディー（名刺を見て。）ニコラス・ギャツビー。（手が汚れるかのように投げるように置いて。）弁護士？ 厭な商売だ。私は嫌いだ、弁護士という仕事は。一体何の用があつてやって来られた。見当もつきませんな。もう何年も前、アイルランドで、この法の番人っていう奴が、私をいい力毛にして、盗つ人まがいの詐欺をやつてのけてくれましたよ。そちらの力毛になるほどのものは、もういくらも残っていない。一体どういう訳で・・・（突然思い当たる。じつとギャツビーを見つめ、ちよつと親しみのある調子に変えて。）フム・・・すると何ですか、ひよっとしてあのサイモン・ハーフォードの父親の代理人としてやつて来たという訳ですか？

ギャツビー（自分の職業を貶（けな）されてムツとしていゝ。微かに嘲りの調子を含んで。）なるほど、すると薄々は感づいておられたということですか。それなら事は簡単だ。余計な憶測の会話は省（はぶ）くことが出来る。そう、私はヘンリー・ハーフォードの代理人としてやつて来ました。

メロディー（すつかり相手の用件を誤解して。打ち解けた調子で。）いや、あなたの職業に余計な非難の言葉を浴びせしてしまつたようだ。これは謝る。私には偏見があるようだ。軍隊ではよく言っていましたからな。戦場でフランス軍に苦しめられるなんて、たいしたことはない。娑婆（しやば）で弁護士にやつつけられるのに較べれば、と。（メロディー、ギャツビーの、客席から向つて左の椅子に坐る。（テーブルの向こう側。）相手に注意を払わず、自慢して話し始める。）

この軍服について一言説明しておかなければ。今日はトラヴェラの戦いの記念日ですな、それで……

ギャツビー（そっけなく、途中で遮る。）なるほど。しかし、私は急いでおりまして。お許しを願って、すぐ本論に入りたいのですが。

メロディー（話の腰を折られてムツとするが、抑えて……冷たく。）その本論なるものもおよそ想像がついている。単刀直入に言えば、金の問題ですな？

ギャツビー（相手は持参金のつもりで言っているなどと、想像もつかない。殆ど軽蔑の調子で答える。）その通りです。ハーフォードの父親もその意見で。私も賛成しました。あなたも金による解決を一番望むだろうと。

メロディー（相手の言葉の調子に顔を顰める。しかし、相手の意味する所を全く取り違えているため、無理に礼儀正しくお辞儀をし、言う。）あのハーフォードの父親が、この私を紳士として扱ってくれていることを光栄に思っている。そして、正式にキチンとした形式でこの問題を処理しようという、その態度にも敬意を払いたい。

（ギャツビー、呆れてメロディーを見つめる。自分の来た意図を知っていて、このような事を言うとしたら、それは厚かましき以外の何ものでもないからである。メロディー、内緒話をするかのように、身を乗りだして言う。）

メロディー 正直に言うとな、このところちょっと手持ち不如意なのだ。勿論一時的なものだ。しかしとにかく、非常に苦しい。汲々としている。それは否定出来ない。しかし、そんなことは問題ではない。娘の幸福がそれにかかっている

となれば、私はどんな苦勞ものともするものではない。やぐざもどきのどんな金貸しがやって来て、どんな金額の請求書を出して来ようと、利子がどんなに高かろうと、それにサインする覚悟である。ところでミスター・ハーフォードほどの程度の金額を請求してくるつもりなんだ？ 納得の行く所で収まれば……

ギャツビー（全く何のことか分らない。そしてやつこのこと結論に達する。メロディーが自分を冗談の種にしようとしている、と。憤然として。）今の話は一体何でしょう。私はチンパンカンパンです。どうやら、私を馬鹿にしていらっしやるようですね！ これが所謂（いわゆる）、アイルランドの冗談というやつらしいですが……

メロディー（一瞬呆気にとられる。それから、凄みをきかせて。）言葉には気をつけた方がいいぞ、ギャツビー。お前が誰の代理人であろうと関係ない。その言葉を後悔するようにしてやる。冗談だといいか、私を馬鹿にして。それで無傷で帰れると思うな。未だかつてそんな奴は一匹もいないんだ！

（ギャツビー、心配そつに後ずさりする。メロディー、侮辱の言葉をつけ加える。）

メロディー 私がお前を馬鹿にしただと？ 馬鹿を馬鹿にして一体何になるんだ。

ギャツビー（この侮辱は無視して。何とか相手を宥めようと。）私はあなたと喧嘩をしたいとは思っていません。どうしてもよく分らないのですが……どうやら話が食い違っているような気がします。さっき「金で解決」という言葉が出

ましたが、これで何を仰りたかつたのか、教えて下さいませんか。

メロディー「金で解決」とは勿論、私の娘の持参金の話だ。

(ギヤツビーが全く呆気に取られているのでメロディー、鋭く言葉を続ける。)

メロディー お前がここへ来たのはそのためなんだろう。

ハーフォードの代理人として、彼の息子と私の娘との結婚を進めようと……

ギヤツビー 結婚？ 飛んでもない。結婚などと。金輪際！

メロディー (呆気に取られる。) 何だと？ じゃ、何のために来たんだ。

ギヤツビー (今度は自分が主導権を取っていると感じ、鋭く。) 次のことを伝えるためです。つまり、ミスター・ヘンリー・ハーフォードは、彼の息子とあなたの娘さんが、以後

決して、どんな関りも持つことに反対していると。たとえ今まで、その二人の間にどんな関係があったにしろ、です。

メロディー (脅迫するように、前に乗りだして。) 何だと！ その物言いは何だ。何か関係があったとでも言うのか！

ギヤツビー (再び後ずさりする。しかし彼は憶病者ではない。決然と自分の伝えるべき事柄を言う決心。) そんなことを言っているではありません。私の役目はただ、ミスター・

ハーフォードに代って、次の提案をしようというのです。あなたが最初、「金の問題ですな」と言われた時、私の方はそ

ちらもこの提案のことを考えての話だと勘違いしていたのです。提案とはつまり、ミスター・ハーフォードは、三千ドル

支払う用意がある。但し、その条件は、あなたとあなたの娘

さんが、私が作成した書類にサインする。その中味は、そこらはミスター・ハーフォードに対し、どのような種類のものであれ、いかなる要求もこれを放棄する。また、即刻一家を上げてこの地方から立ち去る。立ち退き場所として推薦出来るのは、西部……例えばオハイオ州……

メロディー (侮辱された怒りが胸にはち切れそうになり、出て来た言葉は擦(かす)れた吃り声。) そ、それが、ヘンリー・ハーフォードの、お、お有難い提案と言つんだな？

ギヤツビー (何か危ない雰囲気を感じるが、何とか合理的な説得を試みる。) 先ほど結婚という話を出されましたが、まさか本気で仰つた訳ではないでしょう。あちらの状況はそれとは大変な隔たりがあります。結婚など論外です。もしあなたがミスター・ハーフォードがどんな人物がお分りにな

れば、とてもそんな考えはお持ちにはなれないと……

メロディー (抑えつけられた怒りが爆発する。テーブルに拳を叩きつけて。) あの野郎をこの私がお分りになるだと？

馬鹿野郎！ 言われなくてもお分りになつてやる！ そしてこの私のことをお分りにならせてやる！ (パツと立上る。)

しかしその前に、まづお前だ。このヤンキーの蛆虫(うじむし)め！ お前を始末してやる！

(拳を後ろに引き、ギヤツビーの顔を殴ろうとする。しかしその時までにサラ、右手の扉から駆け出して、父親の腕を掴む。サラも父親に勝るとも劣らず、憤慨して、目には侮辱された誇りによる涙がある。)

サラ お父さん、止めて！ こんな人、ただの走り使いよ。こんな人のためにご自分の手を汚すなんて、お父さんの誇り

はどこに行ったの！

(サラが喋っている間に、バーに通じる扉が開き、ロツシユ、オダウドとクリーガンの三人、部屋にドヤドヤッと登場。ミツキーは扉の傍に立つ。ノラもサラの後ろから、右手の扉から登場。)

ロツシユ(酔った勢いで。喧嘩だ、喧嘩だ。やつちまえ、少佐！ ヤンキーの蛆虫なんか、捻り潰しちまえ！)

メロディー(自分を抑える。声が震える。)お前の言う通りだ、サラ。こんな腰巾着(こしぎんちゃく)には触るだけでこちらが穢(けが)れる。しかし無事に帰れると思っただけ大間違いだ。(鋭く。隊長が兵士に命令する時の口調で。)

おいロツシユ、それからオダウド、こいつを叩き出せ！(二人、鋭意、命令に従い、ギャツビーを椅子から引きだす。)

ギャツビー 放せ！ ならず者。その手を放すんだ！

メロディー(ギャツビーに。今では静かな脅すような口調で。)

いかさま金儲け野郎のお前の雇い主、ハーフォードの奴に伝言するんだ。近いうち、私から挨拶してやるとな！

(ロツシユとオダウドに。)

こいつを放り出せ。十字路のところまで蹴り出すんだ！

ロツシユ ハルー！

(ロツシユとオダウド、後ろの扉のところまでギャツビーを追い立てる。クリーガン、ニヤニヤ笑いながら、その先に立つて扉を開ける。)

ギャツビー(追い立てられ、蹠跟めきながら扉から出る。)

ならず者！ 手を放せ！ 放すんだ！

(メロディー、その姿を見送る。サラとノラ、メロディーを

見つめる。ノラは怖れと共に、サラは誇りをもった満足感で。)

クリーガン(扉のところ。外を見ながら、笑って。)

あ、あれを見たら胸がすくぞ、コン。ほら、尻を蹴つとばされて・・・這いつくばって・・・

メロディー(またムカムカと怒りが込み上げて来る。侮辱を思い出し、遣りきれなく、部屋をあちこち歩き出す。)

あいつじゃない。あいつを超越した奴だ、問題は。よし、話をつけてやる。腕づくで。ジャミー、お前も来るんだ。お前には証人になって貰う。あいつに謝らせるんだ。・・・いや、今夜にもこのこの場に連れて来て、娘に頭を下げさせてやる。今夜でなければ明日の朝にもだ！ 決闘だ！ 十歩離れて、或はハンカチを間に置く方式(訳註 ここ不明。)でもいい。あいつの身体を弾丸でぶち抜いてやる！ そうすれば思い知るんだ！

ノラ(哀れな泣き声になって。)

決闘だなんてコン、駄目よ。殺したり、殺されたり。それは駄目。

メロディー うるさい！ 台所へ入ってるんだ！ 行くんだ！ さあ！

(ノラ、従順に右手の扉に向かい、泣きながら扉に進む。)

サラ(母親に片手を回し、今では父親を心配そうに見つめている。)

お母さん、心配しないで。お父さんだって、あれが馬鹿なことだって分っているのよ。ただ口だけ。台所へ行つて、坐つて休むのよ。ね、お母さん。

メロディー(サラに向つて。再び怒つて。)

ただ口だけか？ この私が！ 口だけとは卑怯ということだ。このコン・メロディーが卑怯だと！ そんなことを言った奴は今まで一人

もない。初めて言った奴が自分の娘だとはな!

サラ(宥めるように。)卑怯だなんて言つてないわ。でも、お父さん、分るでしょう? ここはアイルランドじゃないの。それに、一昔とは違うのよ。決闘なんて、もうとっくの昔に終っているの。とにかくこのアメリカでは、ハーフォードはお父さんと戦つたりしないわ、あの人……

メロデー 戦いはない? 戦わないだと? 馬鹿な! それなら戦わせてみせる! 鞭でひっぱたいてやる。家から引きずり出して、通りでひっぱたいて見せ物にしてやる! あいつが、謝るか戦うか、さもなければ、あいつの顔に卑怯者の烙印を押してやる!

サラ(今では怖くなつて。)だけど、本人に会わしてくれやしないわ。下男達がお父さんを通さないわ! 警察を呼んで、お父さんを逮捕させるわ。「また酔っ払い大暴れ」って新聞に書かれるだけよ。(クリーガンに。)ジャミー、あなたから父に言つて、あなたはまだ正気……父もあなたの言うことなら聞くかもしれないわ。

クリーガン(大丈夫かな?) というようにメロデーを見て。(娘さんの言つ通りかもしれないよ、少佐。

メロデー お前の意見など、この私が聞くと思つていいのか!(嘲るように。)尤も、そう考えるのも無理はない。私と一緒に行くのが怖くなつたんだらう。卑怯者が!

クリーガン(傷ついて。)卑怯? 何が卑怯です。冗談じゃない、勿論私も行きますよ。

サラ ジャミー 何てことを! ああ、私、氣違いと話をしているの?(父親の腕を掴み、訴えるように。)お願い、

ねえお父さん、どうか止めて! 私、今までにお父さんに何かお願いしたことあるかしら? だから、これだけは聞いて!

私、お父さんの前に膝まづいてもいい! お父さんが喧嘩をしようつていっつのは、それは私のためでしょう? だから、私がそれに対して何か言う権利はある筈よ。さっきの弁護士が私達を侮辱した、だからあの人を充分懲らしめたじゃないの。乞食同然にここから放り出したじゃないの。それであるの。ハーフォードにはお返しをしたことになるでしょう? あのハーフォード自身をちゃんと侮辱したことになるのよ。だから、やるとしたらあちらよ。あちらがお父さんに挑戦して来るのが順序なのよ。だから、待つていてだけで充分な筈よ。ね、そうでしょう?

メロデー(腕を払い落して。怒つて。)何ていう理屈だ。まるでなつていない。これは私の名譽に関することなんだ!

サラ いいえ、お父さんの名譽じゃない。私の幸せにかつていることなの! 私はそれをお父さんの氣違いに邪魔されたくないの!(再び父親に泣いて聞かせようと。)ねえ、聞いて、お父さん。もしお父さんがここを放つて置いて下されば、私、あのハーフォードの父親をすっかり道化者の立場に置いて見せるわ。サイモンは結婚に関して父親の言うことなんか、これっぽつちも氣にかけていないんだから。私達の結婚に障害が起るとすれば、それはあの母親の方。母親だけはサイモンに影響力があるの。そしてあの母親は、何か私を断る口実はないかと捜している。そんな時にお父さんがあの家に、酔つた勢いで暴れ込んで、あの父親を「殺す」なんて怒鳴つて、スキヤンダルを惹き起こしてごらんさい、あの母

親に願つてもない口実を与えることになるわ。

メロディー（怒り狂つて。）あのヤンキーの糞つたれ女！
生意気な奴め！ あいつのことがあるから、私は尚更頭に
来ているんだ。あいつが結婚の障害？ あの父親は私を、そ
れにお前のことも、侮辱したんだぞ。それでもお前は、その
息子と結婚しようというのか。

サラ（挑むように。）そう、結婚しようと言うの！ 私は
サイモンを愛しています。ええ、結婚するわ、私！

メロディー（ならん！ お前に結婚などさせてたまるか！
ええい、あいつめ、病気でさえなければ、あいつを・・・
そうだ、明日はあいつをここから追い出してやる！ いいか
サラ、お前があいつに会うのはもう終だ。これ以上あいつに
は会つてはならん。もしもお前がこれに従わないと言つたら・・・
・（自制心がだんだんなくなつてきて。）そうだ、この私に
従わないなら・・・それも食根性で・・・あいつの妻にな
れば、あいつの親からの金をいくらでもせびれるなどと考え
るようなら・・・）

サラ（鋭く。）そんなの嘘よ！（それから静かな力強さを
もつて。）ええ、私お父さんに従わない。お父さんには限ら
ない。誰だつて。サイモンとの間を邪魔する者なら、誰だつ
て・・・）

メロディー（お前には誇りはいいのか！ それでも私の子
供か！（顔が怒りで痙攣する。）自墮落な百姓女！ 淫売！
お前だ、お前が最初に死ぬんだ！ 殺してやる！ 私の手
で！（サラに掴みかかるように進む。）

サラ（怖れで二歩退く。）お父さん！（それからしっか

りと立ち、挑むように父親と向きあう。）

クリーガン（二人に割つて入つて。）落ち着け、コン！
頼む。

（メロディーの気違いじみた怒り、去る。喘ぐように大きな
息をする。落ち着きを取り戻そうと、身体を引き締める。身
体が震える。クリーガン、とにかくメロディーをサラから引
き離さねばならないと、次の台詞を言う。）

クリーガン（メロディー少佐、ハーフォードの家に行くの
なら、今すぐでなければ。あの弁護士のやつ、先に帰ればきつ
とこつちのことを言い付けます。）

メロディー（引くの都合のよい言葉。すぐに乗つて、擦
（かす）れた声で。）そうだ、行こう。行かねば、ジャミー。
さあ、伍長、まづ勢いをつけるために一杯、それから出発だ。
馬に引かせる車はとなりの小屋だ。馬車で行こう。それから、
納屋で鞭を取つて来るのを忘れるな。（この言葉を言い終る
頃には、我に返つていて、抑え難い怒りも去つていく。冷た
い復讐の決意に満ちた顔。バーに通じる扉に進む。）

サラ（どうすることも出来ず。）お父さん！（絶望的に、
最後の、投げ槍な脅しの言葉。）私に、サイモンのところへ
行けつていうのね？・・・お父さんの提案をしるつていうの
ね？

（メロディーにこれが聞こえたかどうか、何の反応もなし。
メロディー、バーに退場。クリーガン、その後につき、扉を
閉める。サラ、目の前をじつと見つめる。打つ手がないなら、
それしかないのか、という思い詰めた表情。通りに通じる扉
が開き、オダウドとロツシュ、どやどやと入つて来る。大声

で笑う。)

ロツシユ ハルー!

オダウド 攻撃部隊、戻りました、少佐。敵は尻尾を巻いて逃げて行きおった。(メロディーがそこにいないのに気づき、サラに。)どこなんですか? 少佐は。

(サラ、何も、見も聞きもしない様子。)

ロツシユ (サラをチラと見て。)ほっとけ。少佐はきつとバーだ。行こう。(バーに進む。)

オダウド (ロツシユを追いながら。後ろを見て、サラに。)あのヤンキーの奴の格好! 見せたかったですよ。角に止めてあった馬車に乗るのに、馭者の手を借りてやつと・・・その馭者にもロツシユが一発食らわしたんです。ザマあ見ろつてんだ!

(オダウド、笑いながら、後ろ手で扉をバタンと閉め、退場。右手の扉が開き、ノラ、用心深く中を覗く。サラが一人なのを見て、入って来る。)

ノラ サラ、(サラに近づいて。)サラ、(サラの手を掴む。・・・心配そうに囁く。)どこ? お父さんは。

サラ (ぼんやりと。)私、止められなかった。

ノラ 言うだけ無駄って、お前に言うておくんだった。(奇妙な誇りをもって。)(コン・メロディーに決闘を思い留まらせる。・・・そんなこと、悪魔にだって出来はしない!(それから悲しそうに。)(また昔に逆戻り。あの心配と悲しみがまた・・・朝決闘があると聞いた時には、私は一晩中目を醒して、あの人のために祈った。・・・あの人に朝一言話しかけよう、別れの挨拶をさせよう、と思ったって、ただ馬

に跨がってサツと出て行くだけ。・・・(ノラ、恥づかしそうな優しい微笑を浮かべる。)(そんな時にも私、あの人を愛していた・・・)

サラ (辛そうに。母親に言うよりも、むしろ自分に言う。)(無駄だわ。自分の道を行かせればいいの・・・私だって、私の道があるわ。(緊張した声で。)(父親の狂気のせいで私の人生を台なしにするなんて、そんなこと決してさせない!あれだけ練って練り上げた計画、あれだけ夢に夢見た夢!私だって紳士の名譽にかけた大勝負をやってみせるわ!)

(ノラ、全くサラの言うことを聞いていない。昔の決闘の時の怖れ、それに現在の心配事にかまけている。サラ、少し躊躇する。それから母親の顔から目を逸らしたまま、母親の肩に触れる。)

サラ お母さん、私、上に上るわ。

ノラ (ビクツとする。それから呆れたように。)(上に行くつて・・・寝るの? まあ! お父さんがこんな時に、よく寝たり出来るわね!

サラ 寝るとは言わなかったわ。ただ横になって休む・・・(相変わらず、母親の顔は見ず。)(私、疲れたの、お母さん。

ノラ (それを聞いて急に娘のことを気使う気持になって、片手をサラの身体に回し。)(そう、疲れたわね、今日は。本当に酷い一日だったもの。いろんなことが・・・)(急に思い出して娘にすまない気持になり。)(ああ、忘れていた。ご免なさい、サラ。あなたにはサイモンとのがあったわ。(遣りきれない気持。)(ああ、何でことでしょう!)(急に愛の力を信じるノラ一流の奇妙な強い誇りをもって。)(構うも

んですか。もし二人に本当の愛があれば、決闘だろうと何だろつと、お前達二人を引き離せるものなんかある訳がない！それを一番よく知っているのは、この私よ！

サラ（衝動的に、母親にキスする。そして再び目を逸らして。）お母さんはまだ待っているのね？「ここの下で・・・」

ノラ ええ、上で、暗いところで横になっていたら、怖くてたまらない。隣からのあの騒ぎが聞こえている方が、却つて落ち着くわ。

サラ そつね、ここの方がいいわ、きつと。お休みなさい、お母さん。

ノラ お休み、サラ。
（サラ、右手から退場。後ろ手に扉を閉める。）

（幕）

第四幕

（場 同じ。ほぼ真夜中。中央テーブルに蝋燭一本あるのみ。あとは暗闇。バーからパッチ・ライリーのバグパイプがリール（スコットランドの軽快な踊りの曲）を弾いているのが聞こえ、大勢の人間の足踏みの音が聞こえて来る。）

（ノラ、中央テーブルの隅に坐っている。古いシヨールを、曲つた背中にかけている。胸のところに両腕を回し、寒そうに身体を抱いている。何時間も心配しながら待ち、また極度の疲れで頬（くづお）れる一歩手前。バーに通じる扉が開き、ノラ、ハツとする。入つて来たのはミッキー。ミッキー、後ろ手に扉を閉める。音楽と酔つた男達の声が一瞬大きくなり、また小さくなる。ミッキー、ウイスキーのデカンターとコッ

プを持つている。隣で飲んではいたが、酔つてはいない。）

ノラ（勢い込んで。）あの人のこと、分つた？

マロイ（テーブルにデカンターとコップを置いて。）いいえ、残念ながら。でも心配することはありませんよ。まだそんなに遅くはないです。

ノラ（疲れたように。）人のことだから簡単に言っけどね・

マロイ お上さんがどんな具合か見に来たんです。一杯どうかと思つて。（ノラ、首を振るのを見て。）ああ、飲まれないのは知っていますよ。でも、時々はおやりになることもね。今夜はどうしても必要ですよ。（ノラが再び首を振るのを見て、優しく、さらに勧める。）さあさあ。駄目ですよ、そんなに頑固に拒んでは。今日は私は医者ですよ。昔の厭な思い出とリュウマチを吹っ飛ばすために、どうしても一滴口に入れなきや。

ノラ そつね・・・じゃ、ちょっとだけ・・・

マロイ そつ、そう来なくつちゃ。（少しだけ注ぎ、ノラに渡す。）さあ、ぐつとやつて。

ノラ（ちよつと嚙る。それからコップをテーブルに置き、大儀そうに少し向こうへ押す。）何の味もしないわ。でも、思いついてくれて有難う。あなた優しいわ、ミッキー。

マロイ 元気が出てくるニユースがありますよ、お上さん。喧嘩の噂がバツと広まつちゃいましてね、クリーガンと旦那が帰つて来るのを待とうつて、わんさとやつて来たんです。

（熱が籠つた言い方。）この宿屋始まつて以来の大入りですよ、今日は。

ノラ 良かったわ、それは。

マロイ 連中は、コン・メロディーが嫌いなんです。アイランド人ですからね。だけど、それよりもっと嫌いなのがヤンキーです。ハーフォードの奴の息の根を止めて貰いたいですよ、コン・メロディーに。

ノラ（好戦的な気持で。）そう！ 息の根を止めてやるのよ！

マロイ（ニヤリと笑って。）その意気です。心配で何も考えられないってのは駄目ですよ。（回れ右して。）もう戻らなきゃ。オダウドにバーを頼んでおいたんですが、今までの間に、きつと三杯は自分でただ飲みをしていますよ。（躊躇いながら。）サラは上ったまま？

ノラ ええ。

マロイ（非難するように。）お母さんをこんなところでほったらかして、自分だけさっさと寝てしまっなんて、酷いですね。

ノラ（娘を庇って。堅い言い方で。）私が行かせたの。あの子があまり疲れて、それから心配のしすぎで、倒れそうだったからよ。眠り込んでいるでしょう、今は。サラの悪口を言ったら承知しないわよ！

マロイ（すぐ言い返そうとする。）（だけどサラは・・・（言い止める。愛情を込めてノラを見て。）ああ、言い返したって無駄ですね。すぐにやられてしまう。サラはいいお母さんを持っていますよ。私みたいな男にだって、本気で喧嘩をして守ってやるうっていうんですからね。こんなお母さんだったら、私は奥さんにしたいくらいですよ。

ノラ（意気消沈していた顔に、光が射したように喜びの表情が浮かぶ。）（あらあら、そんなお世辞、若い子達のためにとっておかなきや駄目じゃない！

マロイ 若い子なんて糞食らえですよ。おさんは連中の百倍の値打がありますからね。

ノラ（頭をぐいと上へ上げて。）さあ、さっさと仕事よ！

（ミッキー、ノラに元気を出させて満足し、バーに退場。後ろ手に扉を閉める。ミッキーがいなくなるとノラ、再び心配そうに坐り込む。）

（右手からサラ、静かに登場。夜着の上に色褪せた上掛けをかけている。足は素足にスリッパ。髪は両肩から落ち、腰の辺りまで垂れている。大きな変化あり。顔から、苦々しい挑むような表情がすっかり消えている。優しく落ち付いた、そして同時に、幸せでうきうきする表情。今までにない美しさ。65
サラ、立ち止まって母親を見る。突然恥づかしくなり、どうしたものか不安になる。ここまで来るには来たが、母親に見つかる前に引き返そうかと思う。しかしノラ、サラのいるのに気づき、見上げる。）

ノラ（元気なく。）（ああサラ、お前なのね。（それから感謝するように。）（有難いわ。やっとお前、降りて来てくれたのね。私、心配で・・・飲んだくれが歌ったり踊ったり・・・こんなところでたった一人で待っているなんて・・・他には行くところもないし・・・

（サラ、ノラに近づくと、ノラ、泣き出す。目から涙が溢れる。）

ノラ 残酷だわ！ あの人には心なんかかないの。人を思いやる心なんか、これっぽっちもないの！

(ノラ、噁り泣き始める。サラ、ノラを抱いて、頬を優しくキスする。しかし口は開かない。まるで声を出すと、自分のしたことが相手に分ってしまうのではないかと怖れているかのよう。ノラ、噁り泣きを止める。ノラの気持、悲しみから恨みに変わる。サラが口を開いたかのよう。)

ノラ「心配しないで」、なんて言わないで。そんなことを言ったらお前、ミッキーと同じよ。あのハーフォードのヤンキー、謝らなかつたんだわ。そうでなければ、とつくの昔にお父さん、帰っている筈だもの。すると決闘。それは確か。町のホテルに泊つたんだわ。決闘の場所から近いところに。ああ、眠っていてくれればいいけど。でもきつとまた飲んで。夜明けになって、飲み過ぎのため腕が鈍っていて、あの人ひよつとしたら・・・(それから挑むように。自分を落ちつかせるように。) ああ、私つて馬鹿。あの人、何を飲んだつて、頭も目はつきりしているのに。(サラを少し押し退けるようにして・・・苛々と我儘を出して。) お前、もうあつちに行つて。自分のことばかり考えてちつとも親身になつてくれやしない。私一人の方がいいわ。(慌ててサラの手を掴んで。) いいえ、変なことを言つてご免なさい。さあ、坐つて。

(サラ、テーブルの向こう側、ノラの左に坐る。サラ、母親の手を軽く叩く。が何も言わない。表情は非常に幸せそう。ノラの言葉は聞こえてはいるが、まるで何の意味もないというよう。ノラ、再び心配そうに続ける。)

ノラ でも、ホテルにいるのなら、どうしてピストルを取りにジャミー・クリーガンを寄越さないのかしら。決闘用の

ピストルは家(うち)にあるものしか使つたことがないのに。

(今度はメロディーに、恨みがましく。) ピストルのためじゃなくつても、私に一言伝えるためにジャミーでも誰でも使ひに出すべきよ。私がどんなに心配しているかぐらい、あの人がよく知つているんだもの。(辛そうに。) あーあ、私つて何て馬鹿なことを。あの人、自分のこと、自分の誇りのこと以外に何を心配したことがあるつていうの。私のことなんか、これつばかりも心配したことなんか無い。御立派なイギリス紳士・・・赤いお仕着せなんか着ちやつて。誇り、誇り、誇り・・・何よ、誇りなんか。誇りなんてただの嘘じゃない。

あの人の父親、ネッド・メロディーは、もぐりの居酒屋の主(あるじ)じゃない。強請(ゆすり)、たかり、じゃない。その血を引いて何が誇りよ。(自分の言つたことに驚く。まるで神を冒瀆する言葉を言つたかのように。)

いいえ、こんなことを言つては駄目。あの人が聞いたらどんなに悲しむか。

あの人の夢を笑わないのは、この世で私だけだつて、あの人はよく知つているんだから。(再び夫に対して反抗的な気分になつて。) だけどあんな人のために夜つびて心配するなんでもう厭。私、決闘のことで心配しているだけじゃない。これが神様の罰ではないかと思つているの。正式な結婚もせず、あの人との生活に入つたこと、それに神父さんに、懺悔をしてはいけなと言われて、そのまま約束してしまつたこと。ああ、その罰よ、これは。(間。疲れたように。)

リユウマチを治すのなら医者に行つてお前は言つわ。だけどリユウマチの痛みなんて、ただの身体の痛み。そんなのいくらあつたつて私は平気。本当に痛いのは、心の痛み、罪の意識。医

者に行つてそれが治るつていうの？ いいえ、治せるのは神様のお使い、神父様だけ。（再び反抗的になつて。）そう、コンにはいい気味なの。もし今、私がこの機会を利用して、あの人の約束を破つて、神父様を叩き起して、懺悔を聞いて貰つたら。そして罪を浄（きよ）めて三人を地獄行きから救えば。（心からそうしたい気持で。）ああ、その勇気が私にあつたら！（ノラ、急に椅子から立上る。・・・勇敢に、挑むように。）私、行く！ 行くわよサラ、神父様のところへ！（通りに通じる扉へ進む。・・・半分まで行つて立ち止まる。）

サラ（奇妙な、優しい、面白いような微笑みを唇に浮べて・・・擲（からか）うように。）どうしたのお母さん、行かないの？

ノラ（挑むように。）行くわ。（もつ三歩扉の方へ進む。・・・再び立ち止まる。・・・打ちのめされたように呟く。）アー、やっぱり駄目。出来るつていう顔をしたつて無駄ね。

サラ（やはり、擲（からか）うように。）そう、無駄よ、お母さん。私、とつくに分つていた。

ノラ（それを聞いていないかのように。ゆっくりと戻りながら。）でも、もしやつたら、あの人の、私に裏切られたつて思つて。私が約束を破つたつて。あの人の愛を私が捨てたんだつて。でもあの人の、たとえそんなことで私に裏切られたつて、ちゃんと分つている。あの人にはこの私の愛しかないんだ、慰めてくれる者は世界中に私しかないんだつてことを。

（それから勢いよく、頭をぐつと持ち上げて。）でも私の、あの人の愛はちつともあの人のためじゃない。それは私の

ため。私の誇りなの！ あの人のつらいつだつて、誇りはいつでも自分の独り占（じ）めのようなことを言つてるけど、飛んでもない。私だつてあの人の同じように誇りがあるの。（元の椅子に坐る。）

サラ（柔らかく。）自分は愛しているという、女性がもつ誇りね。私もついさつきそれを知つたわ、お母さん。

ノラ（サラが口をきいたのはこれが初めてであるかのよう、そして今の台詞も、言つた内容はまるで聞いていず、苛々と。）そう、やつとお前、口がきけるようになったの。やれやれね。そこに彫刻のようにじつと黙つて坐つて、私にだけ話させて。（サラを見る。まるで今初めてその顔に気づいたように・・・恨みがましく。）あらあら、それ、何て顔？ 楽しそうで、幸せそうで、まるで心配事なんか無いつていう顔。お父さんは今可哀相に・・・

サラ（夢見るような顔。面白がつている。まるでこのことが自分には全く何の関係もないという表情。）お母さんにこれを言つても、どうせ無駄と思つけど、決闘なんかある訳がないの。そんなことを考えるだけでもどうかしているの。お母さんはまだアイルランドで暮しているようなもの。だから私の言葉は信じられないかもしれない。でもサイモンがそう言つたと言えば聞いてくれるわね？ あの人の話だと、あの人のお父さんは、決闘なんて考えただけでも憤慨で身体が強張つてくるぐらいだつて。法律違反なんですからね、決闘は。

ノラ（軽蔑するように。）法律が何！ その人卑怯者よ。（安心して。）そう、あの人がそう言つのなら、そうかもしれないわね。

サラ 勿論そうなのよ。

ノラ じゃ、あの父親が、お父さんに謝って、お父さんはそれで満足して・・・それで終ね？

サラ（呆れて。）まあ、お母さんったらー！（それから急に。）ええ、そう。もつずつと前にすすかり片がついているわ、きつと。

ノラ（何事もなくあれ、という希望をもって。）じゃあ、あの二人がまた帰って来ない理由は、それを祝って二人で飲んでいるからだと言つたのね？

サラ そう。あの二人は飲むの。何があつたつて。（夢見るように続けて。）でもそんなの、もつずつでもいいの。

ノラ（サラを見つめる。不思議そうに。）それ、変な言い方ね、サラ。お前、寝ぼけているの？ それとも半分夢の中？

サラ ええ、夢の中よ、お母さん。それも半分じゃないの、私の全身全霊が夢の中。それに、夢の中で現実なの、これは。私、一生涯この夢の中にいて、決して醒めないの。

ノラ 何なの、それ？ 本当に、一体どうしたの？

サラ（衝動的に立上り、母親の椅子の背のところに来て、後ろから母親の膝の上に両手をすべらせ、次に後ろからその身体を抱く。）喜びよ、喜びが私を虜（とりこ）にしているの。私、幸せ。サイモンはもつ、私のもの。誰も私からは奪って行けない。それが私には分っているの。

ノラ（最初の反応は単純な喜び。）良かったわ、それは。決闘のせいであなた方二人が裂かれてしまふんじゃないかって、それが私には悲しかったの。（挑むように。）名譽だろつと何だろうと、それで子供達の生活が、子供達の幸せが潰

されるなんて、そんな馬鹿な話はないのよ！

サラ あの人のお母さんが、私とあの人を引き離す力があるかもしれない・・・そんなことを考えたの、馬鹿だったわ。そんなこと、ありえないの。どんなことがあつても。

ノラ お前、あの人と話したの？

サラ ええ。今まであの人と一緒にいたの。

ノラ さつき上がつて行って、それから今までずつと？

サラ ええ、上つて行って、中に入るまでは時間がかつたけど・・・勇気が要（い）つたの。

ノラ（非難するように。）こんな時間に！・・・真夜中ですよ！

サラ（擲（から）か）うように。）私、あの子の看護婦さんよ。権利があるわ。

ノラ そんなの、理由にはなりません！

サラ（表情が堅くなつて。）理由？ これぐらいしつかりした理由があるかしら。私の幸せ・・・一生に一度のこの機会をフイにしたら、それが永久に逃げて行くつていうこの時、私が何もしていない方がいいつていうの？ お母さん。私が、愛と幸せを掴むのに反対だつていうの？ お母さんは。

ノラ（柔らいで。）飛んでもない。お前の幸せのためなら私・・・（それから再び非難するように。）お前、そんな格好で行つたの？ 寝間着と部屋着だけで・・・

サラ（陽気に。）ええそう。・・・サイモンは気に入つてたわ。お母さんは気に入らなくても。ただ、入つて行つた時、あの人、真つ赤になつたけど。

ノラ 当たり前でしょう！ 恥づかしいつたらありはしな

い!

サラ あの人、詩の本を読もうと思っていたの。でもちつとも進まなかった。いつ私が「お休み！」の挨拶に来るか。いや、ひよつとすると、来ないかもしれない。それが心配になって。(サラ、優しく笑う。)あの人のお母さんが帰って行った後、私、全然あの人のお部屋に行かなかった。それが本当に良かったの。あの人私を、待って、待って。それでも来ないものだから、今朝私にキスしたのを怒っているんだとすっかり思い込んで、死ぬほど心配していたの。だから、私を見た時のあの人喜びようと言ったら・・・

ノラ 足は素足にスリッパ。寝間着に部屋着の裸同然の格好・・・お前、羞(は)じらいはどこに行ったの。

サラ(陽気に。擲うように。)悔しいけど、羞じらいがあったの。もう、出来るだけかなくなり捨てようと思っていたのに。私、あの人と同じように真っ赤になった。(サラ、笑う。)私ったら、何てお馬鹿さん。町の女顔負けの厚かましきで、あの人を誘惑してやるんだって、堅く決心して部屋に入ったのに・・・だって、あの方は名誉を重んじる人。私との結婚は確実なの、もし・・・(サラ、笑う。)それで私のやったことって言えば、ただ突っ立って、息が止って、顔を赤くしていただけ。

ノラ まあ。(非難するように。)赤くなるだけの羞じらいがあつて良かったわ。

サラ 最初に口をきいたのはサイモン。一旦口がほぐれると、後は次から次。思っていたことが進(ほとばし)り出たわ。私を待っていたこと、それから、もう来ないかもしれない

いという怖れ・・・それがすっかりあの人のお臆病を取り去って、言ったの。愛している、結婚しよう。出来る限り早く。後は何が起ったか分らなかった。気がついたら、私はあの人のお腕の中。私の腕はあの人に、そして唇と唇が合って、後は天国だったわ。

ノラ(サラの輝いている幸せな顔に感動して。)神様の祝福がお前達二人に!

サラ それから私、泣き出したの。「私、あなたのお母さんが怖い。私のことを嫌いなんだもの。私の父があんな決闘騒ぎを起して、それを口実にきつとあなたのお母さんは、あなたとの間を裂くことなされるわ。」そうしたらサイモンが言ったわ。「二人を裂くことなんか誰にも出来ない。母だつて何もしない。母がここへ来たのは、僕が君を愛しているのかどうか、それを確かめたかったのだ。それが分ると母は言った。69後は僕の好きなように自由にやれ。ただ、一年だけ待つことを勧める、と。でも僕に約束はさせなかった。」それからサイモンはこうも言ったわ。「決闘騒ぎをうちの母が本気に取るなんて、君、どうかしているよ。母は面白がるくらいさ。父が買収工作で、僕ら二人を引き離すことが楽に出来るって信じこんでいた。それが飛んでもない計算違いで、却って警察を呼ばなきゃ、自分も危ないなんて事態になるかもしれないんだから」って。

ノラ(警察という言葉で、また現実に戻り。)警察を呼ぶ? まあ! 卑怯者!

サラ(ノラの言葉に構わず、続ける。)警察のことでは、サイモンは父親のことを随分怒っていたわ。うちの父親に対

してもよ。私を殺すなんて脅したから。でも私達、このことは沢山は話さなかった。もっと沢山話して楽しいことがあったから。(サラ、優しく微笑む。)

ノラ(激しく。)コン・メロディーに警察を? 警察がどんな目に合うか、見ていて御覧なさい! あんな奴等にコンの邪魔が出来るものか!

サラ(全くノラの言う事を聞いていない様子。)サイモンは言つたわ。もし私があの人を愛していなくて、結婚なんて考えてもいなかったら、どうしようって。それが本当に怖かったんだって。私は綺麗で、僕はちっとも美男子じゃないからって。だから私、あの人にキスして、あなた、世界中で一番美男子よって言つたの。だって、本当なもの。そうしたら、言つたわ。僕は君に値しない。君に上げられるものは何もない。それに僕は詩人になるうとしてなれなかった。人生の落伍者なんだって。私は言つたの。あなたは立派な詩人よ。そして、これからもずっと詩人。詩人だからこそ、私あなたが好きなのって。

ノラ 警察! あいつらにコン・メロディーは指一本触れさせるものか! ただの一撃であいつらを叩きのめしてしまふんだから、コンは!

サラ それからサイモンは言つたわ、僕は貧乏なんだ。父親からは一銭も受け取らないつもりだ。たとえ相手がやると言つても、って。私は言つたの。そんなの構わない。たとえ掘立て小屋に住んだって、いえ、屋根のない青空の下で、野原の草の上で寝たって、働いて手が骨になつたって、ええ、餓えだつてちっとも怖くない。あなたと一緒になら私、天国。

愛の喜びの歌を歌うわ。(母親を見上げる。)ねえお母さん、私これ、本気で言っているの。心の底から。一言一言。全部本気で言っているのよ!

ノラ(警察のことで頭がいっぱい。上の空で答える。)...機械的にサラの髪の毛を叩いて。)そう、本気。あなた、本気で言ってるの。

サラ でもあの人、私にキスして言つたわ。それほど実はひどくはないんだ。大学時代の古い友人から、紡績工場をやらなかつたって勧められていて、それを考慮中なんだって。その人が親から受け継いだもので、共同経営者になつて欲しい。ただ、工場の切り盛りは全部サイモンにやつて欲しいって。小さな工場で、だからこそサイモンは興味があるの。あの人言つたわ。君は信じられないかもしれないけど、僕は、あまり嬉しくないんだが、商売の才能があるんだ。父親の仕事を手伝っている時、それが分つたんだって。この工場で、二人がゆつたり暮せる程度には、楽に稼げる。自分の本を書く時間も作れる。慾にまかせて生活に必要以上のものを稼ぐなんていうのは、奴隷状態だ。それを避けるだけの智慧は残しておかなければ。そしてそれも、可能だと思つ。実際この強欲の奴隷というのが、人間に与えられた呪いでなくて何だ、って。それから言つたわ、君はこれが僕の智慧じゃなくて、僕の弱さだと思つかもしれない。君、足ることを知つて幸せでいられる? って訊くの。だから私、あの人にキスして言つたわ。私に必要なのはあなたの愛だけ。あなたの幸せがみんな私の幸せ。あなたが達成したいことが全部私の達成したいことなの、って。(サラ、再び母親を見上げて得意そうに。)

これがまたみんな本気なのよ、お母さん。心の底から！

ノラ（前と同様にサラの髪を叩いて。）分ってるわよ、サラ。

サラ 私って馬鹿だったわ。あの下らない愛・・・金持ちになって、宏大な土地を持って、馭者に下男つきの馬車乗り回す尊大なレディーになってやる・・・なんて！（自分を笑う。）一旦愛してしまったら、そんなこと何の意味もないんだってこと、どうして分らなかつたのかしら。お母さんの言う通りだったわ。私、愛のこと、何も知らなかつた。何もかも全部を与えて、それで得られる女性の誇り・・・自分の愛そのものにある誇り、それを知らなかつた。私は何も知らない癖に、ただ息巻いている馬鹿な娘っ子だったの。でも私はもう女よ、お母さん。私にはそれが分るの。

ノラ（前と同様に、機械的に。）そうね、分ってるのね、お前には。（自分自身に。プリプリして呟く。）警察なんか来てみる！ あの人、鞭でひっぱたいて元の犬小屋へ追い返すわよ！ 犬！ 嫌らしい犬め！

サラ（自分の幸福に浸って。）それから私達、灯（あかり）を消したわ。そして話した。いつ結婚しようか。これからの人生、どんなに幸せだろう。子供を生んで・・・それからあの人、暗闇の中で気後（おく）れがなくなってきた、言ったわ。「君に見せたね？ あの詩に書いた、思い切ったいりいな事、あれはみんな本気なんだ」って。私も言った。「どんなに思い切った事だって、あなたの考えることですもの。私、その覚悟があるわ。あなたを愛しているんですもの。あなたが私のものって安心出来るためだったら私、どんなこと

でもするわ」って。その間私達二人、ずっとキス、キス。ああ、あの幸せ！ それから・・・

ノラ（以前と同様に。）ええ、分るわよ。

サラ（下を向いたまま。悪いことをしたように。）分る・・・の？ お母さん。

ノラ（急に夫の心配事から目が醒めて。驚いて、心配になり。）何のこと？ 何の話？ さあ、私を見て！（サラの頭を上へ上げ、その顔を見下ろす。呟くように。）そう・・・お前・・・身を任せたのね。悪い子！ 悪い、悪い子！

サラ（挑むように。誇りをもって。）身を任せるだなんて！ そんなこと、何も無いわ！ 愛よ、愛が二人を結びつけたのよ！

ノラ（どうしようもなく。もう既に諦めている。しかし非難するのが自分の義務であると感じて。）お前、そんなことを自慢して、恥づかしくないの？

サラ いいえ、あのことに恥など、どこにもないわ！（誇りをもって。）恥ですって？ そんなもの私にないこと、お母さんが一番よく知っているでしょう？ お母さんよ、それを話してくれたのは！ お母さんは恥ぢたって言うの？

ノラ（弱々しく。）ええ、私、恥づかしくって死にそうだった。

サラ そんなことはない！ 誇りを持った筈！ 私と同じに！

ノラ でもあれは死に値する罪なのよ。神様があなたを罰するわ。

サラ やって御覧なさい、だわ。サイモンを一回キスする

度に、地獄に千年いなくちゃいけないって、神様が言ったとしても、私ちつとも構わない。唇が変になるまであの人にキスするわ。

ノラ（怖れて。）駄目、そんなことを言っちゃ。神様が聞いていらっしやるかもしれない。

サラ お母さんだって同じことを言った筈よ！

ノラ（ぼんやりと。）もう黙って！ そんな罪深いことを言って私を苦しめないで。私、答えたくない！

サラ（ノラを抱いて。）分ったわ。ご免なさい、お母さん。

（間・・・微笑んで。）罪を感じていたのはサイモンの方。あの人、悪いことをしたと言って、もし身体の自由が効けば、今すぐ二人でベッドを出て、夜中でもいい、どこかで誰か結婚の許可を与えられる人を捜して、叩き起こすのに、って言うの。でも私の方はただもう愛で溺れたようになって、結婚なんてこと、考えもしなかったわ。あの時に私がいたところ、それはただ、愛だけがある場所。私の心も、そして勿論、私の身体も、その愛に捧げられていて、それを誇りに思っていた。（言い止む。それから優しく、擲（からか）うように。）そう、私、お母さんがこの世の中で一番素敵な女の人だっということは知っていた。でも、一番賢い人だっというのには、思ってもいなかったわ。お母さんは今朝言ったわね、自分の愛している男の人だったら、その人がどんな馬鹿なことをしてもやっぱり愛するんだって。だって、自分の心の中に、あの人を愛する力があるって気がついたのは、その男の人のお陰なんだもの。だから、本当はサイモンだって関係ないの。だって、問題なのは自分自身の愛の力なんだもの。私の、あ

の人を愛する、その力なんだもの。そしてその愛が続くように、どんなことだっしてするの、誇りをもって。（サラ、自分を擲（からか）うような幸せな笑いを浮べる。）だからお母さん、私達、愛の奴隷なの。男の奴隷じゃないの。俺達は愛されているなんて、男達が自慢したり、いい気になっていたりしたら、とんだ恥っかきね。だって、私達の愛の秘密は違ふところにあるんだもの。（サラ、笑う。それから急に「すまない」という顔になる。）私って、馬鹿なことを言っている。サイモンに聞こえなくて良かったわ。（言い止む。ノラは他のことが気にかかって、聞いていない。サラ、続ける。）ああ、私やっとなつたわ・・・ほんの少しだけ・・・あんなお父さんなのに、どうしてお母さんが愛せて、誇りに思えるか。

ノラ（メロデーの話が出て来て、物思いから醒める。）黙って！（惨めに。）ああ、どうしたのかしらサラ、どうしてあの人、帰らないの。何が起ったのかしら。

サラ（苛々と立上って。）分り切っているじゃないの、お母さん。（苦々しく。）どうせ飛んでもない恥晒しなことをやっているのよ。サイモンのお母さんにはいい笑いの種よ。お父さんに対してまだむしゃくしゃしていたとしたら、今頃はもうすっかり腹の虫は収まっているわ。私、もうそんなことどうでもいい。いい気味よ。私、一生懸命になって止めたわ。膝をついてもいいって言ったわ。それで、「百姓女、淫売！」って言われたんだから。私の願いはたった一つ。お父さんがどんな目に逢ったっていい。そのお陰で目が醒めてくれさえすれば。あの嘘から、あの気遣いじみた夢から。そし

て、あの鏡を見た時、自分の本当の姿をそこに覚えてくれさえすれば。(嘲るように。)でも、そんなことってありつこないわ。どうせ二人でハーフォードをどんなに華やかにやつつけて来たか、自慢たらたら、ぐでんぐでんに酔っ払って帰って来るのよ。本当のことはどうであろう。

(しかしノラは聞いていない。裏に通じる扉の鍵がカチッと鳴ったのを聞いたからである。)

ノラ(興奮して。)ほら、サラ!

(扉がゆっくりと開き、ジャミー・クリーガンが用心深く頭を出し、部屋の様子を覗く。ジャミーの顔は散々(さんざん)。)

鼻は膨れ上がり、唇は切れて膨れ、片方の目は青痣(あざ)になって、殆ど潰れている。ノラの最初の反応は安堵の叫び声。)

ノラ ああ、良かった。あなた、帰って来たのね、ジャミー。

クリーガン(唇に指をあてて。注意するように。)シッ!

ノラ(ギクリとして。)ジャミー! あの人はどこなの。

クリーガン(鋭く。)シッ! 今から言います。(囁き声

で。)馬車に乗っけてあるんです。まづ、ここに誰もいないのを確かめようとして、バーの扉をロックして、サラ。ここに連れて来る。

(サラ、バーへ通じる扉をロックする。サラ、軽蔑に満ちた表情。クリーガン、それを見て、通りに通じる扉を半分開いたままにして、退場。)

ノラ お前、あのジャミーの顔を見た? 酷い喧嘩だったんだわ。ああ、私怖い、サラ。

サラ 何が怖いって言うの。さっき私が言った通りじゃな

い。馬鹿な騒ぎよ。きつとお父さん、ぐでんぐでんよ。

(クリーガン、裏に通じる扉から登場。メロディーを少し支えるようにして導き入れる。メロディーはつつかえつつかえ、棒のように歩く。酔っ払いの歩き方ではない。急なシヨック、或は発作のため呆然となり、身体の統一性を失ったような具合。真紅の軍服は泥だらけ。歪んでいる。顔色は蒼く、幽霊のよう。左の頬骨に青痣(あざ)。唇が切れて血まみれ。額に生々しい傷。そこから血が顎まで落ちていく。両手は膨れて、拳はクリーガンもそうだが、皮が剥けている。目は虚ろで、生命のないもののように。娘と妻を見るが、それと分った様子は無い。)

ノラ(駆けよる。片手をメロディーに回す。)コン・・・あなた! 怪我は酷いの?

(メロディー、ノラを見ず、押しやる。呆然としたまま進み、中央テーブルの椅子に坐る。ノラ、その後を追う。悲しみの言葉が出る。)

ノラ コン、私分らないの? まあ、あの頭の傷!

サラ 静かにして、お母さん。バーにいる人達に分つていいの? お父さんがこんな風なのが。(メロディーを一瞥。軽蔑の表情。)

クリーガン そうなんだ、サラ。まづこの人をちゃんとさせなきゃ駄目だ。こんなにぶん殴られた姿を、あの連中に見せたとなりや、一生恨まれてしまつ。

(間。三人、メロディーを見つめる。メロディー、視力が無い人間のように、テーブルを見つめている。ノラ、テーブルの後ろ、メロディーのすぐ右に立つ。サラがその右に、クリー

ガンはサラの右に立つ。(

サラ 酔っ払っているんでしょう？ クリーガン。それだけのことね？

クリーガン(鋭く。)違う。ここを出てから一滴も飲んでない。頭をぶん殴られた、そのせいじゃないか。一杯キユツとやれば戻る筈なんだが。ただ、飲もうとしない。全く。

サラ(父親に、不思議そうな目を向ける。)飲もうとしない？

ノラ(デカンターとコップをクリーガンに渡す。)さあ、やってみて頂戴。

クリーガン(なみなみと注ぎ、それをメロディーに差し出す。機嫌を取るように。)さあ、飲んで下さい、少佐。すぐよくなりますから！

(メロディー、気がついていている様子なし。表情は相変わらず虚ろで、死んだものよう。クリーガン、不思議そうに頭をか

く。)
クリーガン(こつなんだ。帰り道ずっと試してみたが、ちつとも飲もうとしない。(それから苛々と。)もしこの人が飲まないなら、お許しを願って、私が戴く。私の方はカラカラなんだ。(ぐつと飲み干す。もう一杯注ぐ。ノラとサラに。)いやいや、全くひどい乱闘だった。

サラ(静かに。軽蔑を含んで。しかし相変わらず父親の方を不思議そうな目付きで見ながら。)その姿では、さぞかしね。

クリーガン(憤然として。)(この傷を見て、よくそれだけ平然と物と言えるもんだ！)(二杯目を飲み干す。自慢そうに。)フン、こつちも傷を受けているがな、あつちはもつとだぞ。

それに、その中には警察もいるんだ。

ノラ 警察？ 何て汚い奴！

サラ 黙って、お母さん。それで、何があったの？

クリーガン 何があつたなんてもんじゃない。全く、あんな大立ち回りは生まれて初めてだ。ハーフォードの家を見けるのは造作もなかった。大邸宅だ。裏には壁で張り巡らされた大きな庭がある。コンと俺は正面玄関から入って行つた。

お仕着せを着た使用人が、後ろにもう二人従えて出て来た。

図体(ずうたい)のでかい黒人がそのうちの一人だ。あの弁護士豚野郎、ハーフォードの奴に御注進申し上げていたんだ。コンが紳士的に口を切つた。「御主人にお取次願いたい。

こちらはかつての第七龍騎兵隊少佐、コーニアス・メロディーだ。一言御主人にお話がある」と。使用人は嘲るように笑つ

て言つた。「御主人はお前さんには会わないね。」コンがムツ

となるのが分つた。しかしコンは怒りを抑えて丁寧に続けた。

「じゃ、その御主人に言うんだ、つべこべ言わずに会うのが

一番だ。さもなきや、どの道、こつちから押し掛けて行くだ

けのことだから、とな。」「ほほう、押し掛ける気か」と使

用人は言つた。「御主人に言われているんだ。酔つ払いのア

ホどもにかかづらわっている暇などない。追い返せとな。そ

れに警察にも知らせる。変なことをすれば、お前らは逮

捕だ。」それから扉を閉めながら、「言つとくがなお前達、

だいたいこの玄関つて所は、お前らの来る入口じゃない。お

前なら、台所の裏口から入つて来るものだ。」

ノラ(怒つて。)まあ、何て言い方！

サラ(我にもあらず、怒りが込み上げて来る。メロディー

を見て、怒って言う。(使用人にお父さん、そんなこと言わせておいたの？(それから慌てて。)でもいい気味よ！そんなことだろうと思った。ちゃんと言っておいたでしょう！)

クリーガン 言わせておいた？ 黙るんだ、サラ！ こっちの話を聞け！ 聞けば分るんだ！ 使用人はそう言って、さっと扉を閉めようとした。だがコンの方が早かった。押して、閉めようとする所を使用人ごと扉を押し返した。そしてホールに飛び込んだ。気違いのように喚いて。それからその使用人の憎たらしい口を鞭で思いつきりひっぱっていた。奴は豚のようにキヤツと言ったさ。

ノラ(夢中で。)コン！ あなた、よくやったわ！

サラ(母親のその言葉を恥ぢて。)お母さん！ 止めて！(メモディーに憤慨して。)全く決闘屋もいいザマね。馭者や執事を相手に大乱闘！

(しかしメモディー、テーブルをじつと見つめているだけ。サラが見えている様子もなければ、サラだと分っている様子もない。)

クリーガン(怒って。また一杯注いで。)黙れと言ったら黙るんだ、サラ。それに、(メモディーを指して。)そっちにうるさく言うのは止めるんだ。どうせあんな風なんだ。言うだけ無駄だ。相手が誰か、何を言ってるか、聞こえはしない。それからこの喧嘩に、聞いたような口は出せない筈だぞ、サラ。あんたがその原因なんだからな。

サラ(怒って。)それは嘘！ 私はこうなるのを止(と)めようとしたの。分ってる筈よ。

クリーガン(ぐつと飲んで。サラの言葉を無視して、ノラ

の方を向き、熱を込めて。)いいか、最後まで聞いてくれ、ノラ！(戦いの真つただ中に戻る。)コンが屋敷に入り、俺も飛び込んだ。黒ん坊の奴が殴りかかった。俺はクラツとなった。そのまま黒ん坊にやられる所を、コンが振り返りざま、そいつの黒い脳天を鞭でぶん殴った。黒ん坊はへたり込んだ。三番目の男がその間にコンを殴った。俺はそいつの腹を蹴り上げた。そいつは、腹をおさえて床に転がった。黒ん坊がその間に起き上がって、俺に掴みかかった。が、コンが来てまた一発食らわせた。ザマを見るだ。これで三人とも熨(の)してしまった。これで警察が来なかつたら、あのハーフォーの奴を穴蔵から引つ張り出して、皮を剥(は)いでなめし革を作っていたところなんだ！

ノラ(怒って。)警察！ 嫌らしい犬！ いつだって金持ちの味方。弱い者いぢめ！ ヤンキーの肩を持ってアイルランド人を目の敵(かたき)にして！

サラ(話を聞けば聞くほど惨めになる。それが、喧嘩に勝つて欲しいという気持と混じり・・・訴えるように。)止めて、お母さん！ お願ひ！

クリーガン 棍棒を持った警官四人が、知らない間に後ろからやって来ていた。俺達二人を後ろから掴みかかって、道路まで引きずり出した。コンが掴んでいた奴を外して、そいつを殴った。俺も俺を抑えていた奴の腹に膝蹴りを一発食らわせた。相手はしゃがみこんだ。それからは大活劇だ。コンは有に二人分の働きだ。右、左と繰りだして、騎兵のように猛烈な声を上げて・・・

メモディー(呆然とした顔のまま。そしてテーブルを見つ

めたまま、突然独り言を呟き始める。(よくやった、メロディー少佐！ 総司令官は、お前の働きを特に目覚ましいものとする。タラヴェラでの活躍に負けるとも劣らずだ。フランヌ軍の方阵に突撃した、あの勢いだつたぞ。それにまた、突撃の雄叫(たけ)びが良かった。豚と一緒に床の上で育つたどん百姓、ネッド・メロディー。そのどん百姓から強請(ゆすり)たかりで旅籠(はたご)の主(あるじ)に成り上がった、ネッド・メロディー。その父親に相応しい口の悪い酔いどれ息子コン・メロディーの吐く汚い罵りの言葉だ。それを窓から見ていたあの女・・・貴婦人づらのあのヤンキーの淫売・・・「反吐が出る」と言わんばかりの、嘲りの笑いを浮べて・・・

ノラ(ゾツとして。(まあ、この人・・・気が違つてしまつた！

サラ(驚いて訝(いぶか)しげにメロディーを見る。一瞬怒りと同情の気持が目に見れる。衝動的に父親の方に進み。)お父さん！(それから表情が堅くなる。)気が違つたんじやないわ、お母さん。正気になつたのよ、生まれて初めて！(メロディーに。)そう？ 嘲りの笑いを浮べていたの、あの人。無理もないわ。いい薬よ、お父さんには。(それから仇(かたき)をうつかのように。)でも、こつちだつて仇はうつてある。そのうちすぐ分るわ、あの人に。その嘲りが自分に跳ね返つて来るのよ！

クリーガン(怒つて。)黙れ！ サラ。この人のことは放つておくんだ。今の話は殴り倒されてからこつち、ずつとやつている。思い出したように。まづ、あのハーフォードの女、

次に父親と豚の話、自分の名譽と誇り、それからあのサラブレッドの話だ。(クリーガン、元の話に戻る。)そう、とにかく相手は棍棒を持った四人。こつちの手に余つた。俺がぶん殴られて気を失う直前に見たのは、コンが三人がかりで殴られているところだ。が、とにかく俺達二人、アイルランドの名譽にかけて、最後まで立派に戦つたんだ。

メロディー(自分自身に嘲りの呟き。)御立派な、ラム酒浸(びた)りの騎兵隊員。土曜日の夜、淫売宿の前で大喧嘩。その後ゲーゲーと溝の中にゲロを吐く。そんなところだ。

サラ(ハツとなつて。)止めて！ お父さん。

クリーガン(憤慨して。メロディーに。)調子が良くなかつたんだ、こつちは。調子さえよければ・・・まあいい。意識がなくなるまで俺達をぶん殴つて、留置場まで運んで、そこへ閉じ込めた。今もそこにいた筈だ、もしハーフォードの奴が釈放を求めてやつて来なかつたら、とにかく金の力だ。ここで感謝するところなのか？ あんな奴に。あいつ、あの騒ぎが新聞に載つて、恥をかくのを怖がつたんだ！

(メロディー、氣違ひのような笑いをして、パツと立上る。目が眩んだのか、身体がぐらつく。頭を手で掴む。・・・それから、左手前方の扉に進む。)

ノラ コン！ どこに行くの。

(ノラ、後を追ひ、片方の腕を掴む。メロディー、ノラが誰か分らぬかのよう、乱暴に振り払う。)

クリーガン あんたのことが分らないんだ。今は怒らせては駄目だ、ノラ。ただ寢室に行こうとしているだけさ。(甘い言葉で宥めすかすように。)分つてますね？ 少佐。今何

をするのが一番いいか。

(メロディー、手探りをしながら扉に進み、退場。扉は開いたまま。)

サラ(心配だが、母親を慰めて。)(ジャミーの言う通りよ、お母さん。寝るんだったらそれが一番じゃない。・・・(突然恐怖に襲われる。)(ああ、どうしよう。サイモンに仕返しをするつもりなんだわ!)(サラ、扉に突進。足音を聞く。・・・ホッと安心して。)(違う。自分の部屋だわ。)(戻って来る。少し恥ぢている。)(私って馬鹿。病人をどうかするなんて、そんな人じゃないわ、お父さんは。いくら・・・。)(サラ、母親の腕を取り、優しく。)(立ってないで、お母さん、さあ、坐って。ひどく疲れている筈よ・・・)

ノラ(ひどく心配して。)(あの人があんな話し方をするなんて、私、一度も聞いたことがない・・・それにあの目付き。私、怖いわ、サラ。私、行って来る。ベッドに入っているかどうか、確かめなくちゃ。)(ノラ、素早く扉に進み、退場。サラもその後を追おうとする。)

クリーガン(乱暴な言い方で。)(ここにいるんだ、サラ。馬鹿なことをするな。突然我に返って、いきなりぶん殴って来るかもしれない。そうされても仕方がないだろう? この騒動の大半とはあんななんだ。あんなへの侮辱をはらすために出かけて行ったんだからな。)(クリーガン、中央テーブルの後ろの椅子に寝そべるように坐る。)

サラ(左手前方の小さなテーブルの後ろに坐って。怒って。)(よくまあ、他人のことに口を出すものね、ジャミー・クリー

ガン。あなたが遠い親戚だっていうただそれだけの理由で。

クリーガン(鋭く。)(フン、何だそれは。偉そうに!)(また一杯注ぐ。飲み干す。再び酔ってくる。)

サラ 私への侮辱は自分ではらして見せる! いいえ、もうはらしたわ! ハーフオードのあの親達を私、もうやっつけた。あんなことをしてあの女に笑われるなんて、全くの無駄骨。私はあの女をやっつけたの。最後に笑うのは私なの! (言い止む。強い、勝利の微笑みが唇に浮ぶ。それから、その微笑みが消える。当惑の笑いが出る。)(まあ、何て馬鹿な考え。私も狂っているんだわ、きつと。

クリーガン(酔っ払って。)(もういい。言つな。俺達二人で、あいつら全部を熨(の)したんだ。それから、コンは大丈夫。棍棒が頭にあたって、ほんのちよつとの間、変になっただけだ。こういうのは以前何度もお目にかかったことがあ77る。いや、自分でもなつたことがある。田舎の市場で、鞭で頭を殴られたんだ。その後のことは何時間何日も覚えていない。だけど他の連中の話によると、俺は会う人毎に俺の秘密を喋りちらしていたらしい。)(問。サラ、この話を聞いていない。クリーガン、心配そうに続ける。)(しかしとにかく、コンのお喋りを聞くのは厭な気分だ。あのハーフオードの女・・・蒼白い淫売とコンは言うんだが・・・あの女が、幽霊のように出て来てコンを嘲り笑う。だけど一番気味の悪いのは、あの馬、サラブレットの話だ。何て綺麗な踝(くるぶし)、何て上品な足、と言ったかと思つと、泣き出して、許してくれ、許してくれ、みんな私の恥晒しからこうなつたんだ・・・)

(クリーガン、迷信を信じている者のように、気味悪そうに

身を縮める。それから怒って、デカンターに手を伸ばす。
（イーイ、酷い夜だ、今夜は！）

（クリーガン、一杯注ごうとする。が、その前にノラ、左手前方の扉から走って登場。）

ノラ（息を切らして。怖がって。）あの人降りて来て・・・私のことを押し退けたわ。まるで私が見えないよう。納屋に出て行ったわ。ジャミー、見て来て。あの人のことを。

クリーガン（酔っ払って。）嫌だ。大丈夫だ。コンは。放つとくんだ。

サラ（擲（からか）うように。）可愛い恋人、愛馬のところへ行ったのよ。よく昔やっていたじゃない。酷く酔っ払った時に厩で寝て・・・馬もお父さんだと、蹴っ飛ばしもしない。

ノラ（ぼんやりと。）何てことを言うの、二人とも！あの人、決闘用のピストルが入っている引き出しを開けているのが私には聞こえたの。階段を降りて来る時、そのピストルの箱を持っていたわ・・・

クリーガン（足をガタガタと動かし、立上ろうとする。）イーイ、気遣いめ！

ノラ ハーフオードの家に馬でとって返すのよ。誰かを殺すわ！ お願いジャミー、あの人を止めて！

クリーガン（酔っ払いの怒鳴り声。）畜生！ よし、止めてやるぞ、ノラ。ピストルがあるうとなかるうと！（少しフラフラしながら、左手前方の扉から退場。）

サラ（身を固くして立つ。奇妙な勝ち誇ったような声で。）じゃあ、打ちのめされて尻尾を巻いていたんじゃないかな

だわ！（言ったかと思うと、突然自分の言った言葉を後悔して。）何てことを考えるの、私って！ 何もかもみんなぶっ壊して貰いたいんだわ、この私は。（ぼんやりと。）ああ、私、気が狂ってる。私、お父さんと同じ・・・

（納屋から、即ち右手前面の舞台裏から、押し潰されたようなピストルの音。隣のバーの騒音のため、そうはつきりとは聞こえないが、サラとノラには聞こえる。二人、ギクツとして立ち竦む。サラ、ヒステリックに呟く。）

サラ 違うわよお母さん、私、本気じゃない。本気で言ったんじゃない！

ノラ（怖れで感覚がない。馬鹿のように呟く。）ピストルの音！

サラ ね、お母さん、私、本気で言ったんじゃないの！
ノラ ピストルよ！ ああ、あの人、ジャミーを殺したわ！⁷

サラ（吃る。）いいえ、ジャ・・・ジャミーじゃない。（荒々しく。）ああ、待ってなんかいられない。私、自分で見に行く！（左手前方の扉に駆け出す。しかし怖れで立ち止まる。）駄目。怖いわ。私、怖い！

ノラ（馬鹿のように呟く。）ジャミーじゃない？ じゃ、誰？（ノラ、震え始める。恐怖に満ちた囁き声で。）サラ、お前・・・ジャミーじゃないなら・・・ああ、神様！

サラ 黙って、お母さん！ 納屋からの音で分るわ。（サラ、急いで元に戻る。テーブルを回り、左手前方に出て、母親の傍に来る。）誰かが納屋の扉に出た。ジャミーの足音よ。ここに言いに来るんだ・・・

ノラ そんなことはない！ あの人、決して・・・決して・・・

(二人、怖れで麻痺したように抱き合つて立ち、開いた扉の方を見つめる。間。この間、隣のバーからの騒音、大きく聞こえる。それからメロディー、扉のところに現れる。その後ろにクリーガン。クリーガン、メロディーの肩を掴み、料理屋などの用心棒が酔っ払いを小突くように、乱暴に部屋に押し入れる。つい今しがた起つたことのため、クリーガンは非常にショックを受けている。そしてその反動のようにメロディーに辛くあたつてゐる。クリーガンの片手には、決闘用のピストルがある。メロディーの顔は灰色の蠟(ろう)のよう。びつこを引き、両足は不確か。目も見えていない様子。完全に全身麻痺状態。)

サラ(衝動的に。)
お父さん! ああ、良かった!(サラ、一步父親の方に進む。次の瞬間、サラの表情、凍つたようになる。)

ノラ(安堵の噺り泣き。)
ああ、あなた、生きていたのね! サラと私、死ぬほど怖かつたわ。(ノラ、メロディーに近づく。)
コン! コン! あなた!

クリーガン(小さなテーブルの左手にある一番近い椅子に、メロディーを押して坐らせる。荒々しく。声は震えている。)
ちゃんと静かに坐つてゐるんだ、コン・メロディー。紳士らしくするんだぞ。いいな。(ノラに。)
さあ、連れて来た、ノラ。礼はいらない。全く酷いもんだ。

(ノラが近づき、クリーガン、退く。ノラ、両腕をメロディーに巻いて、優しくかき抱く。)

ノラ ああ、コン! コン! 本当に怖かつたわ!(メロ

ディー、ノラのこと分つてゐる様子なし。しかしノラ、夫が病んでゐる子供であるかのように、小さい声で慰める。)

クリーガン 厩にいたんだ。このピストルは手に持つて。もう一つは馬の傍、床の上に置いてあつた。(クリーガン、ブルツと震える。そして震える手でテーブルにそのピストルを置く。)
こいつは完全に気が狂つた。世話は妻と子供だ。私はもう沢山だ。気違いなんか構つていられるかつていうんだ!(クリーガン、バーに通じる扉へ進む。)

サラ 待つて、ジャミー。ピストルの音が聞こえたわ。あれは何だつたの?

クリーガン(怒つて。)
コンに訊くんだ。私は厭だね!(それから、驚き呆れた、そして怖れの表情で。)
馬を殺したんだ。気違いが!(サラ、驚いてじつとクリーガンを見つめる。)
私が行つた時、コンは蹲(うづくま)つて頭を垂れていた。傍には馬が死んでゐた。コンはこの世の終りのように泣いてゐた・・・(クリーガン、ブルツと震える。)
ああ、もうコンの見えない所に行かせてくれ。笑つたり歌つたりする、当たり前感情を持つてゐる人間の所へ。(バーへ通じる扉の錠を外す。)
ああサラ、心配しなくていい。こんなことは一言も話しやしない。街でやつた喧嘩の話だけだ。私が覚えてゐたいのは、あの話だけだからな。

(クリーガン、ぐいと扉を開ける。バーに入る。すぐに後ろ手に閉める。クリーガンの到着を歓迎する叫び声が聞こえる。)

サラ、再び扉をロツクする。メロディーを見つめながら、中央テーブルに戻る。ヒステリックな、嘲笑的な笑いが唇に現れる。唇が引きつつて震える。)

サラ 心配したりして、何て馬鹿だったの、私。世の中にお酒がある限り、そんな思い切ったことをする訳がないの。そう？ そうなの。馬なの？ 撃つたのは。

(サラ、ヒステリックに笑う。笑いを抑えられない。笑い声がメロディーの無感覚な身体を貫く。メロディー、椅子に、凝固したように身じろぎもしない。目は相変らずテーブルの上。)

ノラ サラ！ 止めて！ お願い。どうして笑えるの？ こんな時に。

サラ 私・・・私・・・止らないの・・・お母さん、ジャミーが言ったでしょう？・・・殺したのは馬だったって・・・(再び、止めようのない笑い。)

ノラ (ぼんやりと。) 止めなさいって言うてるでしょう！ (サラ、自分の口に片手で蓋をして、音が外に出ないようにする。しかし、肩は相変らず動く。ノラ、テーブルのあちらの椅子に、沈むように坐る。ぼうっとして呟く。)

ノラ あの綺麗な馬を・・・殺した。本当にすっかり気遣いになつたんだわ。

メロディー (突然喋り始める。目はそのままテーブルに。ひどい訛り。声は嘎(か)れていて、耳障り。) 笑わせておいたらいいんだよ、サラには。そうだよ、サラを責めることは出来ない。俺もな、腹の中では、ゲラゲラ笑っているんだ。自分自身を擲(からか)うためにやった馬鹿な冗談。あんなのは開闢(かいびやく)以来あつたためしはないだろう。

(二人、メロディーを見つめる。サラの笑い、止る。父親の訛りに驚く。じっと不思議そうに表情を固くして、父親を見

つめる。)

サラ 何？ 冗談で。馬を殺すのが馬鹿な冗談だって言うの？

(メロディー、一瞬身体を固くする。しかしそれだけ。答えもしないし、また目をテーブルから外しもしない。)

ノラ (怖くなって。) 見てご覧、サラ、あの顔を。まるで死んだ人だよ。(ノラ、手を伸ばし、メロディーが机の上に伸ばしている手に触る。優しく、訴えるように。) (ねえコン・・・あなた・・・止めて頂戴！)

メロディー (目を上げてノラを見る。表情が変わる。その顔に少しは残っていた威厳と上品さはすっかり消え、下品な、俗っぽい、締まりのない、嘲るような笑いが、膨れた唇に現れる。) 心配しないでいいんだよ。御陀仏になつたんじゃないんだ、俺は。ちよつと酒が入れば、またちゃんんと元気になるんだ。

ノラ (惨めに。どう考えていいか分らず。) 何て言い方、あれ。「俺」だなんて(訳註 原文は「方言なんか使って」)・・・私達を苦しめたいのよ。

サラ (心配がいよいよ募(つの)ってくる。しかし、嘲るように。) もう構わないでおきましょう、お母さん。こんな、面白がつてやっているのよ。あんなことをした後で、まだこんな心ない恥晒(はぢ)しなことを私達に・・・

ノラ (夫を庇(か)って。) いいえ、警察と戦ったとき、頭を殴られたせいよ。

メロディー (下品な言い方で。) 殴られたせい？ 馬鹿な！ あれはジャミー・クリーガンの出鱈目よ。本当に俺の頭を

狂わせるなら、もう五六発は必要だったさ。俺の頭は今、はつきり、くつきりだ。いやノラ、俺はあんたらを苦しめるためにこんな言葉を使っているんじゃない。それにサラ、面白がってやっているんじゃない。そんなことをやるのは、あの少佐の遊びだ。この言葉・・・これは俺の持って生れた言葉だ。あんたらの使っている言葉だ。確かにこれは、あんたらには奇妙に聞こえるだろう。無理もない。あの死んだ嘘つきの間違い、第七龍騎兵コーニリアス・メロディー少佐が使っていた言葉とは違うからな。

ノラ まあ、何てこと！ サラ、今の聞いた？

メロディー うん、本当に死んだんだ、あいつは。ただ、まだ残り香がある。あいつの誇り高い嘘がな。だけど、それも死んだ。死の臭いがしてきている。(メロディー、ノラの手を軽く叩く。本当の、心からの愛情に見える。) だから、心配しないでいいんだ、ノラ。もう、あの馬鹿な嘲(あざ)笑いであんたを苦しめるようなことはしないから。紳士面をすることもなければ、誇りだの、名誉だのと、ややこしいことも言わない。昔やったなんていう、決闘の話で威張ることもなし、ヤンキーの前で威張り腐って見せて、連中に陰で笑われることも、綺麗なサラブレッドを飲んだくれて乗り回すこともお仕舞だ。(噁り泣きを押して殺すように、ウイスキーをがぶりと飲む。) 当り前だ。あの馬は死んだんだからな。可哀相に。

サラ(だんだん耐えきれなくなつて・・・上ずつた声で。) どうして・・・どうして殺したりしたの、お父さんは。

メロディー どうして少佐は殺したのか、ということだな？

やれやれ、そんなことが分らないとは、あんたも思ったより頭が悪いね。あの馬こそ生き証人だったからじゃないか。少佐が自分で拵(こしら)えた自慢と夢と嘘で塗り固めた例の話を、本当に見せるためのな。あの男は、まづ最初のピストルで馬を殺し、次に、もう一つのピストルで自分を殺すつもりだった。だけどな、馬を殺したピストルが、もうすでに自分も殺してしまったことに気づいたのさ。あの気違いには、もう誇りなど残つちやいなかった。そして馬が死んだ時、自分も終つたと分つたんだ。終つたものをわざわざ殺すことはない。死人にピストルの弾(たま)を打ち込むなど、弾の無駄使用だ。(メロディー、擦(かす)れた声で笑つ。)

サラ(堪らなくなつて。) 止めて！ お父さん！

メロディー さつき、馬鹿な冗談だと言つたらう。そう、殺す必要もなかった。これが冗談さ。(メロディー、笑い始める。しかし、押し潰された噁り泣き。突然メロディーの顔から、今までの荒れた、嘲るような、乱暴な表情が消え、苦しみと悲しみの顔が現れる。そして、訛りでなく話す。ノラとサラにはではなく、自分自身に。) ああ、何という日だ。あの目！ カンテラに照されて、死んで行く、あの目！ 不思議そうに、悲しそうに。それでも私を信頼して。全く私を責めないで・・・怖れなど何もなく・・・誇り高く・・・私を愛して・・・そう、私が一緒に死んで行くのを、あの目は見ている。あれにはそれが分つていた。私を許してくれたんだ！(噁り泣き始める。が、ぐつと身体を曲げてそれを抑え、はつきりして、嘲るような訛りで。) 馬鹿野郎！ 今のは気の狂つた少佐の幽霊だ。糞つたれ！ ベラベラ喋りやがって。大抵

にしる！ この俺がいるんだぞ。もうこれからは、俺はゆつたり暮すつもりなんだ。死んだ奴などに邪魔されぬぞ。あのネッド・メロディーの息子として、それに相応しい生き方をするんだ。あの糞忌々しいイギリス将校の赤い軍服は、土の中に埋（う）めてやる。少佐の奴、うろつくなら、その軍服の墓のあたりをつろつくんだ。幽霊になって、喋ればいい。タラヴェラでも、スペイン貴族の女でも、フランス軍と戦った話でも、何でもやってくれ。（嘲笑って。）あの三人が言ってきたやつだ。少佐なんて嘘っぱちだ。軍服だって、盗んできたものさ。ウエリントンのもで戦ったなんて、よく言うよ、とな。そう、俺もよく知っている。あいつは大嘘つきだったよ。

ノラ コン、もう馬のことを思い出して悲しむのは止めて。

馬ならまた飼えばいいの。私が何とか・・・

サラ お母さん、黙って！（メロディーに。怒って。）お父さん、もういい加減にこんな芝居は止めて頂戴！

メロディー（荒々しく。）これが芝居なんだって？ これは芝居じゃない。あなたにもすぐ分る。少佐なんだ、芝居をしていたのは。あの古いぼれの気遣いめ。一生涯芝居をして、自分を騙していた。しかし俺は違うぞ。今日からは俺が、生まれついた丁度その地位に相応しい生き方をするんだ。（サラに狡い嘲りの笑いをして。）なあサラ、俺にまだそんな気があるうちに、あなたに父親らしい忠告をしておいた方がよさそうだな。あなたには偉大な野心がある。他人を押し退けても、この世で伸（の）し上がって行こうという御立派な野心だ。いいか、あなたには、正真正銘のおじいさんの血が流

れている。おじいさんこそ、あなたのお手本なんだ。おじいさんは自分より下の者達には何の感情も持たなかった。連中はあのおじいさんに色々助けにもなつたろうにな。それから、自分より上の馬鹿連中からは、絞り取り、騙し取り、だ。このことにかけて、アイルランドで、おじいさんの右に出るものはいない。最後には大地主で、城を持ち、銀行には腐るほど金を貯めたのだ。

サラ（ぼんやりと。）お父さんなんか大嫌い！

ノラ サラ！

メロディー（これが聞こえなかつたかのように。）俺には分っている。おじいさんが生きていたら、お前にきつと忠告する。上のあの若いのを、ベッドに誘い込む。これが第一歩だつてな。よろしく誘惑が成功したら、今度は泣くんぞ。そして結婚を迫るんだ。「あなたと、そして私の名譽を守って」とか何とか言つてな。あいつは馬鹿だ。潔白だの夢だの、そんなことで頭がいっぱいだ。それに、少し狂っている。おまけに詩人の氣質（きしつ）まであるときている。あなたを捨てることはしない。ああ、後は簡単さ・・・

サラ（もう堪らなくなつて。）もうそのお芝居を止めさせて上げる！ その訛りの話し方もね！（メロディーの方に寄つて、嘲るような仕返し言葉の吐く。サラの方も方言で。）ご忠告、心から感謝するわ、お父さん。でもベッドに誘うのはもうやっちゃったわ。お父さんが警察と喧嘩をしている最中にね！

ノラ（この言葉の結果を怖れて。）サラ！ 止めなさい！ 何ていうことを！

メロディー（椅子の上で、身体、硬直する。下品の薄笑いの表情がその顔から消える。以前の顔に戻る。両眼でサラにじっと脅迫の凄みをもってあたる。訛りで話すのは難しく、ゆっくりと言ふ。）（そうか、やったのか。おめでたい限りだ！俺も知っておくべきだったな、あの気遣いの少佐殿が、あなたの恥を雪（すず）ごとと折角出かけて行つても、あなたの目論見を阻止など出来る筈もなかったつてことをな。全くもつておめでたい。俺も心から誇りに思わなきゃならん。今夜という晩に、ヤンキー紳士が一人、俺の淫売娘に誘惑されるために、身を屈めたとあつてはな！

（メロディー、サラの目をじつと見つめながら、椅子から立上り始める。右手がテーブルの上を探り、ピストルを取り上げる。メロディー、自動機械のように、サラの心臓を狙う。両眼は冷く、死んだもののように。ずっと昔戦つた決闘の時に、さもあつたであるうような、非情さ。サラ、恐怖に囚われる。しかし、怯まず立っている。）

ノラ（恐怖に襲われ、椅子から突進し、メロディーの腕を掴む。）（コン！ あなた何を！ サラを殺そうつて言つもの！（メロディーの顔に呆然とした表情が現れる。力がなくなり、椅子に沈むように坐る。ピストルは指から離れ、テーブルに滑り落ちる。震える溜息が出て・・・噎（しゃが）れた声で笑う。）

メロディー（嘲るように。）（サラを殺す？ 馬鹿を言つた、ノラ。俺はただ、この子にお祝いを言いただけさ。

サラ（どうしようもなく。）（ああ！（中央テーブルの後ろの椅子に、どつと坐る。両手で顔を覆う。）

ノラ（見当外れとは気づかず。心からメロディーを安心させるために。）（大丈夫なのよ、コン。サイモンは出来るだけ早くこの子と結婚したいつて言つてるの。サラがそう、私に話したわ。

メロディー（ほほう、それは親切だ。いい娘じゃないか、なあサラ。自慢にしなきゃいけないよ、サラのことを。この子を何が何でも、好きなようにやらせてやらなきゃ。どんな偉くなって、そのうち立派なレディーになるぞ、きつと。

ノラ（素直に。）（ええ、そう。きつと。

サラ（お母さん！

メロディー（あの男には妙な夢がある。誇り高い、高貴な夢だ。まづそいつを根っこごと引き抜いてしまわなきゃならん。大仕事だ。だがサラならうまくやつてのけるさ。そう、一リング儲けるために、一ポンド賭けたつていい。俺が一ポンド持つていけばの話だがな。サラはきつといつか、綺麗な絹の服を着て、サラブレットつきの黒人の馭者の馬車でドライブするようになるさ。鼻をつんと上に向けてな。住む家も強気（ごうぎ）なものさ。森、緑の牧場、それに、湖つきの宏大な地所。その中のお城のようなヤンキーの大邸宅に住むんだ。（嘲るようなくすくす笑いで。）（そうそう、まづ手始めにあの若いのに、少佐の土地を結婚の贈物としてやることにしよう。そこに小屋を建てるといい。詐欺師のヤンキー達が、あの気遣い野郎に騙して買い取らせたあの土地をな。（メロディー、決闘用のピストルを見る。嘲るように。）（死んだ奴のことを言やあ、あいつの魂なんか、地獄にでも行け、だ。奴のピストルで俺は何をやつていたんだ？ やれやれ、

俺はピストルなんざ、いらぬ。げんこつで充分だ。まあ扱い易ければ棍棒はあつてもいいがな。今晚ジャミーと俺とで一連隊総なめにやつたじゃないか。

ノラ（しつかりと。）そうよ、あなた。もし相手があんなに多くなかつたら・・・

メロディー（ノラの方を向き、ニヤリと笑つて。）そうだ、そう来なきやな、ノラ。ああ、世界中でこんなに忠実な女房なんて、いやしないぞ。（間。ノラを見つめながら。それから突然、ノラを唇にキスする。荒々しく。しかし、奇妙な、本物の優しさで。）俺は愛しているんだ、あんたを。

ノラ（驚いて。予想もしない嬉しさで。）ああ、コン！

メロディー（再びニヤリと笑つて。）俺は前から何度も「愛している」と、言おうと思つていたんだ。あの少佐の馬鹿が、威張つてやがつてな。奴に抑えられていたんだ。（メロディー、ノラを引き寄せて、髪にキスする。）

ノラ まあ、髪にキスを！

メロディー 当り前だ。何て綺麗な髪だ。少佐の奴が言つていたことはみんな忘れちまえ。何が紳士だ。紳士づらの嘲笑いは、奴と一緒に埋（う）めちまつんだ。俺が本当のあんたの夫だ。あんたがこれからはこの宿屋を取り仕切る。もう女中じゃないぞ。ミッキーは首にして、この俺がバーテンをやる。あの親父の息子らしくな。

ノラ 駄目！ そんなこと、決してさせない！

メロディー（狡賢く笑つて。）そうか。とにかく俺はやると言つたんだからな。駄目と言つたのはあんたの方だ。覚えといてくれよ。確かに俺は働くのは嫌いだ。それに、ウイス

キーの傍に俺を置いておくのはあまり得策じゃないかもしれん。（唇を舐めて。）ああ、それで思い出したぞ。何時間俺は、酒から離れている。喉がカラカラだ。

ノラ（立上りかけて。）今私が・・・

メロディー（ノラを押し、椅子の腰掛けさせて。）いい。仲間とやりたいんだ。歌つて、踊つて、ゲラゲラ笑つてな。バーに行く。ジャミー・クリーガンとバーにいる奴等全員で、さつきやつた警察との大立ち回りを祝わなきや。（メロディー、立上る。以前の軍人らしい姿勢は消えている。大きな毛深い手が両方、だらりと垂れ下がっている。その破れた皺くちゃ、泥で汚れた軍服を着た姿は、まるで道化のよう。）

ノラ あなた、もう寝なきや駄目よ、コン。殴られた頭はボンヤリしているんだし・・・

メロディー ボンヤリ？ 飛んでもない。今までは、あの少佐の奴が俺を苦しめていた。気違いなのを取り繕うために、俺に嘘ばかり言わせて。奴が死んで、頭がハッキリだ。こんなにハッキリしたことは今までなかったぞ。（ニヤリとする。）それに、疲れてもいない。新しく生まれたばかりの人間だからな。じゃノラ、もつベッドに行くんだ。お休み。

（メロディー、屈んでノラにキス。この時までにはサラ、手から、涙に濡れた顔を上げていて、絶望の、奇妙な、苦しそうな目付きで、メロディーを見つめている。メロディー、サラにもニヤリと笑う。）

メロディー サラ、あんたも寝た方がいい。酷い一日だったな。きつと夢も見ず、朝までぐっすり眠る筈だ。

サラ お願ひ、お父さん。私、耐えられない。・・・前の

お父さんに戻って！

メロディー（機嫌よく、脅しの言葉を言う。）そんな口はきかせないぞ。自分の父親を恥ぢるとは何事だ。気をつけた方がいい。俺はあの少佐とは違う。あいつは紳士だ。子供に手をかけるようなことはしなかった。だがな、あの死人を蘇らせようとしたりすれば、それはこの俺への侮辱だ。行儀のためにぶん殴ってやる。分つたな。

（サラ、メロディーを見つめる。悲しく絶望的。メロディー、バーへの扉の方に行き始める。）

サラ（パツと立上る。）お父さん！ あんな飲んだくれの屑（くづ）の連中のところに行かないで！ あの連中にお父さんの姿を見せちゃ駄目！ ここで好きなだけ飲めるわ。ジャミーにも来て貰って、一緒に。あの人と笑って、歌って、タラヴェラを祝えばいいでしょう？

メロディー（乱暴に。）タラヴェラ？ 糞食らえだ！（目が鏡に当る。鏡に向って、嘲るように。）やれやれ、この鏡さえなきやな。あの気違いの馬鹿、いつもこの鏡の中の自分の顔を見ては、バイロンを吟じていやがった。自分がいっばしの詩人氣取りで。そして御大層な紳士のつもりで・・・（メロディー、ポーズを取る。それは一、二幕での鏡の前のポーズのパロディー化したもの。そして訛りを混ぜたチャイルド・ハロルドの例の一節を吟じる。）

「俺は世間を、世間も俺を、相手にしたことはなかった。俺は世間の奴らに、おべっかを使ったことはない。

やつらが崇（あが）め奉（たてまつ）っているものに、連中と調子を合わせるために、

一緒に膝まづくことなど、したこともない。

お愛想笑いに自分の頬の皮を緩めたこともなければ、

連中が誰かに、声を揃えて讃歎の声を上げる時、

俺はただ、それを冷やかに眺めてきた。

連中に俺を、その仲間の一人だと思わせたりするものが。

俺は立っている。きやつ等に交じって。

だがいいが、俺は奴らの中の一人じゃないんだ・・・

（メロディー、侮蔑的に馬鹿笑いする。）やれやれ、少佐の野郎、全くお笑いじゃないか。サーカスの道化でもやっていりや良かったんだ。あいつの魂なんぞ、地獄の火に焼かれてしまえ！（突慳貪（つつけんどん）に。）まあ、死んだ奴などどうでもいい。

（バーから騒音、丁度わつと大きな笑い声がる。どうやらジャミーの話が最高潮に達した所らしい。メロディー、鏡から目をバーへの扉の方に向ける。）

メロディー ところが俺は生きているぞ。俺は孤独じゃない。俺を仲間に入れてくれる群衆があるんだ。俺は連中の中の一人、あいつらの一員なんだ・・・少佐が長いこと、俺にやらせて来た、孤独な犬の生活を、これから埋め合わせなきやな。

サラ（メロディーの方に進む。懇願するように。）お父さん！ もうその恥をかいたら、逃げ道はないのよ。お父さんは今酔ってないわ。後で、酔っていたせいだつて言えないのよ。もうその後は、死んだと同じ。あの馬の傍で自分にピストルを撃つたのと同じになるのよ！

メロディー（嘲って。ノラにウインクして。）聞いたか、

ノラ。この子は、俺が酔っていないと言って、責めているんだ。いい、いい、すぐお望みの状態になるんだから。(メロディー、扉のノブに手をかける。)

サラ お父さん！

ノラ(これまでに肉体的な疲労が極度にまで達している。殆ど言われていることが聞こえていない。まして、理解など。物憂そうに。)サラ、お父さんを放っておいて。それが一番よ。

メロディー(またもう一度バーから大笑いのどよめきが聞こえる。)(いいところを俺は逃しているぞ。よし、こつちだつて大笑いのネタがあるんだ。それをやれば、笑い声で家の天井が抜けるぞ。少佐が死んでくれたお陰で、俺は民主党に入(い)れられる。アンディー・ジャクスンに一票を投じるんだ。俺のような平民の出なんだからな、あいつは。ザマアミヤガレ！(連中を笑わせることが出来るという期待で。)(よし、見てろ。今すぐ聞かせてやるからな。(メロディー、ノブを回し始める。))

サラ(メロディーのところへ駆け寄って、腕を掴む。)(いえ、行かせませせん。お父さんの誇りは私の誇りでもあるの！(サラ、食べる。)(そう、お父さん、私を許して。私がいけなかった。いつもお父さんのことを侮辱したり、嘲笑ったり。でも、それは中に嘘がある時だけ。本当のこと。タラヴェラも。ウエリントンも。公爵が勇気を褒めたことも。公爵の軍隊の士官だったことも。スペインでの女性関係の話だって。心の奥底では、みんな私の誇りだった。私はお父さんの娘だって。だから行

かないで。私、お父さんの言うことを何でも聞く。イモンにだって言う。あの人の父親の、お父さんへの侮辱。あんなことがあった後では。私、とてもその卑怯な息子などと結婚出来ないって！

メロディー(サラの言葉の一言一言で、強気でいた姿勢が崩れて行く。最後には自分を隠し、防御するマスクが無くなり、以前のメロディーの顔になるまで。メロディー、野蛮に、絶望的に、叫ぶ。あたかも最後の頼みの綱が切れたかのように。)(サラ！ お願いだ！ 止めてくれ！ 行かせてくれ！

ノラ(物憂そうに。)(お父さんを放っておいて上げて。それが一番いいの。)

(メロディー、一瞬のうちに恢復し、嘲笑う百姓に戻る。)

サラ(希望を失う。辛く、叫ぶ。)(ああ、お母さん、どうして黙っていてくれないの！

メロディー(荒々しく。)(あんただろう、黙っていなきゃならんのは。さつき言うておいたぞ。俺を邪魔して死人を蘇らせようなどとしたら、どつするか。)

(メロディー、サラの横っ面を殴る。本気ではない。どちらかというと、遊び半分に押しした程度。だがサラ、中央のテーブルの端まで吹っ飛ばす。)

ノラ(びっくりりして、呆気に取られて。)(まあコン、何てことを。(怒って。)(サラを殴るって、どういうこと？ 他

のことは何でも許すけど、私。メロディー(上機嫌で。)(黙るんだ、ノラ。二度としやしない。(優しくサラに笑いかけて。)(これで分つたな、サラ。もう二度とあんたは、死人を蘇らせようとはしない筈だ。そ

れから、二階のあの男と結婚しないなんて話を、俺には聞かせるな。全くあなたには名譽というものがないのか？ あの男を誘惑しておいて・・・父親として、あんたら二人の首根っこを掴まえて、教会へ引つ張って行かなきゃならん。それでやっとあの男も名譽ある紳士になれるっていうもんだ。(メロディー、クスクスと笑う。それから、二人を擲(からか)うように。)さあ、これでレディー二人のお許しを戴いて、バーの連中の仲間に加わるとしよう。

(メロディー、扉を開け、バーに入る。後ろ手に扉を閉める。酔っ払い達の歓迎の唸り声、一斉に上る。バーやテーブルの上でコップを叩く音。それから静かになる。どうやらメロディー「静肅に」と片手を上げたらしい。その後メロディーの、みんなを歓迎する言葉。みんなのそれに対する反応。ライリーのバグパイプの音もそれに加わる。サラ、中央テーブルの横に突っ立ったまま。両肩は落ち、頭は下り、床を見つめている。)

ノラ(再び、溜りに溜った肉体的疲労に押し潰されて、溜息をつく。)殴られたって、気にしないのよ。あの人、まだ頭がおかしいんだから。でも、飲んで、歌って、笑って、それからぐっすり寝れば、明日の朝はまた元のあの人に戻るわ・・・きつと。

サラ(力なく・・・母親に言うというより、独り言を声に出して言っているような調子。)いいえ、戻らないわ。とうとう打ち負かされたんだわ。そして打ち負かされたままの方がいいと思ってる。ああ、私、出来るだけのことはやった。何故あんなことを。よく分らない。私には誇りがあるんだわ、

お父さんの。(サラ、頭を上げる。表情が堅くなる。苦々しく。)いいえ、あの死んだメロディー少佐の。そう、私にはその誇りがあったの。今はもう死んでしまった・・・そう、その方がいいの・・・サイモンのいい奥さんになるわ、私。(突然、隣のバーの騒音が止む。誰かが「シート」と言って、みんなを静めた様子。次に、その沈黙の中に、メロディーの声がはつきりと聞こえる。大きな乾杯の発声。「次の大統領、アンディー・ジャクソンに、乾杯！ オールド・ヒッコリー、万歳！」それから、みんなの「ハルル」その他の声、壁を揺るがす。)

ノラ まあまあ、アンディー・ジャクソンに乾杯したりして！ あの人の声を聞いた？ サラ。

サラ(表情堅く。)誰かの声は聞こえたわ。でも知っている人の声じゃなかった。それに知りたくもないわ。

ノラ(サラの言葉が聞えなかったかのように。)ああ、あれでいいんだわ。もうみんなは、あの人を嫌うことはないでしょう。(言い止む。・・・ノラの、疲れた、囊(やつ)れた顔が、急に恥づかしそうな、優しい表情になる。)あの人、私を愛しているって言った。あれを聞いた？ サラ。口にキスしたのよ、あの人。そしてその後、髪にも。見た？ お前。(ノラ、小さな、優しい笑い声を出す。)そう、あの人、本当に、すっかり気が狂ったんだわ。

サラ(母親を見つめる。表情が柔らかくなる。)いいえ、お母さん、あれは本気。そしてこれからはずっと本気よ。お父さん、これからは遠慮なく愛情を表せるの。(サラ、奇妙な微笑。)その邪魔をしようとしたんだわ、私。殴られて当

然ね。

ノラ（自分の考えに没頭している。）でもあんな、みんなを擲（からか）うようなことを続けていたら・・・方言で喋って、（バーの方を顎で指して。）みんなと同じような振舞いをして・・・でも、いいわ。それであの人の独りぼっちが直るのなら。そう、今までずーっと、誇り高く、たった一人で生きて来たんだもの。（誇りをもって。）そう、私は何だっで構わない。あの人の気まぐれについて行くわ。それが私のあの人への愛。今までだって、ずっとそうだったもの。（ノラ、微笑む。）ええ、私、誇りなんか全然ないわ・・・その愛以外は。

サラ（母親を見つめる・・・心を打たれて。）お母さんて、奇妙な人、高貴な人ね。私もそうなるよう努めるわ。（サラ、ノラに近づき、抱く。・・・優しく微笑む。）サイモンには聞こえてないわ。あのピストルの音、バーの騒ぎだって。私が出て来る時、赤ん坊のように眠っていたもの。大砲が鳴ったって、起きやしないわ。

（バーで、ライリーがバグパイプを鳴らし始める。みんな踊る。その床を叩く足音が聞こえる。一瞬サラの顔、再び堅く、辛いものになる。サラ、嘲るように言おうと試みながら。）

サラ パッチ・ライリーのバグパイプ。あの人、自分では分かってないでしょうけど、あれは死んだ人へのレクイエム。

（サラの声震える。）タラヴェラの英雄よ、安らかに！（サラ、ワツと泣き始める。そして母親の肩に顔を乗せて噁り泣く・・・自分で分らず。）ねえお母さん、どうして私、泣いているの？ どうして私、あの人の死を悔やんだりする

の？

ノラ（すぐに自分の疲労困憊を忘れ、全身でサラを助け、慰めようとす。）泣かないの、サラ。ね、泣かないの。疲れただけなの、お前は。さあ、ベッドに行きましょ。着物を脱がせて、蒲団をかけて上げるわ。（サラを起そうとして・・・擲（からか）うような調子で。）泣いちゃ駄目。好きな人がいるんだよ、お前には。二階のあの人の、何て思われるかしら。

（幕）

平成十四年（二〇〇二年）十月二十二日 訳了

<http://www.aozora.gr.jp> 「能美」の項 又は
<http://www.01.246.ne.jp/~tnoumi/noumi1/default.html>